三は鞭撻法と云ふて、六本或は八本の細く綯ひたる索にて鞭撻する方法。第四は充血器一名眞空氣を用ひる方法。第五は灼熱法と云ふて釦形の平滑なる鐵器を熱湯中に入れて暖めこれを陰莖に當る方法であるが、此等は皆熟練なる技術を要して、一旦誤てば反つて終生不具に陷らしむるの危險があるもの故、發育不全の高度なるものは、專門大家に就て手術を受くるが良い。

◆自己療法　併し其症の輕いものは、また病後の發育不全のものは自己療法にて之を癒すことが出來る、これは營養療法と稱するもので、種々の滋養食殊に飲欲催進の食物、この催飲的食物に就て諸家の實驗によれば、鳥類肉は一般に色慾を催進するが、燒牛肉殊に良く肥えたる牛肉の表面を燒きたるものは最も生殖力を強め調理の宜しき肉汁豚肉の各種調理、鶏の肉、黃鶏、鷄肉、鷄鳥肉、鳥卵、貝類などは宜しく、殊に貝類は殆ど催飲劑と云ふても可なる位である、また鷄肉は獨り生殖力を強むる計りで無く生殖器の濫用による衰弱にも効がある、蔬菜其他の食物にて春情を刺戟するものは、葱、山葵、胡椒、肉豆蔻、薄荷の如き香料、また塘蒿、防風、薑類殊に松蕈、蓴菜、豆類、小麥粉、パン、桃、バナナ、鳳梨等、生殖衰弱に効ある故、此等のものを適宜調整して日常用ひるが宜しく、それから盛んなる運動、冷水浴、冷水摩擦等總て身體を强壯ならしむる方法を行ひ、其反對に精神は力めて平和安靜たらしむると追々に擴大の効を奏するものであるが、もしこれ丈けにては奏効著明ならざる場合には、亞砒酸の少量（ホーレル）氏液〇、四を一日量とす）の持續的服用を行ふか、或は「カルビタミン錠」の內服を兼ねてST液の注射を行へば、假性發育不全症のものにあつては優に回春の効を奏するものである。

◆精神療法　それから發育不全の一症に、所謂消學的の思想則ち色慾に關する思想は、悉く不健全なりとの概念よりして、常に力めて之を忌避したるより起る所の一種珍妙なる者もあるが、此等の人には單に生殖思想を鼓舞する方法、即ち力めて淫卑なる事實を見聞せしむる丈にても充分効力があるが、若しこれにて効の無き場合には按摩法を行へば優に効を奏するものである。

第四十二節　包莖と其治療法

◆包莖の意義　包莖とは龜頭が包皮で被はれ居つて平素は露出せざるものゝことで、日本にては之を病的と心得て居るが、唯包莖丈けでは病的では無くして生理的のものである、世界の內に龜頭露出の多いのは、日本人

猶太人等で、歐米人及び清國人などには、反つて此所謂包莖なるものが多いが、此包皮が勃起時に龜頭を退却することの自由なるものならば、少しも病的でなく生理的のものである。日本人や猶太人には何故包莖が少いかと云ふに、本邦古代の習慣は是を以て畸形を認めたる結果、幼兒の時に其母親が、鋏刀或は茅、または竹のへゝき等を以て切除せるもので、これが遺傳となつたとのことである。現に今でも山陰の或地方には未だに此風習が殘つて居るさうである。

また猶太にては少年時の寺院にて僧侶に切除して貰ふものゞ之を割禮と唱へ、埃及の女子の陰唇を切り除る所謂割去と、二大奇習として稱せらるゝものであるが、此等風習の爲めに、此の二國には包莖が少いとのことである。尤も包莖の一種に嵌頓包莖と云ふものがある、これは交接其他の暴力にて退却せる包皮は再び龜頭に進み能はざる程包皮口の狹少なるもので、これは病的に屬するものであるから、早く切開手術を受くるの必要がある。

◆包莖の害　普通の包莖は前に述ぶる如く生理的であつたのが、是等因習の久しき遂に包莖は花柳病に感染し易く、また陰莖癌も多くは包莖に來り、其他快感を減少し、手淫の誘因となり、早期射精の原因となり或は遺

精虫の原因となり、又或は發育不全の原因等になる許りでなく、包莖性の生殖神經衰弱或は腦神經衰弱症を來すものもある、アウトハウスの如きは、包莖は癲癇の原因となることがあると云ふて居る位であるから、包莖ある人は成るべく手術を受くるがよい、併し龜頭を退却することの容易なるものは、強ち手術するの必要を認めないのである。總て小兒時には多く包二であるも長ずれば然らざるもの多き故、よし手術するにしても、成長を待ち、大人に至つても尙ほ包莖の退却せざる時に至つて始めて爲すべきものである、また小兒時にあつては放尿の際啼泣するやうなことがあつたならば、其包莖に因するや否やを調べ、若し包莖の爲めであるならば早速手術を受けねばならぬ、何となれば、この泣くのは尿の爲めに刺戟さるゝので、若しそれが度重なると其部に炎症を來す許りでなく、臍「ヘルニア」即ち俗に云ふ出臍になつたり、陰囊「ヘルニア」などを起すことになるから早く手術を受くるの必要があるのである。

◆療法　包莖の手術は、甚だ簡單なもので、局處麻醉にて少しの苦痛なく十分其目的を達するものである、そして其時日は長くも十日を出でざる間に癒るものである、併し手術者が不熟練であると、術後勃起時に疼痛を起すやうなことがある故、熟練者即ち信用ある醫師を選ぶと云ふことは必要の注意である。

第四十三節　龜頭の粟粒狀發疹と其治療法

龜頭の周圍に粟粒狀の疹を發することが間々あつて、これを梅毒性の發疹と誤認して心配する人もあるが、これは多くは格別の障害を來さず、間も無く消失するものであるから心配に及ばぬ、けれども若しそれと同時に他の部にも巣狀があるとか、股の附根に腫物あるとか云ふならば、打捨て置かずに醫療を受けねばならぬ。

第四十四節　陰部惡臭と其治療法

男子には或る病氣、女子にはバルトリン氏腺分泌液の異常則ち俗に云ふ裾臭からして厭ふべき惡臭を放つものがあるが、多くは不潔から來る從つて其療法も清潔が眼目であるから度々入浴してホルボース石鹼等で能く洗ふに越したことはない、又子宮內膜炎及子宮癌等で惡臭のあるのはこれは別物に屬し原病の治療が肝腎である。

第四十五節　陰部糜爛と其治療法

之れも矢張不潔から來るのが多いものですから五十倍乃至百倍の石炭酸水か「リゾール」水を以て洗ひ沃度ホルム「ブルマトル」、「ヨドル」等を撒布すると宜しい、尤も下痢等の爲めに糜爛せるものにあつては、之れ丈にては迚も治らぬ、また唯の糜爛にても頑固陳久なるものにあつては、硝酸銀膏を以て一旦腐蝕するの必要がある。

第四十六節　陰莖直と其治療法

◆症候　強直とは陰莖の不自然にして、不隨意なる勃起を意味するもので、間隙を隔てゝ起るものもあり、或は常に長く勃起して疾病の變態を成立するものもあり、また勃起には快き感情を伴ふものゝ、反つて苦痛を感ずるものとの區別あるが、多くは長く勃起して苦痛を感ずるものである、一千九百〇四年四月發刊の獨逸醫事雜誌にカラウエー氏の通信せる一例の如きは最も稀有のものである、其患者はいたく酩酊の際一婦人と三四

回連續して房事を行ひたるも勃起の沈退なくして翌日に至りたれば、大に驚きて之れを沈退せんとして、一切の手段を盡したるにも拘らず十六日間勃起が連續したので、已むを得ず外科醫は、刀を以て陰莖の直下を截開したるに、眞に多量の黑血を出して、陰莖は平靜に復したるが、其後此人は遂に陰萎に陷づたと云ふことである。

◆原因◆ 此强直症の原因となるべきものは、局部の不潔、濕暖なる着服殊に刺戟する衣服、餘りに頻繁なる溫浴の如き、また淋疾、潰瘍、嚢胞、結石、痔疾、脊髓病の如きも原因となることがあり、更に奮性の食物、熱き飲料「アルコール」性の飲料もまた其原因となることがある。それから藥劑にては芸香、燐、阿片の如きは斯る症狀を起さしめ、また人によりては、陰猥なる書を讀み、散惚卑猥なる談話を聞き、または醒覺して尙ほ臥床にあるなども此症の原因となることがある。

◆療法◆ 治療法は其原因を去るのが一番だが、度々斯樣の症狀を呈する人にあつては、果實、蔬菜類を立食して便通を良くし、また局部を冷水にて洗ふが良い、若しまた腦病の爲めに來るものならば溫浴を行ひ、溫湯に浴し、或は溫蒸氣の上に跨る等にて癒ることがある。また甚だしく頑固なる場合には、陰莖に水蛭を貼するも一法である。藥物にては臭素加爾謨（處方前の陰慾制止藥參照）を內服するか、或は叶酒石（〇、一）を與へて、嘔吐を催さしむるが宜しい、そして一旦平癒に趣いたならば、力めて秩序ある衛生的生活法を取らしめなければならぬ。

第四十七節　陰莖麻痺と其治療法

陰莖麻痺とは、血液の輸入や射精には少しも障害無きも陰莖の强實とならざるものゝことであるが、それは壯年ならば多淫によるか、老人ならば一般麻痺假へば中風などの前徵として來ることがある。

療法は、ST液の注射がよろしい、時には溫浴または電氣を通じて治療することあるも、一般麻痺の前徵として來るものにあつては度々起りて、到底全癒することは六つかしい。

第四十八節　陰莖彎曲と其治療法

陰莖の彎曲は皮膚若しくは筋纖維の收縮から起ることあるが、又手淫の結果として來ることもあり甚だしい

のは時として交接不能を來たすこともあるが、これが治療法としては手淫を廢め、褌の壓迫を避け直立せしむる習慣を附けることが大切で又收縮した部分があつたら、外科醫に賴み切開手術を行ひ貰ふの必要がある。

第四十九節　毛切れと其治療法

毛切れは、多く亂暴なる交接によりて起るものであるが、これを治療するには房事を愼み、局部を清潔にして、バルサム軟膏を塗布すれば數日にして治癒するものである。

第五十節　陰囊弛緩と其治療法

陰囊の弛緩は不健康の徵候であつて重症の疾患後か或は身體疲勞の爲めに起ることがあります。また貧血症營養不良者、老人等には永久的に弛緩を來たすことがある、格別治療を要する程のものではないが冷水の灌注などは收縮を來すものでまた電氣の流通などもよろしい養生法としては規律ある運動滋養食の攝取等一般强壯療法を守るが肝腎である。

第五十一節　陰囊象皮病と其治療法

陰囊象皮病は主として西印度諸島中のバルバドース島にある、其原因は「ヒラリヤ」蟲なりと云ふも果して然るや否やは不明である。此病に罹れば陰囊甚だしく著大して硬固となりて恰も象皮の如く、セボード博士の手術せるものゝ如きは、其全量、十二貫六百目に達せりとのことである。我國にありては、佐藤博士の手術せるものにて、肥前島原の人、齡四十三の患者、陰囊の周圍四尺八寸、縱二尺、重量八貫目のが今日迄の諸報告中最も大なるものであつた。

第五十二節　陰囊痒疹と其治療法

陰囊の痒疹は多くは不潔から起るものであるが、また老人に特發するものもある。此等のものは局部を清潔にして、一日一二回醋或は水に少量の「ラウダニウム」を混じて洗ふか或は「クエンサン」軟膏、硫黃軟膏等を塗布するも宜しい。

陰囊瘙疹の中に、頑癬なる一種がある、之れは「トリコヒートントンズランス」なる黴の爲めに起るもので頗る頑固なる症である。之れを治するには、十倍のサルチル酸アルコールを布片に浸して陰囊にあて、グッと押へ附けて置くか、また刺戟の少きものを好むなら大黄末を醋に浸して塗布するか、或は沃度丁幾を一日二三回塗布するのも一法であるが、左の處方を用ゐるも亦有効なる療法である。

クリサロビン　二、〇
右混和塗布料

或はまた

▲臭亞末　三〇、〇
醋　適宜
右泥狀になし塗布す

第五十三節　陰囊ヘルニアと其治療法

陰囊「ヘルニア」と云ふのは腸の一部が陰囊に下りたるもので、甚だしきは小兒頭大位の大きさに達するもの

のである、これは小さなものは整復せしめたる後、帽腸帶をかけて居れば宜しいが、陳久のもの又は大なるものにあつては外科手術によらねばならぬ。

第五十四節　陰部水腫と其治療法

◆原因　陰囊水腫は、陰囊内に水の溜まつて大きくなつたものゝことであるが、これには陰囊の組織の中に液體の集積するものと、陰囊の漿膜中より液體を分泌するものと、精系帶の中に液體を集積するものとの三種があつて、睪丸の打撲、不適當なる脫腸帶により起るもの、或は梅毒性、結核性の睪丸または副睪丸炎等の爲めに起ることがある、此の症は其後に蠟燭を燈して、前面より之を見る時は半透明に見ゆるのが通常であるが、時としては全く透明にして水の中に睪丸を明視すること、卵白の中に卵黄を見るが如きものである。

◆療法　陰囊水腫の治療法は輕症にあつては、冷水殊に明礬水を以て洗滌し、或は沃度丁幾の塗布、または百倍鉛糖水の洗滌或は睪法にて治癒することがある、尙ほ同時に左の處方を服すれば其効一層著しきものである。

▲沃度加個謨　〇、六　重曹　一、五
苦味丁幾　二、〇　水　一〇〇、〇
右混和一日一回毎食後分服

若しまた頑固なるものにあつては、一種の器械（套管鉗）を以て陰囊の袋を穿刺して水を抽出しなければならぬものもある、此等の場合には單に水を抽出したる許りにては、他日再び充滿するに至るもの故、完全の治癒を欲するには、水を抽出したる後、更に水一分「ボルト」酒二分の混合液、またはルゴール氏液を注入するの方法を用ひるがよい、また根治療法として、陰囊を切開して莢膜を剔切するか、或は硝酸銀幹にて刺灸し、再び陰囊を縫合するのは最も有効なる療法である。

第五十五節　睪丸發育の異狀

睪丸の發育遲緩なる人にありては、一般に生殖器の發育遲きものであるが、他に特異の疾病さへ無ければ、假令常人より遲るゝことあるも大人に達すれば普通の大きさに發育するものであるから格別心配に及ばぬ。また睪丸の大きさは通常人より大なるも睪丸炎等の病氣あるためで無くて、他の器もそれに準じて大なるものにあつては之れ亦苦慮するに足らざるものである。

睪丸は時として全く無きこともあり、或は一個よりしか無きこともあるが、これは誘導體の短き爲めに睪丸下降することの出來ないもので外に致し方が無い。

また時としては睪丸の數三個あるかの如く思はるゝ人もあるが、此等の人は副睪丸の分離せる爲めか、或は他に腫瘍のある爲めのこともある故、醫師に就て篤と診察を受け、若し害あるものであつたなら、早速手術を受くるが好い。

第五十六節　睪丸炎と其治療法

◆原因　一口に睪丸炎と云ひ慣らして居るが、嚴密に云へば副睪丸炎と睪丸炎と二つに區別しなければならぬ、さて此睪丸炎には種々の病氣から起るもので、打撲等の器械的刺戟が原因となるものもあり、また幼時の耳下腺炎に併發するものもあるが、結核性、淋毒性、梅毒性の睪丸炎は數に於て一番多いものである。

◆淋毒性睾丸炎　淋毒性の睾丸炎は睾丸炎中最も多きものであるが、これは淋病患者が不節生なるか、或は不熱練なる醫師に洗滌法を行はれたる場合に發するもので、始め副睾丸に發して後に睾丸に及び、疼痛、腫脹、發熱等を伴ふものであるが、此療法は絶對的安靜が必要であるから、床上に安臥して、提睾帶を用ひ、十倍一イヒチオール」軟膏を塗附し、外に淋疾の療法を行ふもので、醫師の許すまでは歩行は勿論、假令人力車に乘ることをも禁ぜねばならぬ、そして食物は大に注意を要するもので、香辛類、興奮物「アルコール」性飲料等の刺戟物は皆嚴禁である。

◆梅毒性睾丸炎　梅毒性の睾丸炎は睾丸に原發し副睾丸に及ぶものであるが、前者とは異なつて少しも疼痛を發しない、併し長くなると睾丸纖維腫に陷り遂に崩壞するに至るものである、療法は水銀軟膏の塗擦、沃士加里の内服、または水銀「レゾルビン」の注射等一般梅療法を行ふものである。

◆結核性睾丸炎　以上二種の睾丸炎は何れも適當の療法によつて治癒するが、獨り結核性の睾丸炎に至つては容易に治するものではない、尤も原發性と云ふて睾丸に丈け結核の發生したものは、早期に睾丸摘出術を行へば平癒するに至ることがあるも、續發性と云ふて肺とか腸とかに結核があつて睾丸に移行したものは先づ平癒

の見込が無いと云ふても宜しい位である。此病氣は始めは副睾丸に發して次に睾丸に及ぶのが普通で、此等の處に形狀不正なる硬結物を生じ、漸次增大して遂に破潰し、瘻管を造るか、または急に崩壞して他の睾丸に傳染することもある。療法として行ふべきは睾丸の摘出であるが、續發性の場合には全身の狀態が能く之れに堪ふるや否やを見定めての上ならでは行はれぬ。一般には滋養食の攝取、溫暖たる海濱の靜養「グワヤコール」肝油等の内服等を處すべきものである。

睾丸は生殖機能に大切なる精蟲を產する處であるから、此部の病氣は將來不妊症を來すの虞れがあるによつて、療治は成るべく早期に行はねばならぬ、若しまた既に手後れになつた場合に於ても、少くとも一方の睾丸丈けは早く保護して之を救ふの必要があるは勿論のことである。尤も睾丸炎に罹つたからとて必ずしも悉く不妊症を來すと云ふことは無い、輕症のものは其機能を恢復するに至るもの故、何でも早期に治療を受くるのが肝腎の注意である。

第五十七節　睾丸肉腫と其治療法

睾丸肉腫と陰嚢水腫とは異なつて、睾丸其物の腫脹せるものであるが、此病に罹れば早晩睾丸は崩壞するに至る頗る惡性のものである。まだ惡性腫瘍の中に癌腫なるものがある之れは睾丸が堅硬なる腫瘍となり、深在する鋭痛を發して、腰部より兩脚に及び、睾丸は遂に潰瘍となりて崩壞し遂には一命にも及ぶ程の重大なる疾病であるから、大に戒心を要する。併し睾丸の腫瘍は其何れが良性、何れが惡性なるやは、到底素人の鑑別し得べき限りにあらざるを以て、若し異常あらば手療治などを試みずに早く適當の醫師に診察を請ふのが何よりの注意である。

第五十八節　攝護腺肥大症と其治療法

攝護腺肥大とは陰嚢と肛門との間即ち會陰部の腫脹して疼痛するもので、腫脹甚だしくなると其れが爲めに尿道を壓迫して小便不通となることがあるが、原因は不明であるが多くは近傍器官假令へば膀胱などの炎症から起ることがあつて、これは殊に老人に多い病氣で療法としては局部の冷罨法尿利不通のものにはカテーテルを用ふるのだ、ハイネ氏は約八日乃至四十日毎に沃度三十グラム沃度加備謨二グラム水六十グラムの溶液を腫

瘍内に注射して卓効を奏したと云ふてあるが、無論默繻なる良醫の手を藉るでなければ爲し得べからざることである。

第五十九節　精系靜脈瘤と其治療法

精系靜脈瘤は少年精氣の盛んなる人に發すること多いもので睾丸及精系の經路に不愉快なる緊滿及灼熱の感を與へ時として痛み或は色慾消失し或は睾丸の壞疽に陷ることもある治療法は輕いのは提睾帶を用ひて壓迫を施すとか冷水で洗ふとかであるが、重いのは醫師によりて手術的療法を受くるより外に致し方のないものである。

第六十節　尿道狹窄と其治療法

尿道狹窄は淋病の後によく起るもので甚だしいのになると、小水全く通じないものもある假令それ程でなくとも根治療法は醫師の手術切開法、擴張法によらなければならぬが自分注意として最も大切なことは成るべく

小水を堪へて居て、膀胱へきれないと云ふ處で力みて大いに勢ひ強く排尿するのだ、かうすると自然尿線が太くなるから少々位の狹窄はなくなる、現に編者の知人で此注意法一つで數年來の尿道狹窄が立派に癒つた人がある。

第六十一節　毛虱の驅除法

毛虱は決して清潔にして居る人に發するものでない。多くは娼婦等不潔の交接に傳染し、また精液の陰毛に附着したのを洗はずに三四日も棄て置く處から生ずるものである。娼婦に接することは悪いのは無論のこと其他の場合でも若し精液の附着した時には翌朝入浴して石鹸で洗ふのが豫防法の重なもので、既に生じたのには水銀軟膏（これは鼠色の油藥）をよく〳〵陰毛のある皮膚に塗り着けて置き二時間許り經つてからお湯に入つて石鹸で能く洗ふと大抵一回で驅除される、併し此藥は劇藥であるから素人では買ひ求めることが出來ないから醫者に投藥を請ふがよろしい、若し何か差支あるか或は一寸間に合はぬ場合は、唐辛を煎じた汁を冷まして洗ふと三回位で奇麗に取れたと云ふ或人の實驗談もあつたから其れにしてもよからふ、或はまた石油でよく洗

つても宜しい、毛虱は長くなると段々繁殖して皺毛眉毛迄も蔓延し、皮膚炎を發することがあるから初期に驅除するのが肝腎である。

第六十二節　男子陰部無毛症の治療法

無毛症は或病氣殊に梅毒などの爲めにしつかり脫けるものもあるが、多くは先天性のものである。元より無毛たりとて何等生殖上にさし障りのある筈はないが、大抵の者は此無毛を嫌ふものである。

無毛の甚だしいのは外科醫に依賴して、植毛術を行ひ貰ふと宜しいが、毛母のあるものならば左の毛生液の中のどれか一つを一日二三回宛怠りなく塗附すれば生えるものです。

▲レゾルチン	三、〇	單寧酸	三、〇
コツパイバルサム油	二〇〇、〇	グリスリン	六、〇
アルコール	三〇〇、〇		

右塗布料

▲芫菁丁幾　五、〇　　肉豆蔻花油　一、五
アルコール　一〇〇、〇
右混和塗布料

第六十二節　男子不實症と其治療法

昔は「子無きは去る」と云ふて、結婚しても長く子供の出來ない妻は當然去るべきものと定められてあつたこれは一つは我國體の血統を重んずる風習が興かつて力あつたに相違は無いが、今一つは姙娠擧子の一事は全く女のみに責任のあるもので、男には關係が無い、つまり子供の出來ぬのは妻女に許り罪があるとの誤つた斷定から來たことに相違が無い、併し醫學の進歩の結果、不姙症は女ばかり責任を負ふべきものではない、男子にも當然其責任を嫁すべきものであると、追々研究の結果、不姙症の原因は反つて男子の方に多いと云ふことが發見されたのである。即ちケーレル氏は九十六對の夫婦中八十九の無精蟲。又リール及びアッシエル氏は百三十一對の夫婦中四十二の無精蟲があることを報告して居る位だから、不姙症の大多數少くとも其約三分の一

は、其罪男子にあると云はなければならぬ。然もこれは唯無精蟲のみの統計であるから、若し其他の畸形、全身病、殊に淋病の如き最も不姙の原因となるものを加へたならば、其責は反つて男子の方に多きを見るに至るものであろう。

それでは男子が不姙症の原因をなすは如何なる場合であるかと云ふに、第一は精液の無きもの、第二は精液あるも精蟲無きもの、第三は精蟲があるも其精蟲に異狀あるものと、から三つの場合がある

第一の精液無きもの、これは手淫、荒淫等の爲に劇しき生殖神經衰弱に罹つて、交接時に射精する能はざるものもあれば、または精液が分泌しても、精液を輸る道路に故障がある、例へば淋病に起因する副睾丸炎、高度の尿道狹窄等のために精液が外に出ることが出來ない場合もある

精液あるも精蟲無きものは、睾丸に異常ある場合、假令ば睾丸炎の如き、または淋毒性の副睾丸炎の爲めに精囊に精蟲を輸ることが出來なくなつた場合に起るもので、淋病は最も多く其原因を爲すものである。

第三の精蟲あるも異常ある場合、これは夥しく精蟲の減ずるものと、精蟲の衰弱するものと精蟲の死滅するものとあつて、慢性酒精中毒、尿道の炎症分泌物、膿瘻腺炎等が原因となるものである。

處で今度は其治療法だが睾丸を摘出したとか、左右の睾丸共炎症に罹り萎縮したものとかにあつては效し方無きも、尿道狹窄から來たものとか、神經衰弱から來たものとか、慢性酒精中毒から來たものは、其原因を去れば恢復するものであるから、專門家に就て原因的療法を受くるがよい。

第三章　生殖器機能障害と其治療法

第六十四節　生殖障害の分類

生殖器障害の爲に家庭に及ぼす事實は、存外世間に現はれずに、暗々裏に葬られて仕舞ふ場合が多い。家庭上に於ける生殖器障害の研究と云ふことは、極めて必要にして又興味ある問題であるけれども、其材料を得るに困難である、之を專門として直接に其患者に接して、其調べた材料を基礎にして研究することは最も好き方法である。西洋殊に近來獨逸に於ては、生殖器障害の問題を研究する人が多くなつて、殆ど毎月一回位は本が出來て、之を讀むに暇が無い位發表されて居るが、日本では餘り之を學術的に研究する人が少い。

生殖器障害の爲に家庭にどんな嫌やなことがあるか、之を事實に照して取調べて見ると、非常に同情を寄せなければならぬ事件が大變に多い。

生殖器障害と云ふことは何う云ふことであるか、此を學術的に分けて見ると生殖器障害と一口に云ふが、實は大きな問題であつて、之を分類して見ると左の通りになる。

第一　病的精液損失　（一）遺精　（二）精液漏

第二　早期的射精（早漏）

第三　陰萎　（一）器質性陰萎　（二）精神性陰萎

（三）神經性陰萎　イ、勃起力衰弱　ロ、完全陰萎

（四）麻痺性陰萎

第六十五節　生殖障害の原因

以上の生殖器障害の原因は先づ手淫を以て第一とする、其次には房事過度、淋疾の關係、或は全身の衰弱等

種々あるが、青年時期に於ける手淫と云ふことが一番害をのこすのである。

手淫をした患者を見ると、龜頭が色素沈着の爲に黑くなつて居る、繫帶は左に曲つて居る、龜頭の頭が尖がらかつて居る、陰莖が堅くなつて居る女では陰核が堅くなつて居る。

第六十六節　生殖障害の一般狀態

生殖障害として局處的に顯はるゝものは早漏、遺精、不感、精液漏、陰萎等である、また此外に身體的症候としては眼は疲れ易く、眼瞼がピク〳〵する、耳が鳴る、頭部が重い、眩暈がする、動悸がする、思ふ通りに言葉が出ない、記憶力が減ずる、考へごとが出來なくなる、仕事がイヤになる、動作に活氣を失ひ纖弱を欲く食慾を減じ便秘を起す夜中よく眠られぬ、追々痩せるか或は痩せるやうな氣がしてならぬ等である。尙ほ此外に有力なる症候として顯るゝのは强迫觀念で、閉さへあれば生殖器のことに氣を取られ、現在では並の人の半分もなさゝうである。果して人並に發育するであらうか、遺精の爲めに精液が缺乏して居るに相違があるまい結婚しても婦人が滿足はしまい子孫繁殖の力はとてもなさゝうであると、夫れから夫れと心配を重ね、遂には

業務を放擲して煩悶する、自ら醫書を研究する衛生顧問に質問するも滿足せぬ、醫者から醫者へと醫者廻りをすると云ふのが常であるが、實は患者自身が心配する程恐ろしきものではない。此種の患者はまた多くは醫書などに手淫は此等の原因とあるを見て、若し過去に其罪惡を敢てせるものが一回の遺精或は房事に不滿足を得れば其害が顯れて來たと實は何でも無いものを煩悶する、殊に慢性淋病後の攝護腺炎あるものは排便後によく攝護腺液の洩れるのを見て遺精と誤り考へて苦悶するのが間々ある、併し遺精は青年時代には有り勝のことで左程苦慮するに足らないが陰萎早漏の如きもどんな人でも何時も滿足に行くと限つたものでなく、何か身體に故障あれば一時性に陰萎または早漏を來たすもので、これとて心配することも無い、氣にかけずに居れば自然に回復するものである、尤も醫療を要するものあるは勿論のことだから、生殖神經の第一療法は、自分が病的であると云ふ强迫觀念を捨てゝ虛心平氣苦にせぬと云ふことである、けれども生殖神經衰弱に次て腦神經衰弱を起せる人にあつては其强迫觀念の治療は醫師に求むるの必要がある。

第六十七節　生殖障害と離婚の關係

生殖器障害が離婚の原因となることがある、統計集誌と云ふ雜誌に、法學博士の高野岩三郎君が、日本人の結婚及離婚の統計を調べてある。それを見ると結婚をする年齢は、男子に於ては二十歳から二十五歳が一番多い、是が結婚の三割以上を占めて居る、其次は二十五歳から三十歳、女の方で云ふても矢張同じことで、二十歳から二十五歳、其次が二十五歳から三十歳、斯う云ふ譯である。是は結婚の方であるが、離婚の方は何うであるかと云ふと、其の方は二十五歳から三十歳の間に於て離婚するのが多い、其次は二十歳から二十五歳、三十歳から三十五歳斯う云ふのである。女は二十歳から二十五歳、此間に一番離婚が多い、何でも離婚は年々六萬人以上ある。之を吾々の生殖器障害の患者と對照して見ると、丁度生殖器患者は二十歳以上三十歳迄が一番多い、離婚表と對照して見ると、其離婚の最も多き時期が、丁度生殖器障害の最も多き時期に當つて居る。由て思ふに生殖器障害が離婚の原因を爲す場合が隨分少くはあるまい、勿論他の原因で離別することもあらうが病氣の爲めに別れるのも多からう實際吾々が患者に事情を聞いて見ると、確かに離婚の原因を爲して居るのがある。併し法律上生殖器障害を以て離婚の告訴をすることが出來ない、妻は夫と同居する義務があるといふのであるから、法律上離婚は出來ないが、事實上面白くない所から女の方から出て行くのが多い、さう云ふ離婚

の例は吾々は非常に多く證明して居る。

今其一例を云つて見ると面白い例がある、四十年四月に私の所へ來た三十三歳の男子、是は非常な識直家で石部金吉であつたが、盛んに手淫をして、其爲に神經衰弱を起したが、女房を貰はなければならぬことになつて、四十年二月に妻君を貰つた。所が何うしても勃起しない、とう〳〵女の方から離婚を請求して出て往つて仕舞つた。何うも非常に心配して、世の中が面白くなくなつて仕舞つた。家は京都で、金は有るが女房に來者が無い、そこで私の所へ來醫したが、非常に能く癒つた、四十日計り藥を注射したが、其當時湯に這入ると勃起して出ることが出來ないといふ位であつた。當人も非常に喜んで、モウ少し女房が居つて呉れゝば宜かつたと言つて居つた」と。

第六十八節　生殖器と夫婦の不和

其外夫婦の不和と云ふことは、大に生殖器障害が與づて力がある者と思ふ、三十八年の八月に診察した洋食店の「コツク」三十二歳の男十二三歳から十七歳迄夢中で手淫をやつた、十七歳の時に婦人に接して見た所が

學く射精して仕舞つて十分に交接を行ふことが出來ないが更に角出來た、所が段々勃起力も衰へて來たが、減事情があつて二十五歳の時に妻帶をした、一ケ年同棲をして居つたが更に交接が出來ない。斯う云ふ場合になると女は不滿足を感する、相手が欲しくなる、それで其人の妻君は姦通をして離縁となつた。そこで三十七年の春に再び妻君を持つたが、是も一年半程居つて、不道德の事をやつて自分から出て往つて仕舞つた。患者曰く、先生誠に此位辛い事はない、私の方に缺點があるから彼が不始末なことをしたとて、私が攻擊することが出來ない、何うぞお助けが出來るものならば助けて貰ひたい。三十日間詳りで完全に立派に治つた。

第六十九節　勃起力の異常と其治療法

一口に勃起力の減弱或は缺除と云ふても、其原因に溯れば、種々多端であるから療法も從つて其原因によつて異るは無論のことである、今日此等の原因として知られてあるは左の五種である

第一は原發性のもので、これは睪丸の缺除、萎縮或は激しき精液損失等のために勃起力の減弱或は缺除を來たせるものを云ふのである、元來睪丸は精液を分泌する外に色情を發起せしめ、生殖を營げしめ、男子たる

の勇氣を保たしむるの機能を有するのであるから、此ものゝ缺除或は萎縮は勃起力の異常を來たすは理の當然である。さて其療法は睪丸の缺除は外に致し方ないが、其他のものにあつては滋養食を與へ、運動を盛んにしかねてST液の注射若しくはカルビタミン錠の内服を行ふことである。睪丸を全く摘出假へば結核等のために摘出したる人にあつては、最初一二年の間こそ色情も起り勃起もするが、其後は全く此等の機能無きに至るものである。それから睪丸炎等のため萎縮に陷りたるものにあつては、

沃度加個謨	〇、六	重曹　一、五
苦味丁幾	二、〇	水　一〇〇、〇

右一日三回毎食直後分服

を服するが宜しい。

第二は、神經の障害より來るもの、即ちイポテンチである、此療法に就ては後に詳しく述べる。

第三は、中毒性のもの、慢性酒精中毒、慢性ニコチン中毒、臭素鹽の慢性中毒、慢性モルヒネ中毒、慢性水中銀毒、慢性鉛毒中毒等のために、中毒性神經衰弱を起し、其結果として勃起力の缺除或は減弱を來たすもの

である。此療法は先づ原因たる酒、煙草或は藥劑等の服用を廢し、消化をよくし通利を調へ、滋養食の調攝、運動を勵行する等一般强壯療法を行ひ、尙ほST液の注射を行ふがよい

第四は、續發性のもので、全身病では糖尿病、肥滿症、腎臟病、脊髓癆等の疾病からして減弱、或は缺除に至り、また稀れには半身不隨、脊髓炎に基くもの、或は攝護腺慢性淋疾等のために起るものもある。此等に因する療法は、先づ第一に其本病を治すべきは申す迄も無いことであるが、糖尿病、脊髓癆の如きは容易に治らざる否多くは不治の症であり、此等の重大なる疾病の際には、房事など慎む餘裕のなきもの故、他の諸症に就て云ふはんに、慢性の淋疾、攝護腺炎等に原因するものは、此等原病を治療したる後、尿道冷却ブジー、肛門冷却器等を用ひて、一日一回大略十五分間位つゝ冷却するか、或は其反對に攝氏四十二三度内外の溫湯を、其器械に灌注して溫めるも宜しい。また肥滿症には、甲狀腺エキスの内服等可なるも、之れは大院の上行はねばならぬ。食物療法にて、現今行れつゝあるは、第一法は、殆ど肉類を常食して出來得るだけ穀類を減ずること、第二法は、脂肪は出來得る丈け澤山に食し、穀物を減ずること、第三法は、大量の穀物、芋類等の澱粉食を常食として、脂肪分を減じ、かねて成るべく水分を取らぬこと、此三法は其やり方こそ違ふが、其結果は殆ど

同じことであるから、何れにても實行し易きものを選み用ふるが宜しい。

號右は、勃起補助筋の弛緩から來るもので、これを起す原因は、運動不足の爲に脂肪過剩を來たせる場合、或は早老に陷りたる場合等である、之を治するには力めて運動を盛んにし、殊に一日一二回四五十分間の步行運動を行ひ、また朝夕二回づゝ一側五分間位左右の内股、陰囊の周圍より肛門の附近にかけ冷濕布を以て摩擦する、それからブルトウスキイ氏の按摩法と云ふて、患者を仰臥せしめて、術者は四本の指を平にし内股に當て、拇指を外に置き、内股より會陰部に向つて進ましめ、上方の手は陰莖根部を周擁して軽揑する方法も効ある、其他には溫泉浴も有効なる場合があり、早老の人ならば食餌（滋養偏進の効ある食物を取る）に注意するもまた一法である。

此外に一般に通じて用ふべきはST液の注射とカルビタミン錠の内服とである、一體生殖器の病氣は、患者隱秘して慢性に陷らしめ或は如何はしき藥劑の効能書に迷はされ、治療を誤るもの多き故、出來得べくんば成るべく早く醫療を受くるのは肝腎の注意である。

第七十節　陰萎と其治療法

◆原因◆　生殖器官能障害中最も多いのは此の陰萎である。陰萎とは房事を行ふことの出來ぬもので、其原因によつて、之れを一時性の陰萎と、永久性の陰萎とに區別する一時性陰萎の原因は、

一、甚だしく精神を刺戟し、或は刺戟を受けたる時。

一、非常に緻密なる考案に思慮を費やす時例へば發明家の發明に苦心する時の如く其の觀念の腦裡を離れざる時。

一、酩酊者が最も嫌ふべき疾病に罹りたる時。

等であるが、此等のものは、其原因を去れば直に治癒するものである。之れに反して永久性の陰萎は、肉體的の原因としては、陰莖及び睪丸の先天性又は後天性變常、糖尿病、尿崩症、脊髓痨、消化器の慢性疾患、慢性腎臟病、貧血病、黴毒質、結核の二期以上、次に藥物では、沃度、臭素、カンフル、モルヒネ、撒爾失爾酸の慢性中毒等が原因となるが、其の最も實際の原因となるものは手淫と房事過度の二つである。

◆療法◆　陰萎の治療法は種々ある、今左に其主なるものを述べん。

電氣療法は、平流電氣を用ひて、一は會陰部に、一は耻骨接陰部に之を接し、五分乃至十分毎に互に交換しつゝ、局部の充血を促す方法である。

マツサージ療法は、陰阜の上部及び其左右の兩側より外生殖器を兩手にて揉み、皮膚を刺戟して血液の循環を促がし以て局部に充血せしめ、局部の營養をよくするのである。

「カンタリヂン」「カンフル」の兩藥は、從來本症の患者に內服せしめたものであるが、兩者共に分量を過せば却つて甚だしく後害を醸すもの故、今日に於ては殆ど廢棄せられ、唯歷史に其名を止むるのみである。

睪丸エキスは、一千七百八十九年佛國の醫師プローゼカル氏の發明にかゝるものにて牡牛の睪丸より「エキス」を製して用ひるので、之れも有効なる療法の一つである。

「ニヒンビン」療法は、今日に於ては、盛んに賞用され普く人の知る處であるが、名聲の盛んなるに伴れて、種々誇大の廣告を爲すものもあるが、之は一種の催春藥であるから、無暗に用ふべきではない。

今度は精神療法に就て述べんに、多くの患者は最初の交接に失敗し、而も曩に手淫等の罪惡を犯せる人にあ

りては、所謂陰萎ならざるやを疑ひ、更に再度の交接又た其目的を過たんことを憂ひて自ら陰萎と悲觀するに至るものもあれば、平素情交の親密なる夫婦間にあつては少しも差支なきも、他の婦人に對しては陰萎となるが如きは、よくある例で、斯る人は陰萎を恐れて自ら陰萎となるものであるから、精神的の治療則ち斯樣の場合には反復強ひて之を試みずに身體精神を安靜にして、神經の充奮力強壯となるを待つて、初めて之を行ふが宜しい。

また催眠術は、陰萎患者に對して其術を施し、疾病に最早全治して、房事に堪ふる旨を暗示するものにて、之れによつて全治せる患者が少くない。

序ながら古書に見ゆる陰萎の療法を示さんに。

蜀盆子を酒に浸し粉にして一日三度用ふ。

車床子・五味子・菟絲子、右三味等ゲを粉にして用ふ。

天雄、菟絲子を粉にして雀の玉子をつきまぜ丸藥となし、早朝に酒にて五粒づゝ用ふ。

とあり、眞僞は實驗せざるを以て斷言し難きも何れも書のなきだけは確かなる故、試むるも可ならんか。

第七十一節　遺精夢精と其治療法

◆遺精の意義　遺精とは睡眠中に精液を射出するもので、之が劇しくなれば精液減損のために身體の衰弱殊に神經衰弱を發する樣になる。また神經衰弱のためにも遺精を發することがあり、此等のものは原因が結果になり、結果がまた原因となる等所謂因果應報の理は茲にも顯るゝのである。尤も健康體の人にも遺精ツマリ病的ならざる遺精がある之れは壯年血氣の人にて他に精液を漏すことなきものは、一ケ月一二回の遺精は敢て苦慮するに足らない。茲に述んとするのは所謂病的の遺精で多くは陰莖勃起せずして遺精して而かも遺精の翌朝は疲勞の感あるものを云ふのであるが、中には單に夜間のみならず午睡の場合、作業中婦人と談話をする時、或は淫猥なる稗史小說を讀む時にさへ發するものがあるが、此等は餘程重症なので、生殖神經の衰弱を伴ふものである。

◆原因　遺精の原因は種々あるが、脊髓の過敏、腦の過敏が最も多くの原因を爲すもので、此等の原因は脊髓癆、糖尿病の初期、包莖、龜頭炎、攝護腺炎、膀胱結石、淋疾、肛門瘻瘻等であるが、更にこれより多き原

因は反性遂情である、さうして遺精にはまた早期射精を伴ふもので、遺精と早期射精とは最も密接の關係がある、手淫の害あるは申すまでも無きが、遺精患者の多くは眞の手淫の害より來るものよりは、通俗衛生書または賣藥の効能書などに、反性遂情の後には遺精と云ふ恐ろしき害を伴ふものであると云ふことを見聞し、其害の恐るべきを知り、過去若しくは現在の罪惡は、此恐るべき慘害の來襲となつて近き將來に現るべきを苦惱し懼惱の結果、遂には神經衰弱症を起し、若し一度にても遺精すれば、最早大事去れりと苦悶するが殆どお極まりの樣になつて居るが、成る程反性遂情は害あるには相違がないが、必ずしも遺精を伴ふとも限らず、遺精の中には病的ならざる所謂生理的のものもあつて格別害の無きものもある故、さう心配するには及ばぬ、寧ろ徐ろに其救治法を講ずべきである。

◆療法　遺精ある人の第一の注意は熟眠と云ふことである、遺精は多くは不熟眠の產物なる夢に伴ふもので、熟眠を得れば減多に遺精するものではない、熟眠の方法に就ては神經衰弱の條下に詳しく說明してあるから其を御參考願ひたい。

また療法としては其原因となるべきものを避けるがよい、遺精は主として生殖神經衰弱の症として來るも

の故神經の根本的强壯藥なるＳＴ液の注射に兼ねてカルビタミン錠の內服を行ふのが根本的療法である。龜頭の過敏なるを治療するが宜しいが、此療法として行ふべきは、理學的には冷却ブーシの尿道挿入、脊柱に沿ふ冷水の灌注、龜頭冷却器の應用等で、化學的の療法としては、二十倍のアルゴニン溶液の塗布、デルマトール次硝酸蒼鉛、澱粉、滑石末等を龜頭に撒布し、一時繃帶を施すと宜しい。

次に行ふべきは、遺精に對する恐怖心を除くことである。遺精の所謂風壓觸感的に來るは、原因の項下に述べた通りで、之が恐るゝが刺戟となつて遺精を起すに至るから遺精は、精神が强實であれば決して起るものでないとの觀念を持せしむるのが何よりの療法である。

最後に行ふべきは、藥物療法である。之は醫師の領分で素人の如きものにはあらぬも、生殖器障害專門家ならざる普通醫師のために、左に處方の二三を示さん。

（一）臭素加個謨（或は臭素ナトリユム）三、〇　　水　一〇〇、〇

苦味丁幾　一、五

右一日三回分服

(二) 臭素加個謨　一、〇　ルブリン　〇一、五
乳糖　〇、四　繃帶丁幾　四、〇
右爲一包臨臥時頓服

(三) エルゴチン　〇、四
單舍利別　三〇、〇
右一日數回一茶匙宛

尙ほ此外に臭素カンフル、鹽酸キニーネ、オビユームの如きは常用するに足るが何れも其適應症を見て投藥すべきは勿論のことである。然し此等は皆一時的の奏効を見るに過ぎぬ故根本的療法としては前擧の如くS T液の注射とカビルタミン錠の內服がよろしい。

第七十二節　早期射精と其治療法

◆意義　早期射精もたま遺精と同じく起るものなるは前條にも述べた通りであるが、本症にも輕重種々ある。

尤も房事に際して射精に至る迄の時間は、其人の年齡、體格或は場合等によつて色々異なるが、通常は女子の快美に達せざる內に早く射精するものを早期射精と認めて差支かない、尤も女子にも早漏或は遲鈍があるから必ずしもこれを標準として誤りないと云ふ譯には行かぬが、早期射精には、多くは快美感の減少を伴ふもの故少しく注意すれば分るものである。

◆原因　早期射精の原因は、之を大別すれば神經中樞の過敏によるものと、末梢神經の過敏によるものとあり更に甲を神經衰弱症、慢性中毒の二種、乙を頑頭炎、尿道炎、精囊炎、攝護腺炎の四種に區別するが、神經衰弱に因するものは、殊に反性慾情、房事過度に來るが、此療法は、第一に腦神經衰弱を治するの必要がある。

◆療法　中毒性のものは、前に述べた勃起力の減弱の原因と同じく、其療法も亦同樣であるから同項を參考されたい。

頑頭に炎症があれば其部の知覺神經が鋭敏となつて、少しの刺戟にても直に感ずる樣になるものであるによつて、普通ならば未だ感じない內に、射精せしむる、即ち早漏を來たすことにな

るものである。此療法は龜頭炎の原因となるべき、不潔、または包莖等の刺戟があらば、勤めて清潔になし、包皮は之を去り、或は冷水を以て之を洗ふ等するがよい。

尿道炎、精囊炎の原因は共に、慢性の淋疾が多い、此症にかゝれば、尿道は何となく灼熱或は疼痛を感じ、尿意も頻數となるものである。則ち尿道并に精囊の知覺神經が過敏になり居る爲めに早期射精を來たすものである。此療法は冷却ブジーの挿入で、輝きものは二三十回も之を行へばよく治癒するものである。尤も慢性淋疾未だ平癒せざる時は先づ慢性淋を治したる後に、本症の治療を行ふべきである。

第四の攝護腺炎は、陰囊と、肛門との間即ち會陰部にある攝護腺の炎症を指すものにて、打撲等の外傷の爲めに起ることあるも、多く慢性淋疾殊に其療法として行ふブジー挿入の不注意によることが多いが、此の症もまた早期射精の一原因となるものであるが、其療法は水銀軟膏を塗擦するか、沃土加里の内服にかねて、二日或は三日に一回づゝ、肛門より指を挿入して、攝護腺を摩擦すると間々大効を奏するものである。

◆攝生法　以上にて早漏の各原因療法を述べ終つたが、更に早漏全體に就て云ふと、攝生法としては、酒、煙草、コーヒ、ワサビ、辛子、山椒、唐辛子等の刺戟性飲食物を禁じ、成るべく淡泊にして滋養の効あるものを

取り、一般衛生狀態に注意せしむるなどが肝要である、尤も人によりて飲酒すれば早期射精を防ぐことが出來ると云ふ人もあるが、斯樣の人は既に樂に慢性アルコール中毒に罹つた人であるから普通の人は之を眞似てはいけない、飲酒は無力性早期射精の原因をなすこと間々ある故、斯樣のことは嚴に之を禁ぜねばならぬ、尤も人によりては少量の赤酒或は灘茶等を用ひれば、神經を强めて早期射精を防ぐことがある故、身體の衰弱なる人は用ひても差支へない、房事は嚴禁すれば反つて本症をして重くならしむるの虞れある故、年齡と身體の虛弱とに應じて成るべく內端に行ふのは、決して差支が無いものである。

藥物療法として賞用すべきは、ST液の注射に兼ねてカルビタミンの內服である。それから佛人カテラン氏の發明せる脊髓硬膜周圍組織內注射法が行はれて居るが、此注射療法は嚴重なる消毒と、卓越せる技倆とを有する醫師によつて、始めてなし得べきものなるを以て此療法を受けんには、醫師其人を選擇するのは何よりの注意である。

第七十三節　精液漏症と其治療法

◆症候　精液漏症は遺精症の今一歩進んだもので、排尿時には勿論、何か力む時、或は上役の前に出た時とかまたは何か面倒な調べ物をして居る時とか、不隨意に排精するものであつて、遺精症の約五分の一は本症を伴ふものである。一體射精なるものは或一定の龜頭刺草が極度に達すれば、腰髓にある射精中樞を刺草し、中樞より命令を射精筋即ち精嚢、輸精管、攝護腺、球海綿體筋、尿道の諸筋肉に傳へ、此等の筋肉が共同して、精嚢に貯蓄されてある精液を體外に排泄するものであるが、若し生殖神經が衰弱すれば、恰も白痴の口に締りが無く常に開いて居る樣に、射精に關係ある總ての神經、筋肉が弛緩して、少し力むとか、少し頭を使ふとか、尿道に刺戟（尿利）あるとかすれば、精液は絶えず精嚢より流れ出づるもので、其結果は甚だしく身體を虛弱無氣力ならしむるに至るものである。

◆原因　精液漏症の原因は、矢張遺精の如く、手淫、亂淫、慢性淋疾、攝護腺炎等が主なるものである。

◆療法　療法としては先づ第一に此等の原因を避け或は治すべきは勿論、一般强壯法を行ひ、力めて精神の安靜を保つ、特に注意して便通を快くせしめねばならぬ、便通を利するには、煮たる果實、或は朝一起杯の冷水を飲み、または臍部周圍の四本の指を以て徐々にマツサージするが、または水飴、落花生等を多食するも宜

しいが。

▲カヌカラサクラダエキス錠　三個

右臨臥時頓服

の下劑を用ひるのが最も簡單で然も効能がある。それからまた冷水摩擦、殊に陰嚢の周圍より兩股間にかけて冷水摩擦を行ふか、或は陰部を冷水にて冷やかすか、又は冷却ブジーの挿入、冷水の尿道内灌注肛門冷却器の應用、或は脊柱に沿ふて冷水を注ぎかくなるども一法である、藥物にてはST液の注射に兼ねてカルビタミン錠を用ひるがよろしい、其他臭素加爾謨或は臭素那篤爾謨は神經過敏を治するの効はあるが、一面には神經を衰弱ならしむるもの故、其應用は大に注意を要する、食物は鳥獸肉殊に燒牛肉、或は鶏肉などが宜しい。

第七十四節　快美感減少と其治療法

快美感覺の減少は、早期射精に伴ふものなるは前にも述べた通りで、其原因は矢張手淫安行、房事過度等の爲めに、生殖神經の衰弱を來たす爲めか、或は腦神經衰弱、ヒステリー等が原因することもあり、婦人にあ

りては分娩等の爲め、裂傷を生じたる後にもある、または夫婦の淫具相應せざるか、または交接の方法を知らざる等も一の原因となることがある。一隱快美感覺なるものは、男子は龜頭、女子は陰核に分布せる快美神經が摩擦の刺戟を受くれば起るもので、房事は之れを刺戟する最良の方法であるのだが、若し其方法が惡いとか、或は此等の神經が衰弱し居れば快感を減損するもの故、左樣の場合には勤めて其原因を避け、濫生に注意し、冷水浴、冷水摩擦等を取り、局部は充分に保護し、若し頑固なるものは、平流電氣を通ずると宜しい。それからまた神經衰弱症の初期に庸醫の爲めに、長く臭劑を服用せしめられたる時には、時として不感症を來たすことのあるもの故、斯樣の場合には、速かに臭劑の服用を止め、ST液の注射に兼ねてカルビタミン錠の强壯藥を服用すれば癒るものである。

第七十五節　淫慾缺乏症と其治療法

◆原因　淫慾缺乏症は、陰萎患者に起るもので、また男子よりも女子に多いものである。其原因は色々あるが主なるものは手淫家、飲酒家、子宮の疾患ある者、精神病者、神經病者、精神を過勞する者、將た房事を過度

に行へる者等に來る。併し此等の原因以外に注意を要するものがある、それは夫婦の愛情と云ふことである、夫婦の愛情極めて濃厚にして、我良人の爲めには、心も身體も捧げる、富貴も財産も眼中に無いと云ふやうな心の出て來るのが第一の必要な事では無いかと思ふ。

◆療法　此等の療法としては、先づ其原因の如何を確かめ陰部の異常や疾患のあるものは、速かに之を除きST液の注射またはカルビタミン錠の內服、女子にありては卵巢劑の注射がよく利くものである。

第七十六節　生殖神經衰弱症治療法

生殖器及び其神經も身體の一部であるから身體が虛弱で獨り生殖器のみ健全强壯となる理由は無い、彼の老人にして意氣壯年男子を凌ぎ年幼き妾を擁するものゝ身體の頑健なるを思へば此言に一理あるを首肯されるであらう、だから生殖器の健全を望む人は先づ第一に、身體を强壯にするの必要がある、これには一般的衛生法を遵守するも良いが、殊に効あるは冷水浴で、全身の冷水浴殊に腰骨の附近陰部は充分に水を浴びると大抵の生殖神經衰弱はこれのみで平癒するもので、過敏性の早漏、無力性の陰萎等には別して効あるは余が多數の

患者に應用して實驗せる所である。

併し全身の冷水浴に堪へ難き人であつたならば陰部丈け水を浴びるも宜しく、入浴後局部に冷水を漱いでも良い、けれどもこれにも尚ほ堪へかぬるやうな人であつたら毎朝と毎就寢前に陰囊附近より太腿の附根にかけて冷水摩擦を行ひ、最後に濡つた手拭で陰部をぐるつと包み一分間許押へて濕みの出て來た處で取る、これを怠らずやつて居ると何時の間にか癒つて了ふものである。

運動を盛んにするも宜しく殊に走るのが良い、併し一人で走るもの異なるものと思ふたら散歩でも宜しい、食物は肉類では燒牛肉、豚肉、鶏肉等が宜しく、貝類は何でも宜しいが殊に牡蠣は生殖障害には殊効がある もので、西洋人などは牡蠣と赤茄子とライスカレーは色慾强壯劑と稱して居る位である、それから烏卵、魚肉では鰹魚、鮪、鰯、鮭等、蔬菜類では葱、殊に玉葱、肉豆蔻、ミツバ、山の芋、百合、菌類では松茸、松露、果實では桃、バナヽ、鳳梨、それから青豆等は何れも生殖器を健全强壯ならしむる作用のあるもの故、前の冷水療法を實行すると共に此等の食物を適宜攝取して日常の食事となしたならば、大抵の病にありては約一ケ月の後に愉快若しくは全快に至ることは決して疑ひを容れない。

第七十七節　冷水灌注法

冷水灌注法は極めて簡單であるが、一寸手加減を要する、其法は「ゴム」の「スポイト」（∞の記號なるが適當）を求め、尖端を滑らかにして尿道口より太ければ、トクサでけづりて適當の太さにして負傷の憂ない樣にし、清水を吸はせ、陰莖を引き上げ尿道口を上にむけ「スポイト」の尖端を眞直に約三分を挿入し「ゴム」を壓すれば水は尿道へはひる、それから二三分乃至五分間は水を出さぬ樣にする「スポイト」は使用の前後、内外共に清潔に洗ふべさは勿論である、場所は便所が宜しく排尿後に此法を行ふがよい。

第七十八節　冷却ブジー挿入法

ブジーには、細いのと太いのとあるが、大抵尿道の廣さ位のものを挿入するがよいブジーを尿道内に挿入するには、第一に器械を十分滑潤せねばならぬ、滑潤法の最も簡單なるは無水アルコールを脱脂綿に浸して以て叮嚀にブジーを拭ふと、これにてブジーに附着し居る黴菌は死滅して了ふ、そこで今度は殺菌したるワセリン

を塗りたる（アルコールがよく揮發し盡さぬ内に尿道に入るゝと刺戟するから注意を要する）ブジーを右手に持ち、左の指にて尿道口を開きながら、靜かに挿入し始めると、龜頭に相當したる舟狀窩と云ふ狹い部分を通るには少しく抵抗を感するが、其處を通れば再び樂になつて耻骨下までは能く通ずるものである、此處迄の間はブジーを腹壁の中央に殆ど眞直に保ちながら、左の指を動かして陰莖の方を上に進める樣にする、又ブジーの方を持てる右の指をも適度に動かして、若し少しでも抵抗する場處があるなら拔き、若し滑澤に通るなら任せてやると云ふ風に、小しでも無理に通してはならぬ、ブジーは通ずと云ふよりも陰莖をひきかぶせる樣の手加減が必要である、そして恥耻骨下に達すれば、ブジーを持つたる右の指の方を上げ始めて徐々と半分の環を書く樣に進めると深く滑澤に挿入ることになるが深度は一番强く抵抗する場處に達するのである、此部は膀胱の始めであつて、括約筋の部位であるが、此處で力を入れると膀胱に入るから力を入れてはならぬ、そこで感固定したら、ゴム押へを外して水を通過させるかくして、十五分間其儘にして置くがよい、水は夏冬共に井水を用ひるが宜しい、時としては冷却に連れて强度の勃起を始むることがあるから、斯樣の時には中止せねばならぬ、又時には尿道痙攣を起してブジーが獨りで拔け出るか、或は拔くに困難になることもあるから、

斯樣の場合には冷水の代りに攝氏四十二三度の溫湯をブジーの中に注ぐがよい。

冷水灌注法も、冷却ブジー挿入法も餘程熟練を要するもの故、其施術は何れも細心の注意を要するものである。

第七十九節　所謂生殖專門醫の注意

最後に生殖專門醫に就て一言せんに、世間には誇大の廣告を以て患者を瞞着するものが間々あるが、此等屠醫の手にかゝりたる人も病氣の場所が場所丈けに、若し彼等の瞞着に逢ふも、泣寢入りに終るものが多いが、彼等屠醫は之をよいことにして益其惡手腕に振ふに至る故、患者はよく〳〵注意すべきことである、大學のある處ならば醫科の皮膚泌尿器科の診療を受くるが安心であり、民間にても有名な人にかゝれば大抵は間違ひは無いものである。

第七編　眼　科

第一章　眼瞼、角膜、結膜の疾患

第一節　眼瞼緣炎と其治療法

◆原因　瞼病質のものに多く出來るもので、其他には結膜、涙管の病氣、兎眼、睫毛亂生症等にも來るものである。

◆症候　本症は俗にハタクサレと稱へ、眼の緣が赤く爛れる病氣で、劇しきものは潰瘍を造り、睫毛は脱け落ちるものである。

◆療法　先づ原因となつて居る處の病氣を治し、そして百倍乃至五十倍の白降汞ワセリン、または黃降汞ワセリンを一日一二回塗布するがよい。

第二節　逆さ睫毛と其治療法

◆原因　多くは慢性のトラホームから來るが、また結膜の病氣、或は外傷・火傷等の後にも起るものである

◆症候　其名の如く睫毛が逆さに不規則に生へるので眼球を刺戟して、種々の眼炎を惹き起すものである。

◆療法　極めて輕いのなら一々毛拔きで睫毛を拔いても宜いが、重いのはどうしても專門家の手術を受けねばならぬ。

第三節　眼瞼外飜症と其治療法

◆原因　これには痙攣性と云ふて眼の輪匝筋が收縮する爲めに起るのと、麻痺性と云ふて其反對に弛緩する爲めに來るのと、また瘢痕性と云ふて外傷、火傷等の瘢痕の爲めに起るものとの三種類ある。

◆症候　眼瞼が外の方に飜轉する病氣であつて、俗に赤目と云ふのは本症のことである。

◆療法　痙攣性のものは、五十倍の硼酸水で濕布をなし、其上へ壓白繃帶を爲すがよろしく、其他のものは專

門家の手術を受けねばならぬ。

第四節　モノモラヒと其治療法

◆原因　モノモラヒは俗名であつて、醫學上には麻粒腫と稱するものであるが、なかには霰粒腫をも稱することがある、つまり此等は一種のニキビ樣のものである。

◆症候　眼瞼に硬固い結節を生じ、徐々に增大して小豆大となり、終に破潰して膿樣のものを洩らし、通常は漸次に吸收せられて治に至るものである。

◆療法　五十倍の溫硼酸水にて罨法を行へば大抵は癒るが、若し大きなものであつたならば醫師より穿刺して貰ふがよい。

第五節　眼瞼痙攣症と其治療法

◆原因　ヒステリー、神經衰弱、房事過度、蛔蟲、過勞等が原因となり、また角膜潰瘍、膿漏眼、水痘疹、眼

内異物等の爲めに起ることもある。

◆症候◆ 本症は痙攣性に眼輪而筋が收縮する爲めに、眼を開けることの出來ない病氣である。

◆療法◆ 本症の原因となるものは頗る多きもの故、先づ其原因を去るのは第一の療法である、また根治療法としては專門家の施治を受けねばならぬが、一時的の奏効を求むるには五十倍のコカイン水を點眼しても宜しい

第六節　眼瞼の腫物

眼瞼に癤腫や瘙疹の爲めに腫物が出來て、澤山の膿を洩すに至ることがある、これは五十倍の硼酸水や、一百倍の石炭酸水で洗滌し、また破開せざるものにあつては膿瘍を切開したる上、洗滌するも宜しいが、中には前額竇や上顎竇の蓄膿症よりも來ることがある、これは無論此等は原病を手術治療を加ゝるにあらざれば治せざるものである。

第七節　流涙症と其治療法

◆原因◆ 本症の原因となるものは第一は涙管狹窄である、即ち慢性トラホームや鼻の疾患の爲めに涙管の狹窄を來せるもの、第二は涙囊炎に、涙囊膿瘍この二つのものは原因を爲すものである。

◆症候◆ 其名の如く、常に涙が流れ出で、溢れ出でゝ困る病氣である

◆療法◆ 涙管狹窄の爲めに起るものは「フリユオレスチン」と云ふ色素液を點眼して後、鼻をかまして見ると其鼻汁中に其色を見ざるか或は之を見るも極めて少量なるときは本症と見做して宜しく、此れは涙管に消息子を入れて漸次擴張するがよい。

涙囊の疾病の爲めに起るものは安靜平臥を守り、冷罨法を施すがよろしく、若し化膿を來すさうであつたならば反對に温罨法を施して化膿を促し、化膿せるものは切開し、場合によりては涙囊摘出術を受けねばならぬ

第八節　目星と其治療法

目星とは俗語にて、通常は角膜に一種ニキビ樣のものゝ出來ることを云ふのであるが、これは矢張冷罨法、五十倍の硼酸水にて冷罨法を施すがよろしく、大抵はそれにて治癒するものであるが、若し再三出來るやうで

あつたならば他に眼病あつて、それの一症として出來るもの故、速かに醫師の療治を受けねばならぬ。

第九節　血目と其治療法

本症はこれぞと云ふ原因なくして、結膜に充血を來し、赤くなるのであるが、斯樣の場合に、便通を利し、五十倍硼酸水にて洗滌し、三百倍または五百倍の硫酸亞鉛水を點眼するがよろしい。

第十節　突き目と其治療法

突き目とは、何か竹木の類を以て目を突きたるものにて、輕きは一時の充血に止まるも、重きは、それによつて眼球に損傷を受け、甚だしきは失明に至ることがある。

◆療法　輕きものは、五十倍の硼酸水にて罨法を施し、安靜にして居れば宜しいが、重いのは無論醫療を受けなければならぬ。

第十一節　ノボセ目と其治療法

◆症候　ノボセ目とは、俗に云ふ逆上の爲めに起ると稱して居るもので、一種の結膜炎である。

◆療法　便通を利し、炎症劇しき時は安臥するがよろしく、五十倍硼酸水の罨法、三百倍鉛醫水の點眼または左の藥劑を點眼するがよい。

▲アドレナリン　一滴
右點眼料、一日二三回　蒸餾水　一〇、〇

第十二節　タヾレ目と其治療法

◆症候　本症の原因は種々あるが、眼瞼の周圍がクヾレてウヂヤ〳〵して居るものである。

◆療法　五十倍の黄降汞ワセリンを一日一二回塗布するも宜しいが、根治には元より專門家の治療を受けねばならぬ。

第十三節　加答兒性結膜炎と其治療法

◆原因　本症には急性と慢性とあり、急性症は春秋に多く、傳染性のものである。慢性症は急性症が癒り切らないで慢性に移るのもあるが、一般に不潔の空氣塵埃多き處、煙多き處等に勞働、生活するものに多く來るものであり、また時には鼻の病氣の爲めに起るのもある。

◆症候　急性症の輕きものは唯眼瞼結膜が充血腫脹するのみであるが、重きものは發赤腫脹甚だしく、分泌物も多量に多く、炊くが如く、刺すが如く、眼内に異物あるが如き感じがあつて、羞明流涙を來すものである。慢性症は腫脹、充血共に急性症よりは輕いが、矢張相當に炎症があつて羞明、異物の感等あつて、視力も多少障害せらるゝものである。素人のノボセ目、ハヤリ目など稱するものゝ中には、隨分本症が多いものである。

◆療法　便通を利し、急性症には安靜平臥を守らしめ、五十倍硼酸水、百倍食鹽水の濕法を施し、また左の藥劑を點眼するがよい。

▲四百倍乃至百倍硝酸銀水　一〇、〇

右點眼料、一日二回（急性症）

硝酸銀水を點眼せる場合には、其刺戟を去る爲めに、百倍の食鹽水を以て洗眼せねばならぬ。

▲鹽酸コカイン　〇、一　アドレナリン　二滴
蒸餾水　一〇、〇
右點眼料、一日二三回

第十四節　ハヤリ目と其治療法

◆症候　本症は多くは春秋の候に流行性に來る、結膜の炎症にて、多くは前節の加答兒性結膜炎である。

◆療法　トラホーム患者に於ける如く、手拭、洗面盥等を別にして傳染を防ぎ、其他の療法は總て前節に準ずるがよい。

第十五節　カスミ目と其治療法

◆症候◆ 本症は目のカスミて視力の不充分なるものであるが、素人の云ふカスミ目には、トラホーム、角膜實質炎、慢性結膜炎其他種々なる眼疾の一症候であつて、獨立したる病氣ではない。

◆療法◆ 療法は、其原症によつて異なるが、其何れより來るかは素人には不明であり、また眼がカスム位になれば、餘程病氣が重いものであるから、早く專門家の治療を受くるがよい、併し何れにしても便通を利し、酒煙草、辛烈物を禁ずる等は養生法として守るがよろしい。

第十六節　膿漏性結膜炎と其治療法

◆原因◆ 本症は俗にフウガンと稱へるが、淋病の毒が眼に入つた爲めに起るものである。

◆症候◆ 淋毒が眼に入つてから早きは數時間遲きも二三日の中に、眼に灼熱と異物樣の感があり、羞明流涙を來し、結膜は急に充血腫脹し、角膜の周圍は堤狀に隆起し、結膜囊頭は天鵞絨樣になり、漿液膿性分泌物を淺らし、眼瞼皮膚は發赤腫脹硬變し、膿瘍塔へ難きに至り、多少の發熱を來すものである。

前症二三日續けば今度は膿瘍期に入り、炎症は稍減退するも、膿性の分泌頗る旺盛を極め、帶黃色の膿汁は

淚々として流れ出で、緣には角膜潰瘍より全眼球炎を發して失明するに至るが、早期に相當の手當を施せば、初期より四乃至六週を經て治に至るものである。

◆症候◆ 日本に於ける盲人の大半は本症の爲めである、豫防法としては初生兒にはクレーデ氏點眼を行ひ、產前產後參照）また淋病ある人は常に豫防法を心がけ（花柳病篇參照）若し淋膿飛んで眼に入りたる時は五千倍昇汞水（急には唯の水でもよいからどん〳〵洗ふ）で洗ひ、五十倍硝酸銀水を點眼し、一方片時も早く醫治を受くるがよい。

第十七節　トラホームと其最新治療法

◆症候◆ 本病は埃及に甚だしい蔓延流行したので、一名を埃及眼病と云ひ、又軍陣眼炎と名づけられて居る、其理由は稀世の英傑一世ナポレオンが四隣を征服し歐洲各國の精兵を驅り集めて、埃及遠征を企て、凱旋後此軍隊は、各自分の鄕里に歸還したので、遠征中傳染したトラホームは、忽ちの間に全歐洲に蔓延したから自然かゝる名も起つた次第である。

本病は傳染性を有する一種の眼病で、其來る狀態は急性と、慢性とある、急性に來るものは初めより眼結膜充血し、眼淀甚だしく疼痛あり、烈しき時は角膜にも滲潤を生じ、苦痛は中々一通りでない、此際充分なる療養を施す時は全治の望みがないではないが、少しく怠る時はたとひ種々の病狀は漸次輕快するとも、全治には至らずして慢性トラホームの狀態に陷る、此際眼瞼を反轉して見ると、裏面に粟粒狀の樣のものがあるのを認められる、かく急性に起り漸次慢性に陷るのもあるが、多くは初めより慢性狀態を以て侵來するもので唯僅かに許り眼淀が出るとか、かすむとかいふ樣な工合に、格別の苦痛もなく、傳染し來つて、いつの間にか結膜に前記の如き粟粒狀物が發生する、さて一度此物が發生するや中々容易には治癒しないのみならず、是より種々なる病氣を續發する、即ち眼瞼を侵しては眼瞼內翻症とか外翻症といふ樣な病氣を來し、角膜には潰瘍を生じ、甚だしきに至りては遂に失明する樣な事になる、幸ひにして失明する程に至らずとも、跡には雲翳を貽して視力を障害される爲めに精密なる仕事等は到底出來なくなる。

◆傳染經路　トラホームの傳染するのは、直接にトラホーム患者よりする事もあるが、多くは手巾、手拭、洗面器とか或は開き戸の握、夜具の襟覆等の媒介によりてトラホーム病毒の傳播さるゝ場合が多い、トラホーム病毒は患者の眼より出づる眼淀の中に存在して居るのであるから、此病毒が前記の種々の物に附着し、之に觸るゝ手指を汚染し之れにて眼を擦るより、不知不識の間に傳染するので、一家に一人の病人を生ずる時は、上記の洗面器とか手拭とかを共同に使用するより、自然病毒は甲より乙に乙より丙に傳搬し、遂には一家悉くトラホームの虜となるのである。

◆療法　第十三節に述べたる加答兒結膜炎の用藥は皆本症に應用すべく、殊に硝酸銀は今少し强きもの即ち百倍乃至五十倍のものを用ひる。それから手術療法としては、ブラシにて摩擦する法、箒子にて顆粒を潰す法、其他種々の治療法、新療法等あるも、本症は到底素人療治の出來るものではないから、其詳細は略するが、兎に角本症は捨て置けばパンヌスを來し、遂には失明するに至るものなるを忘れぬ樣に急ぎ治療するが何よりの注意である。

第十八節　トラホームの豫防法

傳染の經路が既に前記の如くであつて見れば、若し各人が充分なる注意を平素怠らなかつたならば、トラホ

ームを豫防するに決して六ケ敷はない賂ち、手巾、手拭等は各自に所持して決して他人のものを使用せぬ事、

尚時々熱湯に浸して澤山の石鹸を以て洗濯する事。

洗面器の如きも常に清潔に保ち、若し一家にトラホーム患者を生ぜし時は、特別の洗面器を與へ、決して他人と共同に使用せしめぬ事。

旅店、下宿屋、料理店の如き多人數出入する所に至りて便所に在る手拭を決して使用せぬ事

附言　便所に手拭を供へ、便所に入りたる者は手指を洗ひ之にて拭ふの習慣は歐洲にはあらぬ事にて吾邦人の潔癖の然らしむる所にて良き事ならむも若し其手拭にして不潔ならむには、折角洗つた手指は再び汚染さるゝ譯であるから、各家共注意して便所の手拭は清潔のものを用ひねばならぬ、然らざれば寧ろ全廢する方優れりである。

子供に向つては家庭に於ても學校に於ても日に二三回石鹸を以て手指を洗滌せしむるの必要がある、昔は病は口より入るといふたがトラホームの如きは手指より入る場合が多い。

其他開戸の把戸とか戸障子の手摺等は常に注意して時々石炭酸水で拭ふ位の注意が欲しい。

斯くの如くに注意し要心しても、トラホームに罹つた場合には、其初期に於て充分なる、適當なる治療を受けて、他に傳撒せぬ前全治せしめねばならぬ。

要するにいづれの傳染病にせよ、各自々衛の方法を充分に講じたならば、豫防し得るので自分の身の大切なる事を知る者は、平素躬から注意せねばならぬ又自衛の道を躬から行ひ能はぬ幼兒の如きに至つては、之れが父母兄弟たる者が此つとめを怠づてはならぬ。

第十九節　眼球の乾く病氣

◆原因　本症は多く營養不良より起るものであつて、人工營養の小兒、慢性腸加答兒、重病等の後に起るものである。

◆症候　本症は結膜乾燥症と稱するもので、初め角膜の周側は三角形の灰白色の斑點を生じ、恰も石鹸の泡か雲母を撒布して乾かしたやうになり、遂には夜盲症となり、または角膜軟化症を來すものである。

◆症候　小兒にありては肝油を牛乳に混じて飲ませると宜しく、既に食餌を取れるものにあつては、鰻、鷄肝

牛肝其他總て脂肪分の多きものを與ふるがよい。

第二十節　夜盲症と其治療法

◆原因　營養不良に來ること多く、其他先天性に一家數人侵さるゝことがある、これは網膜の先天消耗によるものである。

◆症候　夕刻より眼の見えぬ病氣にて、つまり光線の充分ならざる處にては、視力不充分なるものにて、俗には夜メクラ、トリ目など稱ふるものである。

◆療法　鰹、鷄肝、牛肝其他脂肪の多き食物を攝らしむるがよろしく、其他の療法は專門家でなければ出來ぬ

第二十一節　水泡性結膜炎と其治療法

◆原因　本病は一名腺病性結膜炎と稱する位であるから無論腺質の小兒に多く、其他季候の變り目、不潔なる空氣、慢性結膜炎等が誘因となりて發することがある。

◆症候　本症は別にまた濕疹性結膜炎と稱して、云はば皮膚に出來るやうな濕疹が眼に生じたものと思へば差支がない。

◆療法　營養療法を第一とする故、前二症に於ける如く滋養食物を取らしめ、尙ほ內科、腺病の條下に於ける如く衛生的生活を守らしむるがよい。

內服藥としては沃度鐵舍利別を與へ、また眼には蒸溜甘汞を撒布し、十分間後に洗ひ落し、五十倍コカイン水を點眼し、また刺戟症狀甚しきものには百倍のアトロピン水の點眼、吸入器にて硼酸水の蒸氣撒霧を行ふ等其他種々の療法あるが、總て沃度の內服中には甘汞を眼に用ひてはならぬ。

第二十二節　實扶垤里性結膜炎と其治療法

◆原因　ヂフテリー即ち俗に云ふ馬脾風が眼に發したものである。

◆症候　膿漏性結膜炎に於ける如き症候を來すが、此際には分泌物は膿性でなく漿液性であり、眼瞼は充血せずして恰も一面に腐蝕せられたる如く一面に灰白色の粢膜を附するものである。

◆療法　矢張危險な傳染病であるから速かに隔離し、昇汞水の消毒的洗滌、ベーリング氏の血清注射等を行ふものである。

第二十三節　角膜の損傷

覆膜の損傷には種々あつて、樹枝其他の刺衝によつて上皮の剝離を來し、また炭末、細砂、鐵片等の異物が入ることもあり、また切創、突傷、火傷、其他種々の創傷を來すものであるが、此等はなか〳〵素人療治は困難であるから、そつとしていぢらずに、五十倍の硼酸水にて罨法を施し、速かに醫師の治療を求むるがよい。

第二十四節　水泡性角膜炎と其治療法

◆原因と症候　水泡性結膜炎と同じく、其症候も略同樣であるが、本症に發する水泡は唯角膜上に一個乃至數個を生ずるのみである。

◆療法　これも矢張水泡性結膜炎と同樣である、そして刺戟症狀がまつて潰瘍が治するやうになつたならば、

百倍乃至五十倍の黃降汞ワセリンを挿入するがよい。

第二十五節　眼の潰れる病

◆原因　外傷、火傷、腐蝕等の小創より細菌の侵入する爲めに起ることもあれば、また結核、麻疹、猩紅熱等の後、營養不良、腺病質、膿漏眼、トラホーム、ヂフテリ性結膜炎等の爲めに起ることもある。

◆症候　角膜に潰瘍を有するもので、角膜周圍の結膜は赤血發赤し、疼痛、羞明、流涙、前房に蓄膿等あり、重症にあつては角膜全部を破潰せしむるに至るもので、疼痛無きものゝ方は惡性に屬するものである。

◆療法　異物あらば速かに之を除去し、潰瘍には輕き罨法繃帶を施すがよろしきも、若し分泌過多ならば繃帶せざる方がよろしく、百倍のアトロピン水の點眼甘汞末、ヨードホルム末の撒布、食鹽水の結膜下注射、電氣燒灼其他種々の療法がある。

第二十六節　角膜實質炎と其治療法

◆原因　本症の大部分は先天的梅毒である、また稀れには腺病質にも發することがある、梅毒性のものは他にハツチソン氏の齒（三ケ月型の齒）慢性中耳炎等を有するものであるから容易に鑑別することが出來る。

◆症候　角膜に溷濁を呈するもので、それが角膜の中央より始まつて周邊に擴がるもので、周緣から始まつて中央に及ぶものとあり、何れも角膜の表面に灰白色の溷濁を生じ、遂には磨硝子の様になつて深部までも侵さるゝものである、化膿せざるが特徴である。

本症は大抵兩眼を侵すもので、初發より半年乃至一年を經て薄き翳を殘して癒るものである。

◆療法　先天梅毒には驅梅療法（花柳病篇參照）を行ひ、腺病質には營養療法を行ふ。

其他局處療法としては百倍のアトロピン水の點眼溫罨法等を行ひ、末期には百倍乃至五十倍の黃降汞ワセリンの塗入、甘汞の撒布等を行ふ。

第二十七節　白膜炎と其治療法

◆原因　本症にはリウマチス性が最も多く、其他梅毒性、腺病性のものもある。

◆症候　角膜に近く小豆大の帶紫赤色の低き隆起根を生じ、壓痛があり、一ケ月餘を經過すれば、石鹽色の灰白斑を殘して消失するか、また他の部に再發して終には角膜翳を一週することがある

◆療法　全身療法としてリウマチス性にはサリチル酸曹達（內科參照）を與へ、梅毒性には驅梅療法、腺病性には、肝油、沃鐵舍等を服用せしむ。

局處療法としては輕く其部を燒灼するか、または二百倍石炭酸水の結膜下注射、或はまた百倍アトロピン水の點眼を行ふ。

第二章　虹彩其他の疾患

第二十八節　虹彩炎と其治療法

◆原因　梅毒、リウマチス、淋毒、感冒、外傷其他傳染病の後に發することがある。

◆症候　虹彩炎には色々種類あるが、何れも多少の刺戟症狀があり、角膜の周圍に充血を來たし、視力の障害

があつて、疼痛を伴ふものである。

◆療法　原因によつて種々原因療法を行ひ、また局處にはアトロピン水の點眼、または外皆に水蛭を貼し、或は罨法、コカイン水の點眼等を行ふものである。

第二十九節　毛様體の疾患

◆原因　虹彩、毛様體、脈絡膜等は互に相近接して居るので各自の炎症は亦彼是相波及するものである。其主なる原因は全身惡液症、再歸熱、チブス、梅毒、リウマチス、營養不良、月經不調、稀には結核、癲癇、外傷異物等も原因となるものである。

◆症候　甚だしき毛様痛あり、指壓を加ふるに指尖未だ眼圍に達せざるに、患者頭部を後方に引きて之を避くる位のものである、其他羞明流涙劇しく、視力大に減じ、角膜周擁充血、硝子體濁濁等を來すものである。

◆療法　原因療法を施し、局處にはアトロピンを點眼し、內壓亢進には百倍エゼリン水を點眼し、溫罨法を行ひ、昇汞水結膜下注射、虹彩切除等其他種々の療法がある。

第三十節　交感性眼炎

◆原因　本症は一眼に外傷を受け、爲めに毛様體炎或は脈絡膜炎が起れば、それが原因となつて、また他の眼にも誘發するものである。

◆症候　本症には二種類ある、即ち第一は交感性神經症にて、羞明流涙あり、眼瞼は痙攣を起し、角膜の周擁に充血あり、調節痙攣麻痺、毛様神經痛があるも、一眼を除去せば症狀は自ら消失するものである。

他の一は交感性炎症にて、輕症は漿液性虹彩毛様體炎となりて現るゝも、重症にありては劇痛、羞明視力減弱、虹彩の變色、癒着等の惡性虹彩毛様體炎の症狀を發して遂に失明に至るものである。

◆療法　須らく眼科專門醫に就て一眼の摘出を受くるがよい、さすれば一眼だけは助かるものである。

第三十一節　白內障

◆原因　外傷の爲めに水晶體囊を傷なふ爲めに起るのもあれば、または他の眼疾に續發することもあり、其他

には老齢の人、糖尿病、蛋白尿等の人にも起り易いものである。

◆症候　水晶體が混濁して灰白色乃至白色になり、全く視力を失ふに至るものである。

◆療法　專門家の手を借るより外に什方がない、本症の初めには飛蚊と云ふて、眼前に小さな黑い物が飛ぶ様に見ゆるもの故、此際に早く專門家の治療を受くるがよい。手術によつて明を保つことが出來るものである。

第三十二節　硝子體の疾患

硝子體の疾患としては工業に從事して居る者が、作業中誤つて異物を挿入することあり、此等は捨て置けば全眼球炎を起して失明に至るもの故、早く醫治を受くるがよい。

硝子體混濁は、梅毒の爲めに起ることが多く、甚だしくなると僅かに明暗を辨ずるのみになるものである。これは驅梅法を行ふと共に五十倍食鹽水を結膜下に注射するものであるが、其療治は無論專門家でなければ出來ぬ。

硝子體脂解症は、高度の近視眼、綠內障の末期等に來るもので、硝子體の融けて了ふものであるが、これは

其原因病を治するより外に方法が無い。

第三十三節　脈絡膜炎と其治療法

本症には漿液性膜絡脈炎、成形性脈絡膜炎、化膿性脈絡膜炎等あり、眼火閃發、暈視症、夜盲症等を發しや或は失明に至るものもあるが、其療法は驅梅法、手術療法等種々ありて何れも素人の療治し得るものではないから、早く專門家の治を受くるがよい。

第三十四節　網膜グリオーム

本症は一歲乃至四歲の小兒に多き惡性の腫瘍であつて、初期には、眼中に帶黃白色の光輝を認むるものであるから、此際に須らく眼球の摘出を受くるがよい、さも無いと腦或は他の內臟に轉移して死に至らしむるものである。

第三十五節　色素性網膜炎(ソコヒ)と其治療法

◆原因　不明であるが遺傳は確實であり、また父母の血族結婚によつて來ることもあり、男子より女子に多くまた一眼よりは兩眼に來ることが多いものである。

◆症候　患者は夜盲を訴へ、小兒時に來るのが通例であるが、時としては春機發動期に發し、追々には夜間のみならず、晝間にても光線少き處にては見えぬやうになり、視野は頗る縮少し洞管を以て物を見る如くになり其全く失明する迄には長くは五十年を費すものである。

◆療法　殆ど無効であるが、成るべく眼の使用を少くし、身體の過勞を戒め、力めて營養物を與へ、電氣療法發汗療法、瀉血法「ストリヒニン」または安知必林の注射を行へば多少の効あるが、少くも失明に至るの時期を延長せしむることが出來る故、矢張醫療を受くるがよろしく、豫防法としては血族結婚を禁するがよい。

第三十六節　緑内障と其治療法

◆症候　本病は發生期に於て頭痛、嘔吐等を發するもの故、往々腦病または胃病と誤らるゝことがある。そして前驅期に入れば視力朦朧となり、燈火の周圍に赤と青の虹の如き輪を見、一二週の後に至れば突然劇しき頭痛、耳痛、齒痛等を發し、角膜は一樣に混濁り、表面に粗糙となり、知覺は鈍麻し、虹彩は變色し、瞳孔は散大して、其色綠色となり、試みに眼球を壓するに、頗る硬くして石の如くなれるを感するものである。

また電擊性、綠内障と云ふものがあつて、發病後一二時間で失明することがある。

次にまた慢性症は疼痛少く、諸症緩慢に來るものである。

◆療法　片時も早く醫師より虹彩切除術を受くるがよろしい、早ければ早い程奏効するものである。

藥物にては内壓亢進を防ぐ爲めに、百倍乃至五百倍のエゼリンを點眼することがあるも、古加乙水やアトロピン水を點眼することは禁物であるから、決して之を用ひてはならぬ、これは特に專門家ならざる人に注告して置く次第で、總て内壓の亢進即ち眼球の硬くなるものには此等のものは益亢進せしむるもの故、禁物と心得ねばならぬ。

第三章　屈折機其他の疾病

第三十七節　文明と近視眼

文明は身體の總ての機關に重荷を負はすが其眼に負はす荷は殊に重い、野蠻人は遠近大小の物體を平均に視て居るが我には讀書と云ふ特別な仕事をやつて眼を疲らせ、更に室内に於ける執務によつて眼を過勞させる爲めに追々に眼の力が弱くなつて、眼に種々の障害を起すが、近視眼なども矢張其爲めに起る障害の一つなのである。

第三十八節　近視眼と其損害

近視眼とは、其名の如く近くで無ければ物の視えぬ、即ち遠くの物は茫然と分らぬのが特徴であつて、これが爲めに樂なからぬ損失を受けるもので、之を大にしては天象の奇、山水の美一も之を窺ふを得ず、之を小にしては日常百般の事物擧げて數ふる遑あらざる程である。これあるが爲めに國民の義務たる兵役に就くことも出來なければ、これが障碍となつて己れの欲する職業に從事することも出來ない、また視器の官能如何は直接知識の發達に向つて多大の影響を及ぼすものであるから幼時より高度の近視ある者は往々其性情に缺如する所があるものである。

近視の未だ高度ならざるものにあつては補正眼鏡によつて其視力を補ふことが出來るが、かくの如きは堂々六尺の偉軀を以て一小眼鏡の奴隷となるに異らざるものであつて、若し過誤つて之を忘れたる場合には丸で盲者と分つ處なく、行住坐臥其不便實に云ふべからざるものがある、學校に行つては黑板の字を詳にせず、道に行きて友に禮せず、家を訪ふに號を辯ぜず、物に躓づき車馬に觸れ、物品を錯まり、居室に迷ひ、明月を眺めて朧月となし敵に逢ふて敵となさざる許りでなく、一朝水火の災厄に遭遇しては他に先んじて徒らに身を害ふの不幸に際會する等意に償ふべからざる危險を負ふ者と云はざるを得ないのである。

近世眼科學の泰斗ドレデルス氏は「高度の近視眼者は、宇宙の萬象社會の活畫を知得すること常に僅少であるによつて、從つて事物に對する想像憶測も不充分なるを免れない、試みに近視眼者と對話するに、視線兩々

視映射することが無い爲めに、顏色を以て意を言外に現すが如きことは決して窺み得べからざるものである」と云ふて居るが近視眼者の不幸は實に憐むべきものである。

要するに近視眼なるものは、一定の距離即ち遠點以內にあるものは充分に明視することは出來るが、遠點以外にあるものは曚輪を蒙し、其の像不明瞭なるものである、醫學上では二D $(\frac{1}{50})$ 以下の近視を輕度とし、二D乃至六Dを中度とし、六D $(\frac{1}{10})$ 以上を强度として區別してある。それから近視者の他の症候としては物對を重複して見ることや、眼球硝子體の混濁ある爲めに、眼前に蚊の飛ぶ如く見え、其蚊はいくら追ふても去らざる、所謂眼前飛蚊を訴ふるものもあるが、それよりも困るのは筋性眼精疲勞と云ふて近業をするに眼が疲れ易く、長く業務を取ることが出來なくなり、甚だしきは外斜視を起すこともある。

第三十九節　近視眼發生の原因

さて此不幸不便にして然も危險を伴へる近視眼は抑々何によつ起るかと云ふに、或學者は之を遺傳となし、他は之を非遺傳と爭ふて容易に決せざるやうであるが、多くは學者の意見を綜合して見るに、近視眼者の子女

の多くは矢視之を有することの多きは事實である處から推察するに、一方に遺傳的素質あり他に之を助長誘致するの誘因があつて遂に近視に陷るものである。

近視を發生する原因の多くは讀書習學であつて、之を發生する場處の多くは學校である、近視を目して一の文明病と稱するも、つまり此理由に外ならぬもので、野蠻草昧の住民に近視を發見することは極めて少く、また繁華の都市に多くして僻陬の村落に稀れなるも矢視これ文明病たる爲めであらう。

近視は學生殊に高等教育を受けたる學生に多い、有名なるコン氏の調査によると、小學校時代には百人中十四人、中學校時代には百人中十六人位よりしかないものが、大學時代になると百人中實に六十人と云ふ多數を算するに至ると云ふことである。また獨逸國シュシフト、リンブレル氏の調査報告によれば

一年乃至五年の就學生	中等度の近視	九、五%	高度近視	〇、二%
九年乃至十年	同	上　一一、%	同　上	二、二%
十一年	同	上　二一、%	同　上	五、九%

何れも學年の進むに連れて近視の益多くなるを統計上證明して居る、然らば何の爲めに學生にかく近視か

多いかと云ふに、彼等學生は其校舍にあるの時は勿論、家庭にあるの時であつても讀書に其一日の多くを費し視線は常に數寸の短距離に輻輳する爲めに甚だしく眼筋を緊張し、壓を眼球に及ぼし、器械的作用によつて自然に眼球軸を延長せしむるものである。殊に幼年の際にあつては眼球の網膜が未だ强靭とならず、充分なる抵抗力を有せざる爲めに視線の輻輳感强く、其使用久しきに至れば遂に近視に陷るは實に已むを得ざる處である。併し小學校時代にあつては書籍の文字の大なると眼を使ふ時間の少いとの爲めに、近視に罹るものも尠いが、中學に入るに及んでは俄然之れに惱むもの多く、年を逐ふて漸く其數を增し、成年期に至れば漸く停止するに至るも、尙ほ續いて高等の學府に進み日夜細密なる書籍の繙讀、或は微細なる業務に從事するときは近視の度は益進み或は種々なる病的變化を起して感益困難の域に陷るものである。

職業もまた關係あるもので、ミュンヘン市のゼツケル氏の調査によると

農夫	二、四%	市街に於ける勞働者	四、〇%
手工者	八、七%	市街に於ける筆耕者、手工職人、商賈	四、四〇%
一年志願兵	五八、〇%	高等中學以上の學生	六八、〇%

またコン氏の統計によれば、金銀職が百人中十二人、版木職が百人中四十二人、活字拾ひは百人中五十一人で、眼を近く使ふ職業程それ現近視眼は多いのは事實である。また近業に關係なくして起る所謂炎症近視なるものもある、それから眼に何かの故障ある場合には、よく見えないから物を視るのに非常に骨が折れるが、其骨の折れるのを無理に我慢して努力して使ふ爲に起ることもある、要するに一言にして之を云へば、近視眼は眼の使ひ方が惡いから起ると云ふても宜しい。

從來我國にては學問と云へば多くは經書等の大文字のものを用ひて居つたのと、其他の關係とよりして近視眼の發生は其だ尠くなかつたが、最近三四十年歐洲の文物一時に流入し、書籍は悉く活字本となり、また都鄙至る處蟹行文字の必要に迫られてより、近視の發生急に多くなつて來た、それに一方文弱の弊を發揮し來つて、身體の運動充分ならず、爲めに筋神萎縮せるより、益近視發生の度を多くした。殊に學生間に於ては其數著しく十中の二三は凹面鏡を裝ふて得々として居る、殊に彼等一部の外貌衒者の仲間には、眼鏡を一種の裝飾と心得、其眼は未だ近視眼鏡裝用の必要なき弱程度のものなるか、或は甚だしきは正常健全なる視力を有するにも拘らず、故意に眼鏡を高からぬ鼻背に擔いで、さも勉强家らしく裝ふて得々然たるに至

つては、其愚や遂に及ぶべからずと嘆するより外ないのである。

第四十節　近視眼の豫防法

さて今度は近視の豫防法であるが、これはなか〳〵容易の業ではない、殊に既に近視に陷つたものにあつては、殆んど全治の見込みは無い（尤も二三の手術的療法はあるが未だ完全でない）から、益〻豫防法の必要がある、若し完全に之を豫防するか少くとも其進行を遏止することが出來たならば、小は個人の利益を增進し、大は國家人類社會の幸福に向つて確かに其幾分を獲得することは疑ひを容れざる處である。

近視の發生は主として學校にあるから學校に於ける授業時間、生徒の體位及び椅子、机等の器具、採光、運動等に就て充分なる注意を拂はねばならぬが今日の學校衛生なるものはほんの申譯丈けで此等の點に注意を拂つて居ないのは遺憾の極みであるが、今此等に就て少しく其注意を擧げて見よう。

◆體位　體位を正常に保持するは今より發育すべき青年の骨格筋肉の發達、其他呼吸器、消化器の作用並びに血液の循環機能に向つて多大の關係を有するものであると同時に、また眼目の衛生に對しても最も大切のことである。體位を正常に保つは明視の距離を正確に維持するに必要なるものである、明視の距離が大なれば大なる程視軸の輻輳之れに準じて少く、眼筋の爲めに眼球の壓迫を被むることも亦從つて輕易なものであるから、視距は餘り短かゝらざるがよい、普通眼と物體との距離の適當なるは一尺乃至一尺三寸位である、併し圖畫或は細密なる業務に從事する時は此距離を越えて近接することがあるも、成るべく此距離に於て正常なる體位を取らしむるのがよいのである。

◆椅子及び机　椅子並びに机の構造如何は大なる關係を有するものである、蓋し體位の平均を保たんとせば背筋、頸筋其他の作用を藉らねばならぬものであるから、椅子、机等の構造が其宜しきを得ざる場合には、幼弱なる生徒は久しく正靜に椅座するに堪へないので屢〻其體勢を變じ、久しきに渉れば筋肉疲勞して身體の上部は重力の爲め不可制的に前方に彎曲し、支持するものが無ければ正當の體位を保つことが出來なくなる、だから學校殊に小中學に於ける椅子、机等の構造に關しては必ず學問的注意を要するものである。

椅子並びに机の高さに就ては文部省の囑託により三島醫學博士の調査せるものがあるから參考の爲めに左に掲げん。

	自六年至八年	自八年至十年	自十年至十二年	自十二年至十四年
机の高	一尺五寸	一尺二寸五分	一尺八寸	一尺九寸五分
机の幅	一尺二寸	一尺二寸五分	一尺三寸	一尺三寸五分
机の長	三尺六寸	三尺六寸	四尺	四尺
椅子の高	八寸四分	九寸二分	一尺	一尺
椅子の幅	八寸	八寸五分	九寸	九寸五分
椅子の長	三尺六寸	三尺六寸	四尺	四尺

併しこれは平均であるから同じ學年でも身長に長短があるから、嚴密に云へば各個人の身長に應じて其高さを取捨せねばならぬ、この關係に就ては、餘はドクトル久保田論氏の意見を最も可良と信ずる故其要項を左に掲げんに、先づ適當なる椅子は左の要項を具すを要す。

（一）椅子の高さは下肢の長さに均しきもの、換言すれば足蹠より膝に至るまでとす。

（二）座面は上腿の三分の二即ち少くも座骨結節より膝蓋に至るの廣さを要す。

（三）承背部は稍S字形となり、少しく後方に傾斜するを要す。

適當なる机は左の如き要點を要す。

（一）机面は大約十五度の傾斜を有し、板面の廣さは一尺五寸以下なるべからず。

（二）机面と座面との距離は鉛直に下垂したる肘關節と座骨結節との距離に一寸五分を加へたるものとす。

（三）机及び椅子の連結は一定の距離を保ち、椅子の前緣は椅面を越ゆること約一尺五寸なるを良しとす。

（採光）　光線の射入が十分でないと、自然に眼目を物體に近接するが、此際物體が小なる時は明視を得んとして感近接して、爲めに視軸の輻輳を招くの害があるから、學校其他の場所に於ける光線の明度は一尺五寸の距離に於て普通新聞の五號文字を容易に明視し得るを程度とすればよいのである。

光線には、日光、電燈、石油、瓦斯等色々なるが要するに光度大にして始終間斷なく明度に變異なく然も光線の動搖せざるものが最良である此點からして云ふ時には日光は最良の光源である、人工光源は何れも一得一失あるが、光りの動搖せざると、室内空氣を汚染せざる點より云へば電燈は最も宜しい、それから我々の眼は光線の直射に堪へぬもの故、人工光線を用ひる場合には成るべく反射さして用ひるやうにするが宜しく、光線

を取る方向は左側又は後方よりするがよい。

◆體育　體育はまた近視眼豫防に重大なる關係がある、前にも云ふが如く、學校課業の眼の衛生上有害なるは之に從事する時間の長きに過ぎると、一は眼目と物體との距離常に一定度を越えて近接する弊害あるとに原因するものであるから、課業の如きも眼を勞するものと、然らざるものとを交互相隔てゝ授け、細密なる課業は決して連續さしてはならぬ、また授業時間の如きは必ず毎時十五分の休息を要するもので、其休息時間には兒童を庭園に導いて新鮮なる空氣中に縱まゝに遊戯せしめ、眼調節筋の疲勞を恢復せしむるが肝要である。また中學程度の學校にあつては力めて野外の運動を奬勵し、身心の强壯を圖り悪德の汚行に感染するを誡め、常に勇武の氣象を鼓舞養成することを專らとし、柔道、擊劍其他の體育的動作に筋神を練磨するは近視の豫防に向つて重要なる間接的方法である。

◆眼鏡　次に眼鏡の選び方に就ても注意を要するものである。學生の中には近視眼に眼鏡をかければ段々度が進んで悪くなると云ふて無理に耐へて涙を流しながら我慢をして居るものもあるが、之れは甚だ危險なことである、弱い近視の時によく注意して適當の眼鏡を選んでかければ輕くて濟むのに、眼の衛生法を知らぬ爲めに

無理に眼の筋を使つて、爲めに眼筋疲勞を起して、近視の度が益進む許りで無く、斜視に陷るなどもよくある例であるから、よく注意して適當の眼鏡を用ひねばならぬ。併し適當の眼鏡と云ふても素人が眼鏡屋に行つて我が眼に合ふのを選ぶなどは危險であるから、必ず熟練なる眼科醫の選定を要するものである、何是かと云ふに素人には完全に近視の度を計ることが出來ないから、從つて其れに適應する眼鏡を選むことの出來ぬは申す迄も無いことである、次にはまた「レンズ」の品質を選むことが出來ぬ「レンズ」のよいのは浸色「レンズ」である、水晶の眼鏡の價の高いのは品の良いのにもよるが、一つは此浸色「レンズ」と云ふ關係もある。また其次には瞳孔領の距離に應じた眼鏡を選むことが出來ぬ、瞳孔領は男子は六十密迷、女子は五十七八密迷、また普通であるが、若し眼鏡がこれより廣いと視線が一日廣くなり、次で狹くなるから、視軸の輻輳作用を主とする內直筋の疲勞を來たした者であるから、此作用を補償すれば調節筋が同時に刺戟されて働く、殊に調節の制限されてある近視眼にあつては餘計に刺戟になるので直に害を及ぼすことになるから、眼鏡の選擇は必ず專門醫に任すべきものである

以上の數節によつて近視豫防法の大體を述べ盡したが、先年同志社教師ベルリ氏の日本人の近視に就て論じ

たる文章は參考に價するものがあるから左に其一節を紹介せん（東京醫事新誌第七九六號に據る）

第一　幼年生徒及び青年學生が活潑なる運動を怠ろにより、之れが爲めに身體組織の發達充分ならざる時は、眼も亦内壓に抵抗する能はずして其原形を失ひ、眼球後部に伸展す、これ近視の直接原因にして日本人は最も多く此原因より近視となるなり。

第二　日本人の住家及び學校の教場にて日光を室内に入るゝことの不足なること、其方法の誤てること、即ち低くして突出したる檐或は家に接近したる高き墻壁、低くして黑き天井、紙を張りたる窓、障子の類は皆直接に近視の原因となる。

第三　火鉢、行火、爐等を用ひ、不適當にして不充分なる暖を取ること、又小學校の如きは空氣の流通宜しからざる爲め身體の組織を弱くし、從つて其抵抗力を減少す。

第四　平面なる机は既に不適當なるものなり、殊に日本の低き机は眼の視線と書物と直角をなさずして鈍角をなし、又之れに凭りかゝりて頭を垂るゝ故に眼の充血を起し遂に眼軸延長するに至る。

第五　字畫紛雜なる漢字を用ひ、之を小形に印刷し、加ふるに不充分なる光線を以て讀むが爲めに自然に眼を

書物に接近せしむるに至る。

第四十一節　遠視眼

本症は近視の反對に、普通の人よりも物を遠く離して、漸く其れを確實に見ることを得るもので、遠くのものを見るには差支が無いが、近業には最も困難を感ずるものである。また強ひて近業を營めば眼邊に疼痛を覺え突然視力朦朧となることがある。

本症は年齡の長幼に關せず起るもので、これと同時に内斜視、時としては小數、虹彩或は脈絡膜の缺損、亂視等を備へ、また調力の減衰は年齡に應ぜざるものである。

◆療法　眼科醫に適當の眼鏡を選定して貰ひ、常に之を使用するより外に方法が無い。

第四十二節　老視眼

本症は四十歲以上の年齡に至り、近點八「ツオル」に至れば發するもので、近距離にあつては細字を讀み、

または近業を爲すに困難であつて、遠く離して見なければならぬが、これは決して遠視眼では無い、唯近點に於ける眼の調節力は減弱するだけあつて、遠く離して見れば少しも普通人と異なる處は無いものである、そして其調節領は年齢に準するものである。

◆療法　別に療法とては無く、近業を營むには老眼鏡を與ふるがよい。

第四十三節　不同視眼

これは左右の眼が遠近に對する視力が不同なるものであつて、一眼は正視に、他眼は近視或は遠視のものもあれば、また一眼は近視に一眼は遠視なるものもあり、或はまた兩眼共に近視或は遠視なるも、其度が兩眼異なるかまたは亂視等であるものもあつて一樣でない

◆療法　左右の視力を計り、其度に應ずる眼鏡を用ひさするより外に方法が無い。

第四十四節　亂視眼

◆原因　先天性のものが多いが、中には外傷、または手術後に起るものもある

◆症候　物體の形狀を正當に見ることは出來ないもので、正方形のものは不正方形に見えたり、或は長方形に見えたり、圓形は楕圓形に見ゆる等總て物體が不正に見え、甚だしきは朦朧を生じ、全く不明のものもあり、これに正亂視、不正亂視、雜性亂視等の種類がある。

◆療法　矢張これに應ずる補正眼鏡を用ひるがよろしい。

第四十五節　眼の早く疲るゝ症

◆症候　これは眼精疲勞症と云ふて、眼が疲れ易く、少しの作業または讀書をなすも、直に眼の周圍に不快の感を覺え、視力朦朧として時々疼痛を發し、また羞明流涙等ありて、眼を閉ぢて其恢復を待たなければ再び眼を使ふことの出來ぬものである。

◆療法　本症には筋性眼精疲勞、調節性眼精疲勞、網膜性眼精疲勞、神經性眼精疲勞、結膜炎性眼精疲勞等の種類があり、其種類によつて各々療法も異るものであるから何れにしても早く專門家の治療を受くるがよい。

第四十六節　斜視と其治療法

◆症候　本症は俗にヤブニラミと稱するもので、これに外斜視と內斜視との二種類ある、外斜視は多くは近視を伴ひ、內斜視は多くは遠視を伴ふものである。

◆療法　小兒時の斜視は長ずれば多少自然に矯正さるゝ傾きあるもの故、手術を受くるにしても十二三歲に至りても尙且つ斜視あるときは始めて手術を受くるが宜しく、手術は極めて單簡にして苦も無く矯正し得るものである。

第四十七節　晝盲症と其治療法

◆原因　酒、煙草の中毒、雪中の旅行、日蝕の望見、または神經性の人、久しく暗き處に居住し、突然明處に出でたる場合の如きは本症を來すものである。

◆症候　夜盲とは反對に、强い光線に對しては視力大に衰ぶも、弱い光線に對しては殆ど常人に均しき視力を

有するものである。

◆療法　原因によつて療法の違ふは勿論のことであるが、兎に角薄暗色、または薄煙色の眼鏡を與へて漸次光線に慣れしむるがよろしく、神經性のものには臭劑を與ふるがよい。

第四十八節　色盲

◆色盲の種類　色盲とは色の見えぬ病氣であるが、この色盲の中には紅色盲、綠色盲または紅綠色盲等種々あるが、今紅綠色盲の人に太陽光線を分析せるスペクトルムを見せると、百六十種もある色の變化が唯二種の變化よりしか見えない、丁度溫半部に黃の一色を冷半部に靑の一色を感ずる丈で、赤は暗い黃色に、橙黃は少し明るい黃色に綠は灰色に見えるが、唯黃と靑との二系統を見分ける力は銳敏である。

◆色神の減弱　色は面積によつて其感じが違ふから、色盲者でも大きな物だと餘程見易いそれから色を見て居る時間が長くつて、それが純色であると大分判りよいものである、また一口に色盲者と云つても其階級によつて違ふもので、丁度盲者の中にも一寸先も判らぬと一人歩きが出來るのとあるやうなもので、色盲者でも極輕

いのは健康の者が判る程度の距離で小さい濃色の物を一寸見せられる時に判別がつかぬが、其他はさう差支無いものである、この位なのは色盲者でなく色神の減弱と稱へるのであるが、其病勢が重ると眞の色盲となるのものである。

◆色盲より生ずる危險　色盲は今より百二十年前英國の化學者ダルトン氏が始めて自分の紅色盲であることを調査して、社會に報告してから世人の注意を惹くやうになり、また色盲を一名ダルトン氏病と云ふて居る、今より約四十年前瑞典で汽車の衝突して九名の死者を出した時に、キルムクレン氏が其原因を調査した處、機關手が色盲であつて信號の色が判らない爲めであつた、また獨逸のブリケスアンザーが衝突した時も、其原因は船長の色盲であつた、其他にも迫々色盲の危險である實例が發見されたので、歐洲各國では鐵道員や船員の色神調査を行ふやうになり、我日本にても近來この問題に注目して陸海軍商船、工業學校等の入學試驗や鐵道省の採用試驗には色神を詳しく調査して色盲者を除き危害を未然に防ぐ樣にして居る。

◆色盲者の實例　一體此色盲者は男子に多くて百人中五人の割合にあるが、女子は甚だ少く百人に一人位のものである、また色盲は天性である故自身は左程不自由を感ぜぬ、そして大抵花は紅、血は赤、墨は黑と云ふ位

のことは習慣上意識して居るから一通り差支が無いと思ふて居る、併し楓の葉が綠より紅に靑い柿の實が赤るんだ時なぞは一寸判らない、或紅色盲者は紅葉見物に往つて何時でも靑いと云ひ、また或色盲患者は他の花はどうにか色が見えるが杜鵑花だけは判らぬと云ひ、茶褐色の手袋だと思つて買つたのが朱鷺色であつたり、黑縞のつもりでつけて居たネクタイは赤筋であつた等云ふ滑稽がある、また全色盲の人は大抵眼がショボ〳〵して明るい處をまぶしがるものである。

◆色盲の檢査　それから此色盲はどうして檢査するかと云ふに、各種の色毛糸を亂雜に積んで置いて、試驗者が其中から或一色の毛絲を取り出し、受驗者にそれと同樣の毛絲を選り出させる、此際健眼者ならば速かに選り出すが、色盲者であると散々迷ふてから丸で違つた色の毛絲を選り出すので、其相違の程度によつて紅色盲とか全色盲とかを調査鑑別するのである、又樣々な色を排列した表を一定の距離から見ても試驗者の命じた色を指させる法もあれば最初から色盲者の間違ひさうな色を並べて問を發するのもあれば、または綠色の中へ紅の文字を表はしたものを讀ませて試むる等種々其方法があるが、此最後の方法は最も進歩せる方法であつて海軍や鐵道院では此を採用して居る。

色盲は天性の疾患であるから根治することは六づかしいが、力めて色の判別を練習すれば誤りを減ずることが出來、また色のある光線にて物體を透して見ると餘程見分けが出來易い、要するに色盲は自身は左程に感じなくも處世上には大なる不都合を感ずるもの故、血族結婚はお互に禁止して此弊害を幾分なりとも防ぎたいものである。

第四章　眼病の養生法

第四十九節　雪と眼病との關係

雪も少し位だと害を爲さぬが、北國の如き積雪の地にて長く戸外にあると眼を患ふもので、其れは多くは紅視症と云ふて、總て物の赤く視える病症を來し、そして眼が痛くなり、涙が出て、視力が薄くなると云ふ風に網膜に一種の變化を來すものであるから、雪中を長く旅行するとか、雪中にて作業する時等には薄墨色の眼鏡をかけて之れを豫防するがよい。

第五十節　眼病と紅絹の片

眼病患者が昔より何故に紅絹の片を用ふるかは畢竟其質の輕軟なると色彩の弱きよりする爲めであらうが、元來絹布の纖維は之を木綿に比するに其質緻密で液汁を吸收する性は不充分であるから涙液や眼淫を拭ふても之を吸收することなく多くは其表面に附着して居るので容易に乾燥し病毒は塵埃に混じ飛散する惧がある且つ其上顯彩あるを以て汚染の程度も不明瞭で隨つて取扱ひ上之が清洗を怠るといふ樣な結果になる、斯の如きは決して眼を清潔に保つ所以ではあるまい特に小なる五寸四方位の紅絹の片を幾重にか疊んで、之を以て眼を拂拭するのは何の爲めか殆ど其理由を見出し難い、恐らくは何の譯とも知らず眼病には紅絹の片が一種獨特なる効能でもあるかの如く、信ずる曖昧な考へからでもあらうと思ふが誠に理由なき事で、現今何れの藥舗にても商ふ脱脂ガーゼこそ値段も廉く吸收力も充分で且つ清潔なる白布であるから汚染すれば直に知れ易く直に捨てゝ他の新なる品と取換ふる事も出來又熱湯と石鹼とで清洗すれば兩三回は使用に堪ふるので頗る便利だ、夫の粗末なる紅絹の片は色澤脱出して皮膚を染め時に或は有害なる染料の眼中に入るの事がないでもないから決し

てかゝる不潔にして不爲めなる物品を用ひぬが宜しい。

第五十一節　眼病に小便と乳汁

今でもどうかすると斯樣な馬鹿らしき考へを以て居る人が間々ある、其れは眼病に自己の小便を點入する事であるこれこそ實に危險中の危險で彼の恐るべき風眼（膿漏性結膜炎）の如き往々斯る事より來るのである、今此處に眼病患者ありとせんか、其人の尿中格別有毒のものなしとするも之を眼内に點入した迚何の利益もない然し若し其人が不幸にして淋病に罹り居たらんには其癖毒は忽ちに眼に入り恐るべき風眼を起すであらう、風眼の危險なる眼病なる事は萬人の皆承知する所で現今の進歩したる治療に由るも少しく時期を失したる風眼は殆ど快癒の途はないのである

又乳汁を點眼する事であるが之は尿程に危險でもないが、殆ど有害無益である特に身に惡き疾病でもある人の乳汁であつたなら之より種々なる危險の眼病を惹起する事なきを保し難いから先づ忘れても是等のものを點眼して大切な身を傷ふ樣な愚を學ばぬが宜しい。

第五十二節　眼内の異物を甜め取る事

己れが子女又は他人の眼中に塵埃異物等の入りたる時之を口舌にて甜め取る事常に俗間に行はる、斯の如きは前の尿乳汁と同じく頗る危險なる者である、人の口中又は唾液中には種々なる黴菌を含有し居るものであるから若し異物により眼に負傷したる時之に口内の液を附着するが如きは態々創面に黴菌を植付ける樣なもので危險至極と謂はねばならぬ、若し又其人の口唇又は舌等に梅毒性の疾患でも存在する際に於ては忽ち之を感染ずること彼の接吻によりて病毒を傳播すると同樣である危險々々。

第五十三節　眼病に眞珠

古くより支那に行はれ又日本にても漢方醫の用ひたもので眼病の際眞珠を其儘眼中に入れ又は粉末として用ふるので、今でも或る一部には之を信用する人が間々ある樣だ、元來眞珠中には加里類を含有して居るから之を細粉して用ふれば多少酸敏性の作用がないではないが、然し現今では猶他に幾何も之に優る藥品がある、

特に俗間の迷信より單に眼病には眞珠といふ樣な空漠たる考へより眼内に眞珠を入れるなどは危險千萬といはねばならぬ、一寸した塵埃が眼に入つてさへ其苦痛は中々に堪へ難きもの況して炎症ある眼に態々眞珠を入れるなどは決して適當な方法ではありますまい、眞丸な眞珠を眼中に入れる時は之に依りて塵埃を吸ひ取るとか又は疼痛が去るとか謂ふ樣な事は全く一種の迷信で決して左樣な理由はない、嘗昔より金銀とか寶玉とかいふ樣な貴重な物質には何か不可思議なものでも含まれて居る樣に信じられて居るが、理化學の進歩した今日左樣な誤解を持つて居るのは甚だ殘念な次第である。

第五十四節　眼病に神水

弘法樣の御水とか又は何々神の御手洗とか地方地方に於て廣く迷信的に用ひらるゝ者は今でも全國には尠くはあるまい、予は曾て甲州身延に遊びたる際山腹の御堂に幾多の眼病者の集まり居るのを見受けたるより斯る僻地に眼科醫者ありとや訝かりしに其れは全く眼科醫にはあらで日蓮上人の高足とかいふ日朝の祠堂で堂前に掘ある御手洗こそ眼病患者の神藥なれと予は好奇心の起りて之を覗き見しに其中には善男善女の投げ入れし幾

多の酸化したる孔錢あるを見たり或程！此孔錢より來れる丹礬こそ日朝目藥の本態なれと點頭した事があつた若し日朝にして丹礬の一種の收斂劑たる事を知りて之を眼病者に與へしものとすれば實に當時に於ける驚くべき知識なり开は兎に角此處に集まれる患者を見しに、收斂藥の必要なるものゝみにあらで却て禁忌とするものも尠かりし特に御手洗には別に被蓋のあるでもなければ、山中と雖も其中には塵蓋の混入して決して清潔なものではない、之を一種の信仰から眼病の如何をも辯へず無暗に點眼洗眼するのは危險至極の事と思ふた。

世間には之に類する神佛の御水なる者が尠くはあるまい、偶然の事より甲の患者が之に依りて癒つたからといふて其人の疾病の何なるをも知らず直に之に乙の患者に勸めるといふのは無駄なる親切である、又何の思慮もなく勸めらるゝ儘採て之を用ふるのも怜悧な考へではありますまい、ぞん所其處らの御膝下の東京にさへ何々藥師とか法院とかいふ所には、えたいも明らぬ怪しげなる神官賣僧が禁壓祈禱に事寄けて何やら知らぬ御水など物體ぶつて賣り付ける輩尠くはない、諸君心して斯る者に瞞着されぬ用心肝要なり。

第五十五節　眼星を燒くといふ事

是は或る地方により行はるゝ事であるが、眼の翳む時眼尾を燒くと稱し多くは背部の皮脂腺に孔鏡を當てがひ孔中より燃火を以て之を燒灼するのだ畢竟一種の誘導法で直接眼に向つて危害を及ぼす程の事でもないから強て排斥する譯でもないが醫學の進歩した今日かゝる事に滿足して大切な病氣を等閑にするのは文明國の民として恥づべき事ではありますまいか、若し一斯る事に暇取る間疾病治療の時期を失する虞あらば取返しが付かないではないか。

第五十六節　色盲に八ツ目鰻

全國一般に行はるゝ俗間療法で之は決して間違つた事といふでは無いが、何故に八ツ目鰻に限るのかマサカ八つ目が有るからといふ譯でもあるまい、若左樣としたら大笑ひな話しで八ツ目鰻は決して八つの目を以て居るのではない、あれは一種の纖鬚に外ならぬ、強い性質の動物を食すれば强くなるとか勝栗を喰へば齒が堅くなるとか謂ふ樣な事は一種の迷信で、或る人は大隈侯の脚を漬けた酒精を獨探に飲ませたら愛國心が起るだらうなどいふ人もある、閑話休題夜盲は必ずしも八ツ目鰻に限る譯ではない、脂肪に富んだ滋養食品なれば何でもよいので手に入り易い唯の鰻でも鳥肉でも宜しい特に肝臟など最も妙だ、然し夜盲には種々あるから單に食餌療法にのみ滿足して他の醫療を怠つては時に意外の結果に陷る事があるから注意々々。

第五十七節　眼鏡の選擇

能く人の語る事！某さんは眼の性がよいので七十歳になつても眼鏡無しで新聞が讀めると何ぞ知らん、斯る人は眼の性が良いのではなく近眼なるが故である、又何時迄も眼の性の良からん事を欲し眼鏡を掛けると眼が暗くなると謂ふ俗言を信じ眼鏡の必要なる年齡に達するも態と眼鏡を用ひない人がある、是等は大なる間違ひで人は年齡と共に老眼に陷るのは生理的の變化で皺のよつたり白髮の出來たりするのと同じ道理で少しも不思議はないのであるから、年齡に適應した眼鏡を用ふるのは正に必要な事であるのだ、それで老眼は大抵四十五六歳から初まるのであるから、年齡に適應した眼鏡といへば菅通左の通りである、老眼鏡に度といふのは不適當かも知れぬが習慣に依り記せば

年齡　老眼鏡　　年齡　老眼鏡

四十五年　約八十度　五十年　約四十度
六十年　約二十度　七十度　約十二度
八十年　約十度　九十年　約八度

其他近視眼でも遠視眼でも眼鏡を掛けると其度が進むとか視力が弱くなるとかいふて不便を忍んで態と眼鏡を用ひない人があるが愚な心配である、眼科醫の診斷の上適當なる眼鏡の處方を得て之を裝用するのは最も必要で却て之に依りて視力を良くし度の進むを防ぐ効がある、然し眼鏡特に近視眼鏡は患者自身に店舗に就いて自分勝手に求めると多くは眞の度よりは強きものを選ぶの惧れがあるから、必ず醫の診定の處方に依らなければならぬ故に眼鏡の裝用は必要であると共に不適當な眼鏡に向つて非常に有害なる事も同時に警告して置かなければならぬ。

第五十八節　眼病者に對する禁忌事項

畢りに眼病患者の禁忌すべき事項に就て一言せん、醫師は常に患者を診察し之に投藥し又は切開、洗滌等を

爲すの他患者の身を憂ひ其疾病に對する種々なる注意を與ふるにも拘らず病者自身は間々醫者の言ばを耳を貸さず不養生に流るゝ事尠からず故に古人も養生無沙汰の人を取る事醫者の越度なりと請つて居る

偖眼病患者の心得べき禁忌事項であるが古く出版された周郁眼目傳といふ書物に委しく記載されて居る現今でも此事項に反する事はないと思ふから今之を左に列擧して見よう、

一淫犯　男女病中房事を慎む事
二盲酒　飲酒を禁ずる事
三湯遊　浴場に遊ばざる事　普通の湯と雖も高溫のもの及び永く浴するは害あり
四力業　力仕事
五音曲
六行道　風ある日の歩行など宜しからず
七遠見
八細工　緻密なる工事を禁ず

九讀書
十光見　光線の強き場所にて仕事する事
十一博奕
十二煙中　煙ある場所又空氣惡き所を禁ず
十三溫熱食物
十四思慮　病氣中種々なる事を思ひ考へる事
十五頭不灸鍼
其他早寢早起をなし精神を安靜にし不消化物を攝らず通利を良くし、手指を清潔に保つ事等最も肝要なり

第五十九節　喫煙と眼病

煙草の中毒の爲めには種々の症狀を來すが、殊に咽喉と眼結膜の加答兒を來し、遂に「ニコチン」弱視症を呈するに至るものである、殊に西洋煙草にありては此弊に陷ること多く、また吸口の無きものは、あるものよ

りも中毒に罹り易きものであるから、眼の弱き人は成るべく煙草を用ひざるがよろしく、若し用ひるにしても日本煙草を用ひ、且つ喫煙に際しては煙草の燃燒を出來得る丈け徐々ならしむるがよい。

第六十節　飲酒と眼病

原因は酒に因らざる他の眼病でも、既に眼病に罹つてから酒を飲用すれば、其治癒を妨害するばかりで無く益病勢を增惡せしむるものであるが、アルコール中毒の爲めに起る眼病を分てば、アルコール性弱視、眼筋障害、夜盲症、瞳孔障害、錯視、並びに幻視の六種類になる。

アルコール性弱視には急性と慢性とあつて急性は一時に多量の酒を飲用せし場合に突然に發するもので、殊に急性の際には一層甚だしく、其視力障害は非常に高度で、時としては全く失明に至ることがある。

慢性アルコール性弱視は酒の濫用久しきに亙れる結果として發生するもので、斯くの如き患者は多くは飲酒家たると同時に喫煙家である故に兩々相待つて害毒を逞うするものである。そして患者は視力衰へ、丁度霧の中にあるが如き感を覺え、其視力は十分の一或は其以下に至り、若し患者にして節酒を守らざれば、遂には

全く失明するに至るものである。

第六十一節　眼性悪しき人の心得

眼の性が悪くて困るが、どうしたら良くなるだらうとは、我々が毎度質問を受くる處である、併し素人の云ふ眼性の悪いと云ふ中には視力の弱つて居るのもあれば、また眼の病氣に罹り易いと云ふのもある。視力の弱いのは種々の眼病によつて來るが、どうも慢性のトラホームか、またはアルコール性弱視などが多いやうである。それから眼病に罹り易いもの、これもトラホームか何かゞ全治し切らないで、それで度々目星などが出るものが多いやうであるから、眼性悪いと思ふ人は、一應專門家の診察を受けて根本的治療を受くること、それから第五十八節に記載せる禁忌事項を守り、尙ほ毎朝洗面の際眼を閉ぢたまゝ眼の上に冷水を二三十回かけると、大に眼の健康を助くるものである

第六十二節　眼病と遺傳

眼病の中に遺傳するものは色素性網膜炎、即ち俗に云ふソコヒ、これは確かに遺傳するもので一家數人これに侵さるゝ例はいくらもある、それから角膜實質炎、これは眼病其ものが遺傳するのではないが、遺傳梅毒の一つの症候として來るものである。其他近視眼、遠視眼、亂視眼、斜視、白內障等も多少遺傳の傾きあるやうに稱せられて居る。

要するに眼病として遺傳するものは餘り澤山は無いやうであるが、眼の形狀、虹彩の色等はよく父母に似るものである。

第六十三節　眼を大きくする法

眼球の人並より小さいものを大きくすると云ふことは絕對に不可能である、けれども瞼裂の小さきもの、殊に外傷、火傷等の瘢痕の爲めに小さくなつたものなれば、外科的手術により、或場合には造眼術によりて確かに大きくすることが出來得るものである。

それから生理的に完全無缺の眼ではあるが何分人並より小さいから、これを少し大きく見せるやうにと云ふ

のは、醫學的には其方法はないが、化粧の仕方によつて大きくすることが出來るもので、彼の俳優等のする如く、白粉を附けるに、眼の上瞼の方を少し濃くすると宜しい。

第六十四節　眼病と房事

眼病は其種類を問はず、房事は非常に惡影響を及ぼすもので、眼病の禁忌事項中これは最も愼まねばならぬものである、眼の惡きときに細い文字の本を見たり、何か肩の凝るやうな仕事をするのは、直接に眼其ものに關係があるから害になると云ふことは誰人も氣が附く處であるが、房事に至つては直接眼に關係がありさうにも思はれぬから敢てする人も少くないが、これは實際豫想外に影響するもので、眼病者にして此禁を破れば唯に眼病の經過を長からしむるばかりで無く、益病勢を重くして、其だしきは其れが爲めに盲るべきものを盲しかぬることが無いとも限らぬ、されば古人も房室の戒を第一に置かれ、ひどく八釜しく云ふたものであるから、眼病者は決して此禁を犯してはならぬ。

第六十五節　眼の洗滌法

眼の洗ひ方は、一寸したものならば、大きな茶碗か何かに硼酸水を入れ、ガーゼの小さく疊んだのを中に入れ、硼酸水を浸してそれを箸に挾んで、眼を徐かに撫で廻しながら洗ふとよろしい。

また本式洗ふには、一人では出來ぬ、必ず洗ふ人を要するが、これに最も樂な方法は金盥の中に木の小さな竇（枕）を入れ、患者は病眼を下にして横に、其竇を枕にして臥し術者は「イルリガートル」に洗滌藥を入れ先づ眼を閉ぢたるまゝ眼の周圍を洗ひ、次に靜かに眼瞼を開き、內眦より外眦の方に水勢緩く、靜かに洗ひ流し、洗ひ終りたる後は、消毒したるガーゼにて、靜かに濕りを拭ひ取り、次で藥を點眼して少しく安臥させて置くのである。

第六十六節　眼の罨法

眼の罨法の仕方も他の部の罨法の仕方と殆ど變りがない、即ち小さく疊んだ（一寸四方位）ガーゼに藥液を

浸し輕く搾つて眼に當て、其上に油紙をあてゝ繃帶するか或はまた一寸五分四方ばかりに繃帶を切り三枚位重ねて、それに左右に絲を二本つけ右眼ならば右の耳に其絲が丁度屆く樣になして結び、左の方は少し長くして左の上下を通りて矢張左の耳で結び挾むやうにすると宜しい。そして藥が乾いた時にはまた其ガーゼ不潔になつたならば捨てゝ別のガーゼに藥液を浸して矢張初め通りにやるのである。

第六十七節　眼藥の點し方

目藥を點すには點眼瓶と點眼管とを以てするのが一番簡單である、點眼瓶には通例其栓の下部が管となり上部の方は漏斗狀をなして上に薄きゴムを張つてある、そこで點眼を行ふには上部の漏斗狀の處を拇指と中指とで少しく撮み上げ示指にてゴムを壓すと中の空氣は瓶の中に漏れて漏斗狀の中に多少の空虛が出來るから、其處で示指を離すと瓶中の藥液は上つて漏斗狀の處に入つて來る、そこで其れを持つた儘栓を拔き一方には病人を仰臥せしめて、看護人は左の示指を以て眼病の下眼瞼を押し、下て眼を開かしめ右手の點眼管のゴムを徐かに壓すと藥液は點眼管から出て眼の中に入るものであつて、大抵二三滴々下すると宜しい。滴下し終つたならば患者をして二三回瞬目せしめて暫く目を閉らして置くと淚が出て來るから、何か清潔な布片で拭ひ取つてから眼を開かせる。また點眼管に餘れる藥液は、ゴムを壓して瓶の中に戻し「サツク」に入れて摩芥のかゝらぬ處に仕舞つて置くが宜しい。

また輕い眼病であつたならば、患者自身で點眼することも出來る、即ち右手には右の通りにして點眼管を持ち、左手の示指と中指にて患者の上下眼瞼を開き、少し仰いて藥を前の如くに二三滴點眼するのである。

第六十八節　目藥の塗り方

塗り目藥と云へば大抵はワセリンかラノリンである、黃降汞ワセリンなどは實際よく用ひらる目藥である。さて此目藥の塗り方には點眼棒と云ふて硝子の細い棒がある、その棒の尖端に藥を少し塗け、患者の眼瞼を開いて、其棒を横たへ、スーと斜めに引き取る、すると目藥は眼瞼の中に入れ、それで目を閉ぢて、其上から輕く撫でゝと、よく眼一杯に目藥が行き渡るものである、或はまた點眼棒の藥の附いた處を眼にあてゝ、眼瞼を閉ぢ、輕く壓へて、點眼棒を取つても宜しい。

第八編　耳科

第一章　外聽道の疾患

第一節　外耳濕疹と其治療法

小兒はよく顏面に濕疹を發するものであるが、殊に慢性中耳炎、俗に云ふ耳だれよりして、先づ耳に濕疹を發し、それよりして顏面に及ぼすことはなか〳〵に多いものである。中耳炎より來るものなれば根本療法として先づそれを治さなければならぬ、それから濕疹の療法、これには左の藥を撒布するがよろしく、尙ほ詳しくは第四編中濕疹の條下を參照せられたし。

▲デルマトール	一、〇
澱粉	一〇、〇
亞鉛華	一〇、〇

右混和撒布料

第二節　耳のシモヤケと其治療法

◆症候　耳は常に外氣に曝露されて居るので、從つて寒氣に觸れ勝であり、また他の部よりも血管が少く、常に溫暖を缺くので、どうしても外の部分よりは凍傷にかゝり易い、殊に知覺が鈍麻なるを以て凍傷にかゝつても痛み少いから、強い凍傷に罹り易くなるもの故、嚴寒の地にありては注意を要するものである。

耳の凍傷は多くは耳翼の後上方に來り、初めは灼熱、搔痒の感あり、また紫赤色に腫脹し、重くなれば、壞疽に陷るのは他の部の凍傷と同樣である。

◆療法　初期には沃度丁幾或はカンフル丁幾を塗附するがよろしく、少し重いのには硝酸銀軟膏がよろしい、其他の療法に前に述べし、皮膚病中の凍傷の療法に準ずるがよい。

第三節　耳血腫と其治療法

◆症候　耳翼前部の凹陷部に突然何等自覺的症候なくして、急速に青色或は暗赤色の柔軟なる膨隆を生じ、甚だしきは耳翼の前面に亙ることがある。

◆療法　緊要甚だしきものは、注射器を以て內容を吸出して壓定繃帶を施すがよろしく、輕きものは濕布繃帶を施し、少し吸收されたるときは左の藥劑を一日二回塗布するがよい。

▲ヨードカリウム　〇、五　　ワセリン　五、〇

右塗布料

若しまた化膿せるときは速かに切開手術を受くるがよい。

第四節　ヤチ耳

我々の耳內には一種の分泌物、即ち丁寧なるものがあり、これは多くの場合には稍硬くなつて居る、即ち俗に云ふ耳アカと云ふのはこれであるが、中にはまた硬くなく、丁度軟膏の樣な風になつて居るのもある、これは俗にヤチ耳と云ふものであるが、單にそれ丈けであるならば別に病氣でもなく、從つて何等の障りも無いが

若しそれが餘り澤山に出るとか、または濕氣を帶るとか云ふやうな場合には速かに醫療を受けねばならぬ。

第五節　耳垢を除く簡便法（耵聹栓塞）

◆症候　耵聹栓塞は一名耳垢堆積と云ふて、其名の如く耳垢の多量に溜つたのであるが、大抵は格別の症狀を呈せぬも、其量餘りに多いとか、または水等が入つた爲めに膨脹すると耳內閉塞、異物の感、耳鳴等を起し、稀れには眩暈、神經病等を招き、癲癇發作、喘息發作等を起すことがある。

◆療法　膿厚なる過酸化水素液、或は重曹「グリスリン」「オレフ」「油等を默耳し置き、耳垢を軟化せしめて一兩日を經過したる後洗ひ出すがよい、よく素人のやる如く耳搔きを以て搔き出すのは危險であるから禁じなければならぬ。

第六節　耳翼の畸形

耳翼の畸形としては耳翼の全く無いものもあり、或は耳翼下部の小さきもの、無きもの、裂けたるもの、其他種々の畸形がある。一體耳翼は前方より來る音響を集めて外聽道に入るゝ作用を持つて居るものであるから耳翼に畸形ある人は多少聽力を妨げらるゝものである。

畸形の療法は殆んど無いと云ふても宜しいが、其形の醜きものは外科手術によつて多少これを矯正し得るものである。

第七節　耳翼軟骨膜炎と其治療法

◆原因　結核其他不明の原因によつて起る。

◆症候　頑固なる疼痛と共に、耳翼の表面に初め豚脂樣色の、後には青赤色を呈する腫脹を來し、局部の灼熱、疼痛等があり、滲出物は始めは漿液性であるが、後には多く膿性となり、治癒後も多くは醜形を殘すものである。

◆療法　初期に氷罨法を行ひ、多少化膿の傾きあらば切開せねばならぬ。また結核性のものは經過頗る緩慢なものであるが、これには左の藥劑を注入するがよい。

▲ヨードホルム　一、〇　グリスリン　一〇、〇
右混和注入料

第八節　外聽道炎と其治療法

◆原因　瘙痒の爲めに耳内を搔くとか、または剃刀を以て耳内を剃るとき等に起れる小創より黴菌の侵入によつて起る。

◆症候　限局性、汎發性の二種あるが、限局性のものは癤或は疔と同樣であつて、外聽道に發赤、疼痛を來し殊に夜間に甚しく口を十分開くことが出來なくなるが、切開するか或は自然に破開すれば大に樂になるが、再發することが間々ある。

汎發性のものは、外聽道全體の皮膚が發赤腫脹して疼痛あり、耳下淋巴腺も亦同時に腫脹し、多くは化膿して膿を洩すものである。

◆療法　限局性のものは、五十倍の醋酸蒸土水を以て濕布罨法を行ひ、或は氷嚢、水蛭を貼し、化膿せるものは切開を行ふ、或はまた五十倍石炭酸オレフ油を脱脂綿に浸して耳殼内を塡充して置くも宜しい。

汎發性のものも同樣の療法で宜しいが、切開しても効が無いから、硝酸銀塊を以て肉芽を腐蝕し、十倍過酸化水素液を以て、外聽道内を清潔になし、五十倍「メントール、オレフ油を脱脂綿に附けて耳殼に貼するが宜しい、そして何れの症にあつても、酒、煙草、香辛類等の刺戟物は禁物であつて、身體の安靜を守らなければならぬ。

第九節　耳に蟲の入りし時の手當

◆症候　耳には蚤、羽虫等の昆蟲の入ることがあるが、此等は騷ぎ廻るので甚だ煩るさいものである。

◆療法　昆蟲類の入つたのは煙草の煙を耳内に吹き入るゝと自然に出ることがあり、また羽蟲のやうなものであると、暗室にて耳の前に燈火を持つて行くと其光りに誘はれて出るものであるが、若しこれても出ないのであつたならば「コロヽホルム」を點入して殺し置き、そして靜かに洗ふと出るものである。

第十節　耳に豆等の入りし時の手當

◆症候　小兒はよくいたずらに豆などを耳の中に入れるものであるが、これは長く入れ置くと、浸潤の爲めに膨大して耳鳴、眩暈、難聽等を來すことがあり其他咳嗽、嘔吐、癲癇發作等をも稀れに起すことがある。

◆療法　「アルコール」を點入せしめて、少し經つと豆は縮少するものであるから此際に洗ひ出すとよろしい決して摘み出してはいけない。

第十一節　耳内に硬きものゝ入りし時の手當

◆症候　木片、鐵片、硝子球などもまた誤つて耳内に入れることがあるが、此等の小さなものは格別邪魔にならぬけれども、中には耳内に炎症を起したり、或は創傷などを拵へることもある。

◆療法　鐵片は磁石にて容易く吸ひ出すことが出來、其他の異物も洗滌すれば豫想外によく除去さるゝことあるものなるが、若しそれでも出ぬときは速かに醫治を受くるがよろしく、決して「ピンセント」などを以て挾

み出してはいけない、これは勞して効が無い許りで無く、往々創を拵へるの虞れがある。

第十二節　寄生性外聽道炎と其治療法

◆原因　「アスペルギルス」と云ふ黴菌の寄生によつて起るものである。

◆症候　耳内に堪へ難き痒痒ありて、それと同時に灼熱、耳鳴、聾聽等がある、また時としては痛みのあることもある。そして本症に罹つてから長くなつたのは、黑色或は褐色の物で外聽道を栓塞して居るものであるが、之を取り出して見ると、其先端は手袋のやうな袋になつて居り、其れを除いた後は糜爛て甚しきは出血するものである。

◆療法　先づ百倍の昇汞アルコールを一日數回點耳し置き、翌日に五十倍の硼酸水を以て靜かに耳を洗ふがよい、大低二三回これを繰り返せば全治するものである。

第十三節　外聽道眞珠腫と其治療法

◆原因と症候　本症は外聽道の上皮が丁度ハケの様に剝脱して、外聽道に堆積するものであるが、其爲めに起る障害は耳垢堆積のそれと殆ど同様である。

◆療法　耳垢堆積に於けるものと同様の療法でよろしいが、若し疼痛ある場合には專門家の施治を要するものである。

第十四節　皷膜の破れた時の手當

◆原因　耳掻き、楊子、鉛筆等を以て直接に皷膜を破ることもあるが、また指を耳の中に入れて急速に取り去るとか、手の掌で外耳を打つとか、撃劍中竹刀にて打たるゝとか、高處より水中に飛び込む際に破裂を來すことがあり、また中耳炎の經過中に皷膜穿孔を來すこともある。

◆症候　損傷せる時には痛みがあるが、間も無く痛みは去つて了ふ、出血は極めて僅かのものであるが、若しそれが外にまで流れ出る位の出血であつたならば、皷膜ばかりで無く他の場所にも損傷が起つたものと考へなければならぬ。聽力は始めは障害せらるゝが、大抵數日にして回復する、若しそれが何時まで經つても回復せ

ぬやうであつたならば、それは內耳の迷路震盪症が起つたのである。

◆療法　本症には刺戟を與へるのが大禁物であるから脫脂綿にて栓塞を行ひ、安靜を主として、總て刺戟性の飲食物を避け、また便通の正整を計り、若し便秘があらば下瀉を投じて通利を良くするがよい。かくして居れば大抵は自然に治癒するものであるが、若し何時までも癒らぬやうであつたならば、專門家の治療を受けねばならぬ。

第二章　中耳の疾患

第十五節　急性中耳炎と其治療法

◆原因　耳の病氣中最も多いものは中耳の疾患であるから、今此原因となるものに就て少し詳しく述べ、次で中耳炎の原因に說き及ぼさん。

中耳は皷膜の內部から內耳に至る迄の狹き部分であつて此部の空氣は歐氏管によつて咽喉に續ぎ嚥下作用の

際多少出入をなして外氣の氣壓と平均を保つものであるが、若しも何かの障害があつて歐氏管が塞がつて中耳内の氣壓に變調を來せば重聽を惹き起すことになる、さうして若しも之れが長く續けば遂に鼓膜に變化を起す或は中耳腔に液が溜るやうになつて容易に治り難き病氣になるのである。

歐氏管閉塞の原因には澤山あるが主として鼻腔、鼻咽腔或は喉頭等の病氣によつて間接に歐氏管を塞ぐのと歐氏管自己の病氣によつて塞がるものと、二たつあるが、中にも鼻咽喉腺增殖症（アデノイドヴエゲタチオン）と云ふて鼻と咽頭との間に扁桃腺と同類の腫物を生ずる病氣が原因となることが最も多い此の病氣は學齡兒童より十七八歲の青年に多い彼の齒列不正にして常に口を開き智識の發達惡しく學校にあつては常に下席にある者の過半は實に此の病氣に罹つて居るものである。

次に鼻の通じの惡きもの即ち鼻茸或は肥厚性鼻炎或は扁桃腺肥大なども屢〻原因となることがあるから若し此等の病氣があらば先づ手術を受くることは耳病の豫防には最も必要のことである。

中耳の病氣の中で更に恐るべく更に注意を要するものは歐氏管より中耳に黴菌が這入つて起す中耳炎と云ふ病氣である此病氣は鼻腔、鼻咽腔、咽腔などに加答兒ある時、或は流行性感冒、麻疹、膿窒扶斯、猩紅熱また

は其他の急性の熱病の時などに多く起るがまた乳兒に流乳を與す時、遊泳の際水中にもぐり誤つて水を飲みし時などに水と共に黴菌が入つて起ることもある。

◆症候　耳の深部に刺すが如き、衝くが如き疼痛が起つて來る、此痛みに多くは間歇性、休み〳〵起つて來るが、其時間は短かきは數分間、長きは數時間に至ることがある、そして咳嗽、噴嚏、身體動搖、感情の激動等には增劇し、また殊に夜間に劇しくなり、劇しき時は齒や頭また手にまでも其痛みが放散して來るものである熱は三十八九度、甚しきは四十度にも昇ることがあつて、小兒には嘔吐、痙攣等を伴ふこともあり、其他頭痛、耳鳴等も起り、眩暈を感ずることもある。

◆豫防法　此の恐るべき中耳炎を豫防するには先づ第一に鼻腔、咽腔等を强壯にして加答兒等を起さぬやうにしなければならぬ、それには全身の冷水摩擦なども必要であるが酒精飲料なども成るべく節し、また煙草の煙で以て鼻腔を燻突代りにするなども慎まねばならぬ。

熱病に罹つた時には常に含嗽をして口中を清潔にするが好い、また上鼻道に加答兒ある場合には鼻をかむには特に注意せねばならぬ鼻の兩翼を抑へて强くかめば、ともすると黴菌は分泌液と共に中耳に入ることがある

から鼻は開いた儘に靜かにカムと云ふことを忘れてはいけない。

素人は間々冷水を鼻腔に吸ひ込みて鼻腔を洗ふことがあるが之はまた耳の爲めには甚だ危險である、と云ふのは若しも斯樣の場合に不隨意的に水を飲み込むと歐氏管は開いて、水は中耳に入ることになる、水は粘液に比すれば歐氏管を通じて中耳には入ることは遙に容易なものである、それから游泳中または入浴中には決して水を含まざる樣注意せねばならぬ、總て黴菌は鼓膜が破れて居ない限りは外聽道より入ると云ふことは、殆んど無いと云ふても宜しいから以上述べた內部よりの侵入に注意が肝要である。

◆治療上の注意　若し既に急性中耳炎を起した時には決して手療治などをせずに、早速信用ずべき良醫の治療を受くることが必要である、何故かと云ふに急性中耳炎は危險なる合併症を起すことがあるが、初期に治療を受らなければ九分九厘までは全治するものである、ベツオルド氏の醫院では初期より氏の治療を受けたものゝ中に骨の手術を要する程重症になつたのは一%即ち僅か百人中一人よりしかなかつたと云ふことの例はよく之を證明して居る、然るに世の中には急性中耳炎の際耳の後部が腫れ痛み遂に乳嘴突起と云ふ骨の一部分を切開せねばならぬやうになるのは隨分其數が多い、また慢性となつて治りきらずに何時迄も耳漏が續つて遂には腦

膿瘍、腦膿瘍、靜脈竇炎など〻云ふ恐ろしく腦の病氣を起して一命を失ふに至るものまゝあるのは全く初期の治療に注意を拂はないからである。

第十六節　慢性中耳炎と其治療法

◆原因　急性中耳炎より移行するのもあれば、また鼻咽頭の慢性疾患に續發することもある、其他寒冒、濕潤なる土地の居住、不衛生的の職業、過度の喫煙或は飲酒に起ることもあり、或はまた腺病、結核、梅毒、慢性リウマチス、慢性腎臟炎等の經過中、身體の虛弱なるものに起ることもある。

◆症候　耳鳴は常にある鷹の症狀であつて、天候の不良なる時、飲酒せる時、心身過勞せる時、寒冒に罹りたる時等には強くこれを感じ、其他頭部壓重の感眩暈等があつて、甚だ不快に、聽力も亦障害せらるゝものである。

◆療法　鼻咽頭の疾患殊に腺樣增殖症にあつては、手術によつて之を除去すれば、本症もまた大に輕快するものである、其他歐氏管通氣法を行ひ、また耳鳴に對しては左の藥劑を歐氏管「カテーテル」によつて歐氏管に

一日一回づゝ注入す。

▲抱水クロラール　一、〇　蒸餾水　三〇、〇

右外用、一回二乃至三滴づゝ用ゆ

また鼻咽頭へは左の藥劑を一日一回づゝ塗布す。

▲ヨードカリウム　一、〇　ヨード　〇、七五

グリセリン　一〇、〇

右混和外用塗布

尚耳他に鼓膜按摩法を一日一回行ひ、また癒着あるものには「フイブロヂリン」溶液の皮下注射を行ふ等は其主なる治療法である。

第十七節　急性化膿性中耳炎と其治療法

◆原因　急性中耳炎の原因と略同樣であるが、殊に急性傳染病及び鼻咽腔の疾患、或は外傷後不適當なる治療の爲めに起ることが多く、唯化膿するだけが前者より異つた點である。

◆症候　痛みは急性中耳炎よりも一層劇烈で、熱は時として四十度以上に及ひ、時に顫寒、戰慄を伴ひ、稀には眩暈と共に人事不省に陷ることもある。そして聽力は著るしく減退して聾の如くなるものもあり、鼓膜破裂すれば黃色の膿は盛んに流れ出づるものである。

◆療法　本症の合併症としては間々腦膜炎、外硬腦膜膿瘍、腦膿瘍、橫靜血栓、耳性敗血膿毒症等を發して死に至ることがあつて、最も恐るべき疾患であるから、若し本症を來せる場合には何事を捨て置き、速かに專門家の治療を受けねばならぬ。

第十八節　小兒急性中耳炎と其治療法

◆原因　大人の急性中耳炎と同樣の原因によりて起るが、特に哺乳中咽せることや、咳嗽、吐乳等の爲めに本症を起すことがある。

◆症候　小兒は多くは不機嫌であつて、哺乳力も減じ、外耳に觸るゝときは甚だしく號泣し、體溫を伴ひ

下顎に振顫を起し、後頭部を絶えず枕に擦して磨滅し、不安の狀態となつて頻に泣くもので、若しまた化膿を來せば高熱、嘔吐、搐搦等を起すが、若し鼓膜自ら穿孔すれば、黄色の膿を洩らして、それと同時に此等の症狀は消散するものである。

◆療法　前同樣矢張專門家に一任するがよい。

第十九節　耳ダレと其治療法

◆原因　結核、梅毒等の直接中耳に發せる場合の外は、急性化膿性中耳炎の治癒、轉生其宜しきを得ざるより轉移するものである。

◆症候　其名の如く、常に耳内より膿汁のたれ出づる症であるが、本症は唯に聽力を損ふばかりで無く、頭蓋内に病毒が侵入すれば生命に危險を及ぼすもので、頗る恐るべきものである。

◆療法　療法は無論專門家の施治を要するものであるが、其大體を記せば、先づオキシフルを以て膿汁を清潔に拭去し、左の藥劑を鼓膜面に向けて吹き入れ撒布し、後ち消毒乾燥ガーゼを塡入して、繃帶を行ふがよい。

▲硼酸末　一〇、〇
デルマトール　一、〇
右混和撒布料

或はまた十倍過酸化水素液を塡入して耳浴を行ひ後ち清拭して前記の藥劑を吹入して脱脂綿にて栓塞するもよろしく、或は百倍重曹水、〇、七％殺菌食鹽水等を微温にして洗滌し、後前の如くして藥劑を吹入するもよろしいが、若し骨に異常を呈せる場合には根治手術を受けねばならぬ。

サルチル酸　一、〇

要するに耳漏は容易に治らぬものであるから病人の方で根氣負けして醫療を中止するものもあるが、膿の出る間は前に云つた樣な一命にかゝる恐ろしい頭蓋腔内の病氣を起す危險があるから、決して醫師の手を離れてはいけない、よしまた膿が出なくなつたにしても鼓膜の穿孔が殘つて居ると外聽道からして黴菌が水と共に入つて再發を起す虞れがあるから脱脂せぬ綿でもつて栓をして置くがよい殊に游泳、入浴等の際には强く栓をすると云ふ注意を怠たつてはいけない。

第二十節　小兒の耳ダレ

日本の小兒には非常に耳ダレが多いとはよく專門家の云ふ處である、それでは何故多いかと云ふに第一の原因は哺乳法の關係である、日本の小兒は多くは寢乳の習慣によつて養はれて居る、即ち小兒が母體の側臥せる傍に相向つて側臥して乳房を噛へつゝ鼻呼吸を爲して哺乳して居るから、若し其際に鼻の通氣に僅かの障害でも突然生ずるか、または乳汁の出方が多過ぎると小兒は能く咽せるが、其際前に述べた樣に鼻腔内の病原菌が容易に中耳内に入つて中耳炎を起すものである。だから此等も當然慎止しなければならぬ惡習慣の一つである、此等の事柄が原因を爲して歐洲よりも二倍程多い中耳炎患者を我國に有して居るから注意すべき事である

小兒の耳ダレあれば爲めに耳發育を害すること頗る大たるものであるから、此等も出來得る丈け早く治療を受け全治せしめねばならぬ。

第二十一節　化膿性中耳炎の續發病

急性及び慢性の化膿性中耳炎には、前に記せる如く、往々危險なる續發症を起すことあるが、この中最も多いものは急性及び慢性の乳嘴突起炎を起すもので、これにかゝると、耳後の骨の部分に發赤腫脹、疼痛を起し熱は益高くなり、遂には骨を崩潰して骨疽及び骨瘍を起し、或は骨膜下に膿瘍を形成することになる、慢性症はそれ程劇しくは無いが乳嘴突起部に疼痛がある位なるも、何れにしても手術を受けねば根治せねばならぬものである。

其他中耳骨瘍、骨疽、及び前に記せるが如き危險なる諸症を惹起するものである。

第二十二節　耳硬化症と其治療法

◆原因　遺傳の關係は確かにあるが、また梅毒、月經時、妊娠時等にも來るものである。

◆症候　男子よりも十五歲乃至三十歲の婦人に多いもので、初期には耳鳴りがあり、それが段々增長するに從つて聽力に障害を來し、眩暈等あつて、遂に一側より他側に及ぶものである

◆療法　左の內服藥に兼ねて、注射藥を注射し、其他通氣法、按摩法等を施すものである。

▲ヨードカリウム　一、〇
苦味丁幾　二、〇
右一日三回毎食後分服

▲フイブロリジン　一、〇
蒸餾水　一〇、〇
右一日一回一箇宛注射

臭素カリウム　三、〇
水　一〇〇、〇
グリスリン　一、〇

第二十三節　歐氏管狹窄症と其治療法

◆原因　鼻咽頭加答兒や、腺樣增殖症等ある爲めに、歐氏管の粘膜も共に加答兒性肥厚を呈して狹窄するものあり、また其附近に於ける骨性增殖や、突芽形成、腫瘍等の爲めに器械的に障害せられて狹窄するのもある。

◆症候　聽力が減じ、耳鳴りがして閉塞の感があり、また頭重、壓重、不快等の感がある。

◆療法　加答兒のものは鹽酸古加因液の鼻咽腔內撒布法を行ひ、兼ねて歐式管通氣法を施すがよろしく、また器質的のものにあつては「ブジー」擴張法を施すがよい。

第三章　內耳の疾患

第二十四節　急性內耳炎と其治療法

◆原因　熱性傳染病が原因となることがあり、或は化膿性中耳炎に續發することもあるが、また中には原因不明のものもある。

◆症候　多くは急に發熱し、顏が紅くなり、劇しい頭痛及び嘔吐を催し、暫時にして譫語を云ひ、或は人事不省に陷る、かくして四五日の後には此等の急性症狀無くなるも、大抵聾となり、運動失調を來すものである。

◆療法　乳嘴突起部に水蛭或は氷囊を貼て、または水銀軟膏を塗擦する等は應急療法である、其他は專門家の施治に待たねばならぬ。

第二十五節　メニール氏病と其治療法

◆原因　不明なるも、恐らく內耳に急に滲出物あるか或は出血を來す爲めに起るものならん。

◆症候　突然顏面蒼白となり冷汗を流し、知覺脫失を來すと同時に、兩側の聽力障害を起し、甚しきは全く聾ごなるのもある。そして眩暈、步行蹣跚等を發して患側に倒れんとすることがある。これが所謂類卒中病と名づくる所以であるが、此發作は數分または數日間持續せるのみにて止まることあるも、或はまた數日若しは數月を經て反復發作することもある。

◆療法　絕對的心身の安靜を守らしめ、枕を高くして仰臥せしめ左の藥劑を與ふ。

▲硼酸キニーネ　〇、五　乳糖　〇、五

右一日三回一包づゝ

右の藥を八日間與へたる後左の水藥を飲ます。

▲ヨードカリウム　〇、五　苦味丁幾　二、〇

水　一〇〇、〇

右一日三回毎食後分服

これも八日間續けたる後、左の藥劑を始めは隔日に、後は毎日、朝食前に注射して十二日以上續けるのは法則となつて居る。

▲鹽酸ピロカルビン　〇、一　蒸餾水　一〇、〇

右皮下注射用、一回一箇づゝ

第二十六節　梅毒性內耳炎と其治療法

◆原因　多くは遺傳梅毒に發するもので、然も遺傳梅毒の重要なる徵候である。

◆症候　本症は鼓膜には個等變化を認めざるも強き耳鳴、眩暈、高度の聽力障害を來すものである。

◆療法　驅梅療法に兼ねて「ピロカルビン」の皮下注射を行ふものである。

第二十七節　迷路震盪症と其治療法

◆原因　直接或は間接に耳を強く打擊せられたるとき、または大砲の如き强音を突然耳の近くで聞く時等に起るものである。

◆症候　耳鳴、聽力障害、頑固なる眩暈等が主なる症候である。

◆療法　身心の安靜を命じ、凡ての音響を避け、電氣療法或は耳硬化症の處に記せるヨードカリウムの處方を興ふるがよい。

第二十八節　耳病と聾啞

世の該に啞で聾で可憐想と云ふことがあるが、實際は聾のために言語を習ふことが出來ぬために啞となるので、啞の爲めに聾となるものではない。處で此聾啞は何の爲めに起るかと云ふに、先天性には父母の血族結婚が最大なる原因をなして居ると云ふことになつて居る、それからまた後天には何か耳疾があつて難聽を來せ

るものを充分なる檢査をせずに聾啞院に入れる爲め、言語を習ふ機會が無く、遂に眞に聾啞となるものが間々あると久保博士は云ふて居る。

聾啞を豫防するには血族結婚を避くること、難聽兒は充分に檢査して、前述ぶる如き失態なからしむるが宜しい。併し眞の聾啞に至りては、今日の學問にては如何とも致し難きもの故、若し不幸にして斯かる子弟を持てる人達は一日も早く聾啞學校に入れて、其途の教育を受けしむるが宜しく、さすれば餘り多くの不自由を感ぜずにどうか世渡りすることが出來るものである。

第二十九節　耳鳴りと其治療法

耳鳴りは殆ど總ての耳病に附きもの、即ち耳鳴はあらゆる耳病の一症候と云ふべきものである故、耳鳴を治するには、其原因たる耳疾を治するにあらざれば根治するものでないのは申すまでも無いことである。併し茲で云ふ耳鳴りはさういふので無くて唯何となく耳鳴りがする、勿論原因が無くして結果たる耳鳴のある筈は無いが、唯これぞと云ふ原因を認めないが、どうも耳が鳴つて困るなどはよく人の云ふことである、それで斯樣

の場合にはどうすれば宜しいかと云ふに、第一は便通を利すること、便通さへ宜くすれば大抵の耳鳴は癒るものであるが、若しそれでも癒らぬやうなのでしたならば、左の藥劑を頓服するがよい。

▲サブロミン錠　二個
右頓服

第四章　耳疾の養生法

第三十節　寒冒と耳の疾患

寒冒は萬病の基であるとはよく云ふことであるが誠によく云ふた言葉で、寒冒からして危險なる中耳炎や何かを惹き起すことが間々ある、寒冒が耳に及ぼす影響は直接と間接と二つある、直接の影響と云ふのは假へば非常に暖い室に汗を出し乍ら仕事をして居つたものが突然に寒い戸外に飛出して冷たい風に觸れたり、または呼吸を迫はしくしながら高い山に登つて絶頂の冷風に當つたりする等は破傷風炎や中耳炎の原因となり、また

は餘り寒いと耳翼が凍傷にかゝつて剝げる等もよくある例だ。次に間接の影響と云ふのは寒冒の爲めに鼻加答兒や氣管支加答兒等を起して其の加答兒が咽喉から中耳に通じて居る歐氏管と云ふ細い管に傳はつて耳に入るために中耳炎を起すこともある。

第三十一節　耳の病と小兒の智慧との關係

耳病は小兒の智識の發達には重大な影響を及ぼすものである、これに就て久保博士は曰く、耳は眼と並んで學校教育の重なる媒介機關であるから、聽器に異常があつて教師の云ふ所をよく理會せざる兒童は腦力發展の上に於て甚だしく健康兒に後るゝことは云ふ迄も無いことである、單に後るゝ許りで無く聽器に異常あるを發見せられずに止む時には、反つて適當なる教育を受けたる輩生にも劣ることがある、實に憐むべきの至りである、然るに是等聽器に異常ある兒童は教師の言語を理解し難きが爲めに、呆然たる狀態、不熟心、不注意、劣等兒等の形容詞の下に擯斥せられ、同情なき教師よりは痴鈍の嘲を受け、同輩よりは罵られ、家に歸りて涙を以て兩親に訴ふるも、兩親も亦聽器障害の爲めなるを知らず、單に其兒の低能たる不幸を嘆くのみである。か

ゝる不幸なる兒童が遂に落第を重ね、低能兒の級に投ぜらるや、聽器の發達に必要なる交際に遠ざかり、言語の不活潑なる社會に入りたる爲めに、言語發達の必要なる時機を空しく經過し、遂には聾唖學校に送られ、始めは其狀態の全く一變したるに驚きて心を痛ましむるも、後には同情ある教育に遭ひ始めて眞正の精神發達に入るのである。けれども此聽器障害を早期に發見せられ、直に恢復し得べき好時期に適當に處置せられざりしが爲めに、聾唖の群に投ぜらるゝを思ひなば、此兒童の不幸を憐れむと共に誰か學校の體格檢査中耳を忽になすべからざるを非難するものであるべきぞ。

學齡兒童中、耳疾に罹る者は極めて多い、何となれば後に耳科に述ぶる腺增殖症が多い爲めに（ケルネル）氏獸氏管の狹窄となり遂に慢性中耳「カタール」となるからである、であるから精密に學齡兒童の聽力檢査をなす時には難聽者の數極めて多きを知るのである。ベツオルド氏は、八米突以下にて囁語を解せざる者も難聽としたるに學齡兒童の二五、八％は難聽者に屬したと云ふことである、今近來の檢査にかゝる諸家の成績を擧ぐれば難聽兒の比例は左の通りである

四四、六四％　ベルン氏　三四、三％　ナドレツニ氏

二八、四％　オストマン氏　二七、％　ウキルペルト氏
二五、％　デンケル氏　二三、三％　ケーニツヒ氏
一〇、八％　ラウビ氏　六、一％　ボルヒマン氏
五、〇九％　フランケンベルゲル氏　四、％　ダーエ氏

そして此等難聽兒は治療を施せば治癒する者が多いベツオルド氏はミユンヘンの學齡兒童にて檢査したる諸果、耳疾患者の四一、七％は治癒し得べきものなるを發見して居ると。

第三十二節　水浴と耳の病

耳科專門醫の說によると、例年秋になると耳に故障ある靑年が多くなる、中には極めて危險なる中耳炎もあるで、これに就て種々研究した結果、海水浴中、耳の中に水の入るのが原因であると云ふことが分つたと云ふてゐる。然らば如何にして此危險を防ぐべきやと云ふに、第一は耳垢を溜めて置かぬこと、第二はよく人が脫脂綿を耳に詰めるが、脫脂綿は其名の如く、脂を脫いた綿であるからして、水の浸み込みが誠によい、それ

で脱脂綿を耳に詰めて水に入つては反つて水を耳内に呼び入れる媒介となるのであるから、心ず普通の綿を詰めるやうにして欲しい、さうすれば大抵は水をハヂいて耳内に水の入るやうなことは減多にない。それから耳に病氣のある人、殊に耳ダレのある人は成るべく水に入らぬやうにするがよろしく、また若し誤つて水が耳の中に入つたならば、紙撚の先をサバ〳〵さしたので吸ひ取るか、または少し微温にした淡水を注し込み、其耳を下にし、下から頭を叩くと、よく水は流出するものである、鹽水では濃度が強いので出悪いから、少し淡水を入れると、案外樂に取れるものである。

第三十三節　耳の病と遺傳

耳の病氣の殆んど三分の一は遺傳なりと唱ふる學者がある、其眞疑は分らぬが兎に角遺傳として來る耳の疾患には割合に重症なものが多く、殊に慢性内耳炎の如きは、先天梅毒の一症として有力なるものであり、耳硬化症の如きもまた多くは遺傳より起るものである、此等の中梅毒性内耳炎の如きは、其父母が充分に驅梅療法を行へば確かに豫防することの出來るものである。

第三十四節　補聽器

俗に云ふ耳の遠い人には、補聽器を用ひると、いくらかよく聞える、場合によりては殆ど健康者と同樣に聽えることさへある、この器械には種々の種類があるが、兎に角音響を集めて、耳内に充分入らしむるやうにしたものであるから、耳の遠い人はこれを用ひたならば大に便宜であらう、尤も其種類の選定に就ては、其耳に適するやう一應專門家の指揮を仰ぐがよい。また手掌を屈して耳の後方に當て、丁度大なる耳翼のやうにするのも、また多少補聽器の作用を爲すものである。

第三十五節　耳の衛生法と耳病の豫防法

耳殼は平素清潔を保たなければならぬ之れには石鹸にて洗ふが一番である、此處は一體黴菌の最も附着し易い處であるので急性中耳炎などの場合に若しも外聽道より黴菌が侵入すれば慢性に變ずるものであるから清潔が肝要である、尤も耳殼を洗ふには水の外聽道に入らぬやうによく〳〵注意せねば反つて害になるから細心注

意を要する。

外聽道の內部には健康者では特別の手當は入らぬ、素人自躬に手を着けるのは反つて危險であるから先づ自分で餘りいぢらぬ方が好い、耳垂の分泌は生理的には少量であつて自然の妙理によつて外部に排除せられ外聽道の入口部に出て來るのであるから之れは指頭に濡れた手拭を捲いて拭き取れば好いが能く素人の用ひる耳匙などを用ひては反つて深部に追ひやるの虞れがあるから注意を要する、また病的にて多量に耳垂が溜まつて、耳垂栓を作る時は耳鳴りまたは重症などを起すが此の時は其治療を醫師に依頼するが安全の道である、若しも之れを爲さずして無理に耳匙などで掻き出さんとすると、外聽道を傷け或は鼓膜を破つたりして重症を惹き起すことがある、また不幸なる場合には丹毒を起して一命を失ふやうなことさへあるから之れも注意せねばならぬ。

耳內の痒き時又は痛みを感ずる時などには素人が手療治にスポイトで洗つたり或は何か油を注入することもあるが此等に反つて外聽道炎を起したり或は油に黴が生えて一種の病氣を起したりすることがある、殊に鼓膜に穿孔ある時は其危險の度は一層重大になるから決して手療治などをやつてはいけない、また外聽道に種々の

異物が入ることがある此場合には手療治をやつて鼓膜を痛めたり或は異物に附着せる黴菌の爲めに重症を起し甚だしきは一命にかゝれる例はよく見聞きする處であるから、若し誤つて異物を入れた時には少しもイヂらずに其道醫師の許へ行くのが安全の方法である。

耳病の原因は種々あるが其中三分の一は遺傳性のもので又外傷や生活の狀態假へば砲兵や鐵道の運轉手の如き者、有鉛白粉や煙草、酒等の中毒または傳染病から起るものであるが、其最も多いのは寒冒から起るものであるから耳の養生を爲すには寒冒を惹かぬ樣心かけることが肝要である。

鼻汁の拭ひ方の悪いのもまた耳病の原因になる、殊に日本一流の拭ひ方は最も危險である、即ち紙を兩鼻腔の前に充てゝ一氣に呼氣を營ましむる方法であるが、此際鼻に紙を充て樣が餘りに强過ぎるか、または鼻腔が狹窄または閉鎖されたる場合に呼氣は鼻腔に出ることが出來ないので却つて歐氏管に通じて中耳內に入ることになる、此際に若し歐氏管の入口に病原菌が存在せる場合に於ては其病原菌は直に中耳內に入つて中耳炎を起すものである。通常日本人が鼻をカムと耳がピーとかチューとか云ふのは前に述べた歐氏管を開いて、中耳內に空氣の入る音を感ずるのである。此危險な出來事は小兒に於ては歐氏管が大人のよりも太くして短いから、

殊に容易に起り易い、だから鼻をかむには兩方を一所にかんではならぬ、必ず一側づゝかむを要する、卽ち西洋人等のやる如く右の方の鼻をかむ時には其側の方に紙なり布巾なりを充てゝ左の方を輕く押へて徐々に强き力を用ゐずにする、左の方をかむには其反對にすると大抵は此危險を豫防することが出來る、其れから若しまた大變に鼻汁が出て兩方の鼻腔が塞つて困る場合には穩いやうだが鼻汁を吸り込んで口から出す樣にすれば耳の方は安心である。

次にまた咳嗽をする時に口の中にある黴菌が耳に入つて耳病を起すこともあるから、肺病患者等はよく注意せねばならぬ。

內耳疾患の豫防はなか〳〵六づかしいが今素人の心得置いて宜しい二三の豫防法を擧ぐると、先づ鍛冶職のやうな絕えず强烈なる聲きを耳にするものは聽神經の麻痺を起すことがあるから若しも少しにても聽力の減退を覺えるやうであつたら早速其職業を轉ずるが好い、また常に有毒瓦斯を呼吸する職業にある者は職業病として聽神經を犯さるゝことがある、又「ヒニン」撒里矢爾酸の如き藥品の內服によつて耳鳴、重聽等の症狀を呈することがあるから、若しも斯樣のことあらば早速其服用を中止せねばならぬ。

第三十六節　耳に藥をさし込む注意

點耳液は矢張點眼瓶のやうなのに入れたものは調法である、其注し方は矢張眼藥の注し方のやうにするのであるが、唯注したでは耳の中にまで入らぬもの故、此場合には、患耳を上にして少し頭を傾け、耳翼の上方を取りて後上方に引く、耳の穴は眞直になるから、其處で一二滴藥をさし、次で頭を健側に十分に傾けると、藥は萬遺なく耳の中に行き渡るものである、尤も點耳藥の多くは油藥であるから、單に口の小さい瓶よりして一二滴入るゝもよろしく、また綿棒に綿を卷き、綿に藥をつけ、矢張耳翼を後上方に牽き上げ、綿棒を入れて靜かにクル〳〵と廻して藥がよくついた處で、拔き取つても宜しい。そして其後には大抵は脂綿を詰めて栓塞して置くのである。

第三十七節　耳に藥を吹き込む注意

耳に吹き込む藥は散藥である、これは一種特殊の瓶、卽ち一方にはゴム球をつけ、一方は延びて管狀になつたものゝ中に散藥を入れ、管狀の方を耳內に挿込み、矢張耳翼を後上方に牽き上げつゝ、ゴム球を壓へると、

空氣の壓力によつて、中の散藥は耳の中に吹き入れらるゝものである。

若しまた此瓶がなかつたならば、筆の軸か、葦を斜めに切つて、其處に粉藥を載せて、フツと耳の中に吹き込むと宜しい。勿論此等は患者自身でするでなく、介補者の手を假りねばならぬのである。

第三十八節　耳の洗滌法

用器は主もに「スポイト」を用ひる、先づ患者を椅子に寄らせ、洗滌んとする耳の下、肩の上より西洋手拭にて繞ひ、小形の膿茶を患者に持たせて耳の直下にあて、藥液を滴したる「スポイト」を右の手に取り、嘴管を上に向けて空氣を排除し、左の手にて耳輪の上部を後上方に引き、靜かに水線を上壁に向けて洗ひ再三洗ひたる後、金屬性の細い棒に脱脂綿を卷きて耳内の水氣を滯拭ひ取り、其上で何か藥を附けるならば前節のやうにして附け、藥物をつけた後は、綿球で栓をして置くのである。洗滌液は硼酸水、石鹸水等其他種々あるが、溫度は何れも微溫にして用ひるのであり、また洗ふには深く意を注いで靜かにしなければならぬ、若し急に藥液をジユツト入れると爲めに眩暈を來すことがあるから、此靜かにと云ふ注意を忘れてはならぬ。

第九編　鼻科

第一章　鼻の疾患

第一節　急性鼻加答兒と其治療法

◆原因　これは俗に鼻寒冒と云ふもので、寒冒や、不潔な空氣吸入等の爲めに起る鼻粘膜の加答兒である。

◆症候　始めは幾度も噴嚏が出、そして水のやうな鼻汁が出る、追々には鼻汁が濃くなり、また同時に喉頭、其他も侵さるゝため咳嗽が出たり、頭痛がしたり、涙が出たりするものである。

◆療法　鼻加答兒の輕いのなら、室内を暖かにして一日も引き込んで居れば癒るが、稍々重いのなら、吸入器にて蒸氣を鼻腔から吸ひ、またかねて安知必林〇、五を頓服して床中に安臥すれば、一兩日の中には大抵は癒るものである、尙ほ其後の鼻腔のグヅグヅは淡き微溫の食鹽水を吸入すると宜しい。

第二節　慢性鼻加答兒と其治療法

◆原因　急性より引續くものが多く、殊に腺病性の者或は貧血性の人が、急性鼻加答兒のときに適當よろしきを得ざるときは本症に轉じ勝のものである。

◆症候　第一の症候は鼻づまりで、それが絶えず塞つて居るのもあれば、時々開いて時々塞るのもあり、また大抵は晝間は格別のことは無いが、夜分になると著しく塞るのもある、そして嗅覺が無くなり、長くすると神經衰弱を起し、或は不眠症に陥るものである、また分泌物は濃くなりて、眩暈もあり、頭痛を伴ふこともある。

◆療法　冷水摩擦の實行、湯治等は殊によろしき療法である、尚ほ力めて滋養に富む食物を與へ、貧血あらば鐵劑を與へ、局部にはアドレナリン溶液の塗布、または左の藥劑の噴霧法を行ふがよい。

▲重炭酸曹達　五、〇
グリスリン　二〇、〇
硼砂　五、〇
蒸餾水　二五〇、〇

右混和、一日二三回噴霧

第三節　肥厚性鼻炎と其治療法

◆原因　虚弱なるものが急性鼻加答兒にかゝり在再治せざるときは本症に罹ることあり、また常に塵埃の中に仕事するものや、不良の住居、不良の氣候等も亦原因となるものである。

◆症候　鼻粘膜は腫脹增大して、鼻呼吸を營むことが困難となり、延ひて鼻塞となり、頭重、頭痛、眩暈、倦怠、不眠、記憶力減退、神經衰弱等の諸症を惹起し、または喘息を來すものもある。

◆療法　輕症のものは、左の藥劑を一日一二回塗附するがよい。

▲鹽酸コカイン　〇、三
プロタルゴール　〇、三
千倍アドレナリン　〇、三
蒸餾水　一〇、〇
右塗附料

重きものは、專門家の切除手術を受くるがよろしく、體質虚弱なるものは衛生的生活によつて體質を改善な

らしむるがよい。

第四節　單純削瘦性鼻炎と其治療法

◆原因　前節と同じ。

◆症候　前節の肥厚性とは反對に、鼻粘膜が萎縮削瘦して、鼻腔は擴大し、分泌物は少量にて多くは皮のやうになりて凝結する、そして頭痛、頭重、鼻內乾燥、嗅覺の障碍等を來すものである。

◆療法　原因を去り、五十倍重曹水を以て鼻內を洗滌し、兼ねて、五十倍「メントール、オレーフ油」を塗附するがよい。

第五節　有臭削瘦性鼻炎と其治療法

◆原因　原因不明なるも、多く妙齡の婦人を侵し、頑固にして容易に治せざるものである。

◆症候　前節のものよりも削瘦の度甚だしく、骨質までも萎縮するものが、其特有なるは分泌物の惡臭鼻を衝

くものので、爲めに一名臭鼻と稱せらるゝものである。

◆症候　百倍食鹽水、二十倍過酸化水素水、五十倍重曹水等にて鼻腔洗滌を行ひ、五十倍「メントール、オレーフ油」または左の藥劑を塗布するがよい。

▲五十倍デシンフエクトール水　一〇、〇

右鼻粘膜膿瘍的塗布

第六節　實扶垤里性鼻炎と其治療法

◆原因　リヨフレル氏の實扶垤里桿菌によつて起るものである。

◆症候　鼻に特發することあるも、また咽喉實扶垤里に續發することもある、本症に罹れば鼻粘膜は汚穢灰白色の膿膜と膿樣物とを以て閉塞せられ、また極めて出髮し易く、全身症としては、惡寒、發熱、頭痛等がある

◆療法　鼻腔分泌物は傳染力を有するを以て、健康者と隔離すべく、そして速かに實扶垤里血清の注射を受け局部は三プロセント、プロタルゴー水を塗附するがよい。

第七節　鼻の梅毒と其治療法

◆症候　梅毒の第二期、或は第三期の症候として發することが多い、即ち第二期には特有なる發疹、または扁平「コンヂローム」を來し、第三期にはゴム腫を發し、遂に鼻中隔は破潰せられて鞍鼻となり、フガ〳〵の鼻聲を發し、黄色脂樣の底面を有する潰瘍を造り、頗る醜形を呈するに至るものである

◆療法　注射の如く梅毒療法（第五編花柳病參照）を行ひ、局部には三%プロタルゴール水を塗附するがよい。

第八節　鼻の結核と其治療法

◆症候　本症には二樣の狀態を呈す、即ち鼻中隔前端の蔽骨部に顆粒狀若しくは乳嘴狀の結節を生ずるものと中隔蔽骨部または下甲介前端、鼻底等に潰瘍を呈するものとあるが、何れも患者は單に寒冒に侵されたるが如き自覺症を有するに過ぎざるも、腫瘍增大すれば鼻閉塞に來る症候を呈し、また潰瘍よりは膿樣の血液を混ぜる分泌物を漏すものである。

◆症候　全身營養療法を行ひ、かねて電氣燒灼、または手術的切除を行ふがよろしく、時にはまた濃厚なる乳酸の塗布もよろしい。

第九節　鼻茸と其治療法

◆原因　本症は遺傳に來ることあるも、多くは鼻內の炎症、または副鼻腔粘膿症が原因となつて發するものである

◆症候　俗にハナダケと稱するもので、帶白灰白色の恰も魚の腐腸の如き柔軟なる腫瘍の鼻內に發生するもので、其大きさは小は帽針頭大より、大は手拳大に至り、其數も一個より數個或は數十個に達することがある。

本症の爲めに起る障害は其大きさに關係するもので、鼻呼吸の障碍、頭痛、神經衰弱、鼻性癲癇、鼻性喘息等を發するに至るものである。

第十節　鼻の皮膚病と其治療法

鼻に來る皮膚病は、濕疹、ニキビ、殊に酒渣鼻であるが、此等の療法は既に第四編皮膚病の處に詳しく記載してあるから、玆には略する。

◆猫瘡　は必ず鼻毛の根の處に來るもので、矢張濕疹の一種と見做すべきものである、療法は、毛を拔いたる後、左の藥劑を塗布するがよろしい。

▲オイチオール　〇、五　亞鉛華　五、〇
單軟膏　五、〇
右塗布料

また鼻腔内に發せる濕疹もこの塗附藥を用ひるがよい。

第十一節　鼻腔のデキ物

鼻腔内には、また稀れに纖維腫、乳嚢腫、嚢腫、腺腫、血管腫、軟骨腫、骨腫等を發生することがあり、鼻腔閉塞の症狀を呈するに至るものであるが、此等は何れも專門家の施治を要するものである。

第十二節　鼻の惡性腫瘍

鼻腔に生ずる惡性腫瘍としては肉腫、これは主として少壯の者を侵し、急に增大するものである。それから癌腫、これは四十歳以上の人を侵すものであつて、何れも甚だ恐るべき惡性腫瘍であつて、其人を倒すにあらざれば止まぬものであるのは、何れの部に發するものも皆同樣であるから、斯樣のものは、其小なる間に充分なる切除手術を受けねばならぬ。

第十三節　鼻内の異物

◆症候　異物は多くは小兒が惧れに入るゝものが多く其種類は豆、紙片、小石、果實、硝子球等種々あり、また外傷性異物としては銃丸、小刀片などを見ることもあり、其爲めに受くる障害は、異物の種類と大小とによつて一樣ならぬも、兎に角刺戟症狀と、鼻ヅマリの症狀を發するものである

◆療法　ピンセットを以て挾み出すのは簡物である、消息子の類を鈎狀に曲げたるものを異物の後に挿入して

牽き出すがよろしく、小なるものは、片側の鼻腔を塞ぎつゝ、異物のある方で、强く噴出さするもよろしい。

第十四節　鼻石

◆症候　鼻石は、極めて小さき異物が核となり、其周圍に鹽類の沈着堆積するによつて生ずるものには、其障害は矢張其大小に準ずるものである。

◆療法　矢張異物同樣にして引き出すがよろしい。

第十五節　衂血と其治療法

◆原因　外傷、新生物、炎症、月經不調、熱性病、血友病等に來るものである。

◆症候　極めて少量の鼻出血もあるが、また中に大出血を來して急性腦貧血を來すものもある。それから代償性出血と云ふて、無月經の人が月經の代りに鼻出血するのもある、肥滿質にて俗に云ふ上せ生の人にはよく出血する人もあるが、後者の場合には腦溢血の豫防の一つとなるものである。

◆療法　輕いのは、唯前鼻孔に綿か何かで栓をするかまたは食鹽水、十倍單寧酸水を鼻腔內に注入するか、或はアドレナリンを細長のガーゼに浸して栓塞すれば止血するものである。

若しまた强く出血するものにあつては、前鼻孔に栓をしたゞけでは、血液の流れ來る勢ひの爲めに取れて役に立たぬから、斯樣のものは「タンポン」を前後の鼻孔に栓塞するがよい、後方より栓塞するには、「ベロツク」小管を用ひて栓塞するのであるが、これは醫者でなければ出來ぬものである。

第十六節　鼻タラシに就て

長く歐米の地にある人が歸朝すれば、日本の小兒に鼻タラシの多いのが一番目立つて見えるとは、何人も云ふ處であるが、これは彼我衛生思想の相違を證明する一の證據である、一體鼻腔內には多少の分泌物があつて常に濕潤を保つて居るが、決して外部に漏れ出づる程多いものではない、所謂鼻タラシになるものではない、鼻のタレルのは多くは鼻に故障のある證據で、多くは慢性鼻加兒答の爲めである、勿論普通の鼻タラシは輕症ではあるが、若し其小兒にして虛弱であるか、または熱性病に罹ると、其れが爲め甚だしき害を將來するも

のであるから、鼻タラシは健康の證であるなど云ふ間違つた考へは支配せられずに、相當の醫治を受くるがよい。

第十七節　鼻中隔彎曲症と其治療法

◆原因　本症の原因に就ては種々の説があるが、何れも臆説であつて、眞の原因は不明である。

◆症候　健康なる鼻、即ち生理的の鼻腔にあつても、鼻中隔は必ずしも中央に眞直にあると云ふわけではなく多少は皆曲つて居るものであるが、それが甚だしく曲つて、其れが爲めに多少の障害を來せば、既に生理的の範圍を脱して病的となつたものである。

鼻の障子が曲ると其れが爲めに受くる障害は、矢張鼻ツマリの症候であつて、頭重・頭痛、記憶力減退を來す、また甚だしき彎曲にあつては鼻梁までも曲つて居るものがある。

◆療法　專門家に就て、粘膜下窓狀切除術を受くるがよい。

第十八節　隆鼻術

隆鼻術とは、外形上鼻の形だけは存して居るが、唯低くなつて居るから之を高くすると云ふのが目的である尤も生來の醜い鼻の方は鼻の柱があるが鞍鼻の方は柱の爲めに柱が倒れて居るから治療法にも自ら難易がある。

◆パラビン注射　これは隆鼻術として有名なもので盛んに應用せられて居るが、從來の方法は不完全であつたので、數年前より現今の方法即ちパラビンを硬い儘で注射することになつて居る、此方法は極めて簡單なものであつて、注射器の中にパラビンを仕込んで置いて之を鼻の上に刺す、これは他の注射と同じことで左のみ痛いものではない、注射針を皮下に刺して置いて、元の方を捻ると內部の仕掛で尖からパラビンが出る、丁度素麵の絲に樣にうね〳〵と出て來て皮下に溜る、そこで注射器を深く入れたり淺く出したりして各部分にパルビンを入れ乍ら外の指を以て中に入れたパラビンをつまんで丁度適當な鼻の形にするのである、誠に簡單なもので中に入つたパラビンは異物として皮下に留り何等の害を爲さずに、また溶けることもない、これは一番安全

な方法である。此法は我千葉博士によつて完全となつた。

◆軟骨移植術　併し柱の丸きり無くなつたのはたゞこれだけでは不完全のことがある、此場合にはどうするかと云ふに、元來鼻の柱が取れて居るばかりであるから、他から柱を持つて來て建てゝ置けば良いと云ふわけで鼻の柱と同樣の他部の軟骨を移し植ゑることにするのである、これに最も都合の良いのは肋軟骨であるから胸を開いて肋骨を露出し其軟骨部から鑿と槌とを以て一小片を削り取り、早速之れを鼻の中に移し植ゑるのである。一寸考へると思ひも寄らぬことの樣ではあるがこれで成功した例はいくらもある、尤も木を接いでも接がないことがある位ですから、況して人間の身體のこと故時としては接かぬこともあるけれども先づ大抵は立派に出來る、殊に年の若い程手術後の經過が良い、住を入れゝばもう立派な鼻で、柱次第で高くも低くもすることが出來るのである。

第十九節　隆鼻器は果して效あるか

坊間發賣のものに隆鼻器と稱するものがある、此效能の有無に就ても、屢〻質問を受けたことがあるが、予は常に此等の人に答へて鼻の低いのを高くすると云ふことは、さう簡粉細工の樣に容易く出來るものではない生理的普通の鼻であるが、唯普通よりも少し低いとか云ふものは、何か器械で摘み上げたからとて決して高くなるものではない、否或場合には其れが爲めに炎症を起して、双つて種々の害を及ぼすものである。これは醫師はパラフヰン注射をして高くするが、これとても餘程熟練した醫師でなければ出來ぬものである。また鞍鼻にあつては更に一層其整形に困難なるは、前節に記載した處を見れば分るのである、されば此理が分れば、鼻を挾む隆鼻器の効否は自ら分るわけであると云ふて居る。

第二十節　鼻の整形手術

前の隆鼻術も一種の整形手術であるが、其他の整形手術として左の通りある。

鼻翼の一部缺損せるものゝ療法　これには種々あるが通常行はるゝは左の二法である。

◆造鼻術　は伊太利から始まつた方法であつて額から皮膚の葉片を切つて來て、それを鼻に繕ひ附けるのであるが、これは後で漸次に萎縮して鼻の形が悪くなるばかりで無く、額の眞中に醜い傷痕が出來るので餘り感心

した方法ではありません。

◆耳殼移植術　これは最も宜しき方法である、一體鼻翼は軟骨の上に皮膚が附いて居るのであるから、これと同じ構造の物がよいのであるが、耳殼も矢張内部に軟骨があつて、其形と云ひ、全組織の厚さと云ひ鼻翼に甚だよく似て居るから、これを移植するのは誠に當を得たやり方である、そしてこれを切り取るには、耳殼の緣の方から二回鋏を入れて、丁度楔形に切り取つて來て、それを鼻翼に縫ひ附けて鼻の形を作るのであるが、此方法によるものは後になつても萎縮して了ふやうな患は無く、附けた時の形を存して居つて、巧みにやつたのは一見普通の鼻と少しも異つた點は無い程に見ゆるものである。それにまた此方法でやつたのは切り取られた方、即ち耳にも大した迷惑を來たすことはない、何故かと云へば、丁度楔形に截り取つたのであるから其切られた兩邊を縫つて置けばよいので、かうすれば耳の形は左程變らずに、唯少し小さく成るばかりである、それにまた鼻は横の方に附いて居るものであるから前に見ても後から見ても少し小さい位のことは氣が附かずに濟むものである。

鼻翼の全部缺損せるもの〻療法。

◆耳殼移植術　これは最も適當であるが、何分鼻が全く無くなつたのであるから、うまく行くのはなか〳〵困難である。

◆纖細工の鼻をつけること　纖製標形の實物に少しも違はぬのは、先年の博覽會に於ける衞生部出品を見た人は知つて居られるだらうが、鼻の標形も矢張立派に出來て、男女考幼に從つて鼻の色や大小高低の適當のものを得られるので、色合の如きは表面に繪具で畫くのでは無く內部からほんのりと色を浮ばしめるのであるから全く自然に近いものが出來る、さて此鼻をどう云ふ風に附けるかと云ふに、鼻の落ちて居る人は、丁度耳部に三角の大きな穴が殘つて居るから、此穴の三方に此標型を引かける樣に、標型の裏には三方にばね仕掛金具がついて居つて鼻の穴に固定せしむるやうに出來て居る、纖細工のことであるからしつくりと皮膚に附着して少し位身體を動かしてもそれが爲めにぐらつくやうなことは無い、併し何を云つても人工のことであるから、白晝人前に出ては直ぐに纖細工と云ふことが分かる、それで之を補ふに白粉其他の化粧料で纖細工から皮膚へかけて自然に見えるやうにほんのりとぼかすので、かうすれば大丈夫である、また纖細工ならば懸け外しが自由であるから、外出の時其他必要の時だけ用ひて、自宅に居た時には外して常の儘で居ることが出來る、唯化粧

が少し他人よりは面倒なだけである。

第二十一節　無嗅症

無嗅症とは物の香臭を辨別せざるもので、何れの體病にせよ重くなれば、大抵は無嗅少くとも嗅覺減少を來すものであるから、これを治するには無論其原因病を治さねば癒らぬは申すまでも無いことである。併しまた中には鼻には何等認むべき異常無くして唯嗅覺にのみ異常を來す場合がある、これは神經衰弱、ヒステリー其他の神經症に起るものである。兎に角無嗅症は獨立の疾病として來ることは無く、多くは他の疾病の一症候として來るものであるから、よく其原因病を探り、それを治すれば本症も亦立所に治するものである。

嗅覺は吾人の生活上最も大切のものであるから、鼻と嗅覺との關係に就て專門家寺田醫學士の意見を紹介して貰きませう。

「鼻は五官の中でも最も重要な機關であることを知らない者が多いから、誰にも了解の行く樣にお話して見よう、鼻の粘膜にある神經は嗅覺と知覺とそれから味覺神經の作用を兼ねて居る、口の味覺神經は鹹甘、酸、苦

味を知覺するに止まり其他は嗅覺神經で判別する事が多い、殊に鼻は食物の腐敗を判別し衣服の汚れをも視神經以上に知覺し、室内の不潔等も目よりも眞先に知る場合が少くない、猶一つ嗅覺が衛生上極めて必要な事は之に依つて消化に必要な唾液、胃液、膵液の分泌を促し食慾昂進の媒介を爲す、例へば牛肉屋、天麩羅屋、蒲鉾屋の店頭を過ぎる場合に俄に空腹を感じさせるのは視覺よりも聽覺よりも嗅覺神經の刺戟である、鼻で香の知れぬ原因は腦の病や神經の病に依る事が多い、しかし鼻の神經は末梢神經が器械的の障害を受けたのであるから存外に治療し易い、例へば鼻腔粘膜の肥大、腫物の發生等であるが普通醫學上で云ふ腫物は新生物を意味し就中最も恐るべきは癌腫、肉腫、纖維腫、粘液腫、血管腫等である兎に角末梢神經が器械的に故障を蒙る時は嗅覺の作用はパツタリ不能に陥して了ふ。人間の身體の中何が大切で何にが不用だと云ふ所はないが鼻の醫者は鼻を必要だと特に云ひ立て耳の醫師は耳を第一番に大事にしろと云ふ、多少我田引水の氣味を免れないのは猶ほ教育家が教育を大切だと說き軍人が身一人で國を背負つて居る樣に考へるもの同樣であらう、故に耳は知識の門であるといはれ口は命の關所と稱され眼は何だとか手は何だとか理窟を附けられるが結局は何れ一つなくて良いといふ者はないのであ

る、然るに嗅覺の事は一般世人が餘り大事に思はぬ樣に見えるのは鳥渡不思議であると思ふ、普通學程度の學校に嗅覺の課程があるかなどゝ云ふのは事が餘り仰山かも知れぬが親が小兒の盲目を苦にし聾を心配するに引換へて嗅覺脫失を氣にかけぬは實に妙な話ではあるまいか、或は差當つて生活に不自生がないからとでも思ふかは知らぬが之れは大いなる間違ひである、前にも述べ如く蒲鉾屋の前を通つて涎が落ちるのは嗅覺神經の大切な反射作用で涎を促すと同時に又胃液、膵液等消化に必要な分泌をも亢進させるのである、從つて嗅覺脫失患者は得て消化器病に罹り易い、世間に消化の必要な事を知らぬ者は殆んどあるまい、此品は不消化物だの、之は消化し易いの、肉はどう卵は何う、齒當りは良い、舌觸りが惡いのと、論議する人はあるが嗅覺に就ては嘗て、彼れ是れ云ふ人を聞かない、消化不良症に陷つて「ヂヤスターゼ」や苦味丁幾などを服用しても一向効かない、そこで終に藥を恨み、醫者を恨み、食物を恨み、食ふ物が例じて感ぐ、胃腸を弱くする、衰弱する斯くの如くなつても嗅覺は猶ほ生活に直接必要はないといへるであらうか、世人が嗅覺に注意せぬのは實以て不思議である。

犬猫等の動物は皆本能（インスチンクト）として食物と否とを嗅覺で區別する、人間も未だ現今の如き進歩

のない太古時代に此インスチンクトが必ずあつたものと思はれる、支那の書物にも神農が草を嘗て藥を知つたとか、嗅へたとか記してあるのは畢竟嗅覺及び味覺に訴へて區別したものであらう、哺乳動物の或る者は嗅覺が最も大切な機關で眼よりも耳よりも一層缺く可からざるものである、嗅で食物を知り敵を知り、繁殖を增進するものもある、此等に取りては同種族の生存――一身の生命に是非共必要なのは嗅覺である、人類に於ては夫れ程でもないがまだ〳〵嗅覺が全くなくても良い程度迄は進化して居らぬ、故に食物を採るに際しても、消化に就ても嗅覺は中々必要である。嗅覺は衛生上にも必要である、火鉢の木炭の惡な臭ひは往々人をして頭痛眩暈小機元進、耳鳴、嘔氣等を催させるではないか、若し此時この臭氣を知らないと其原因を知る事が出來ないで、炭より發生する惡瓦斯の爲めに可惜一命を擲つのであらうが、幸ひに嗅覺あつて人に警告し直に障子を開けて新鮮な空氣を入れさせる、又た停滯した下水、惡水が何等の衛生思想もない無智の者にも嫌はれるのは第一臭氣の爲めではないか、故に嗅覺のない人は不潔に陷り易い、右の外嗅覺の精神上に及ぼす影響は他の感官よりも度が強い、電車の中などで腋臭を嗅いだ時と馥郁たる香水との嗅覺神經に及ぼす結果は如何であらう嗅覺の作用は實に劇烈といはねばならぬ、人の惡臭を知らねば良いが、己れの惡臭を知らないのは社會的動物

なる人間に取りては如何のものであらうイマヌエル、カントは嗅覺を以て最も不要の機關として居る、其言に曰く之を增進し之を精鋭にするとも果して何の得る所かある、得る所は唯だ嗅氣のみである、殊に群衆の場所に於て甚だしい、嗅覺あるが爲めに食慾變し易く、且つ一時的のものであつて到底滿足せしめ得るものでないと、カントは惡臭をも知る故嗅覺は不必要と爲したのだが良香良味は何を以て知る積りで有つたか、又たカント自身は良く食し、好んで食し、多く食せざりしが、之に反して佛人クロツク氏は嗅覺に映する良香を以て人世最高の快樂と稱した、眞逆夫れ程でもあるまいが兎に角前記の如く必要であることは明白である、又臭氣、香氣は夫婦間の愛憎に取りても大切なものであるから殊に若き未婚の人は嗅覺を鋭にして自分の惡臭を去り良香を來し他日結婚後夫婦間の親愛をば好し嗅覺によつて高めぬ迄も憎惡の念を起させない樣に心得て貰ひたい殊に日本で中流以下の人々は大抵奥樣が日常の御料理をするのであるから嗅覺は婦人に取つて殊に大切である其他色々の職工に商人も必要な事は論ずる迄もない、で嗅覺脫失は神經性のもので到底恢復する譯には行かぬが機械的障害あるもの例へば下甲介の肥大の如き又は腦の如きものは治療して効を奏するものであるから、カントならざる以上何人も鼻の治療は大切なものと私は思ふ」と。

第二十二節　鼻ツマリと其治療法

◆原因　これは元より獨立の病氣ではない、鼻加答兒、鼻茸、腫瘍、畸形並びに異物などが主なる原因である

◆症候　鼻加答兒は常初は單に鼻感冒として餘り重大視せざる爲め慢性にならしめたか、或は再三再四反覆してこれに罹つたために慢性になり、其病機は啻は鼻腔内に止まらずに、進んで上顎竇又は前額竇に波及し、或は鼻骨の肥厚等を誘發するもので、彼肥厚性鼻炎又は腺增殖症なども皆鼻腔閉塞症を來たすものである。鼻腔閉塞にかゝれば種々の障碍を起すものであるが、其主なるものは二つある。第一は鼻呼吸の障碍で是によつて患者は咽頭、喉頭、氣管或は胃腸等の加答兒を來たし、或はまた腦膜の變形を起して肺結核の素因をなし、又は上顎骨、鼻骨等の變形を來たして一見白痴の顏貌とならしむるものである。第二は精神上に及ぼす障碍で、反射的には喘息、心臟病、癲癇、小舞踏病、消化不良、遺尿症、頭重、眩暈、記憶力減少を來たし、或は精神に異狀を呈し躁暴性となり或は沈鬱性となるものである、就中教育上最も顧慮すべきは精神が散漫となつて學業の成績が不良になることである。

◆療法　輕いのは單軟膏、ワセリン等を鼻腔内に塗布すれば宜しい、其他原病を治すべきは勿論であるが、重いのになると、どうしても外科手術を受けなければならぬ。

第二十三節　鼻と精神障害

鼻ツマリがあれば精神に障害を來すものである、これに就て和蘭の專門家ガイ氏は鼻腔閉塞のために注意力の集中せざる、記憶力の減退せる、又は精神の不快なる、頭重や頭痛の習慣性にある者、又は物に激し易き、或は倦み易き等の症狀を有するものを「鼻性注意不能症」なる綱目の下に一括して發表するに至つて、始めて世人の注意を喚起し引續き之れに關する各種の研究成績を見るに至つた次第である。ガイ氏によれば、鼻の病氣の爲めに精神機能に特別の障害を起して、心理學上より見れば極めて健忘症に類し、記憶力減退して注意を一定の事物に集中することが出來得ない許りでなく、又腦の作用を刺戟して注意を促すことが出來ぬからして鼻性注意不能症と名づけた次第である、そして氏は此理由を說明して一種の疲勞現象なりとして居る。之れはどう云ふ理窟から來たかと云ふに、キー及ひレツチユウス氏等の研究によつて知られた鼻腔粘膜と頭蓋腔蜘蛛

網膜下淋巴腺とは交通すると云ふ理によつて、鼻腔の障害の爲め老廢物が頭蓋腔蜘蛛網膜下に滯溜するに由るものであると云ふことである。

ガイ氏はまた此外に一部性注意不能症なるものがあると云ふて、數學性、歷史性、文典性注意不能症等をも區別されて居る、尙ほまた同氏は、此病氣は獨り鼻病によつてのみ起るものではなくして、苟くも鼻腔閉塞を來たすべきもの、假令ば腺增殖症の如き病氣によつても亦來るものであると云ふて居る。

尙ほ精神障碍に就て金杉博士は左の如く云はれて居る。「人が一寸風邪を引き少しく鼻のつまることありても忽ち氣がボンヤリし總ての心持が常と全く變ることは世人の日常實驗することであります、況や鼻に一定の病あるときは永く其不快を繼續するもので其れが爲めに恐るべき精神障害を起すことは少からざることであります、故にフランスにては胸感冒と云ふ名が存して居る譯であります、精神機能障害中にも最も多く最も恐るべきものは所謂精神機能不和にして頭痛、眩暈、記憶力乏弱、作業怠慢憂鬱等の危險なる症候を起すものであります、次で起るものは精神鬱、不眠症等にして甚だしきものに至りては爲めに發狂するもの少からず、斯くの如き有樣なる故に學齡兒童等に於て此の病あるときは、學業も進まず常に同級の末席に居るか或は總年

落第のみ致すものであるが故に、私は常に申す處の鼻の病氣のある人間に學問を勉強せよ、事業に奮勵せよといふことは羸痩骨立せる馬に鞭打つて千里の行を計らんとするのと同樣である、學齡兒童が常に同級の末席にあり或は終年落第のみを繼續せるものが鼻の治療をした後で忽ち上席を占め、或は優等生になりしもの私の經驗に於ても數千人を下らざることである、何と恐ろしきものではないか、まだ注意すべきことは癲癇か鼻の病氣の爲めに起ることである、私の病院にて癲癇の患者の鼻の治療に由つて全治させしめた例は數十例あります、斯くの如き具合でありますから精神機能の薄弱なるもの、精神障害あるもの不眠症のもの氣の短きもの癲癇樣疾病の者等は是非とも一應鼻の檢査をすることは必要のことである」と。

第二章　鼻疾の養生法

第二十四節　鼻の手術を受くるの可否

病氣のことは醫者任せにするのは一番安全ですが、鼻の病氣に就ては大分世人の誤解を受けて居るから少しく鼻の手術を受くるの可否に就て述べませう、一時專門家が鼻と諸病との關係を八ケましく唱へて「鼻の病氣は獨り呼吸器に障害を及ぼす許りで無く、鼻から反射性に影作して神經衰弱、癲癇、弱視症、喘息、ヒステリー、四肢筋肉の痙攣や麻痺を起す所の運動神經障害、バセドウ氏病、月經障害、神經性の消化不良症を起すものであるから、是等種々の病氣は鼻の治療をすれば奇妙に癒ることもある」と云ひ出したが、何分にも奇を好む日本人の癖として、專門家がかう云ひ出したからにはそれに相違はあるまいと、新聞記者や小說家までが尻馬に乘つて盛んに鼻と諸病との關係を受賣出したが、彼の市に三虎を出すと云つた諺の如く「癒ることがある」と始め專門家の云つたのは一萬病は鼻を治療せば癒る」と、かう云ふ風に誤り傳へられて、何でも慢性病不治の病は鼻を治療するに限ると云ふので、難治の病氣は總て鼻科專門醫の處へ持て行くと云ふ奇觀を呈したのであつた。

併しながら總ての癲癇やヒステリーまたはバセドウ氏病や歸人病迄が、鼻を治療すれば必ず癒ると云ふものではない。否却て癒る場合は稀れであると云つた方がよい、併し稀と云へど癒つた例は確かにあるので、醫者の方では之を鼻性反射性神經症狀と名付て居るもので、今尙研究問題に屬して居る。

さて前に述ぶる如く總ての患者は鼻科專門家の門を叩いて、癒るつもりで手術を受けたが、中には無論癒らぬのもある、すると無學の者は、鼻の醫者は若山師醫者だと云ふて無暗に怒る。また生嚙りにも醫學とか生理學とかを少し許りウロ覺えに覺えた連中は「鼻茸や副鼻腔蓄膿症の手術は更も角も、下甲介は生理的必要のものであるから、之を切ると云ふのは抑も大間違である、だから決して癒りつこは無いし」などゝ知つた振を云ふが、それは云ふ迄も無く生理的の下甲介を切るのは間違に相違は無い、然したから鼻のつまるのは決して生理的では無い病的である。人は生理的に鼻より空氣を呼吸するものであつて、鼻腔内にて塵芥、バクテリヤを濾過し、また空氣に適度の濕度と溫氣とを與ふるもので、鼻の大切なる理由も茲に存すれば、醫者が鼻毛を剃つてはいかんと八ケましく云ふのも此理由である。然るに此作用が不完全であれば則ち病的であることは頗る明白なる事實である、それで下甲介が鼻の閉塞る原因をなし、則ち病的である場合には適當の程度まで之を小さくせねばならぬ、それには電氣で灼くこともあれば或は切ることもあるので、下甲介を切ると云ふことが必ずしも間違ではないのだ。然し手術は簡單の樣でも適度と云ふことはなか〳〵難いものであるから、手術は必ず多年專門的に修養を積んだ眞の專門家に受けねばならぬ、モルヒネは恐るべき毒藥であるが良醫が之を用ひれ

ばよく瀕死の病者を救ふこともあると同じて、鼻の手術も手術其ものの惡いのでは無く、手術者の善惡によると云ふことを忘れてはならぬと共に、鼻さへ治療すれば何病氣でも癒るなど云ふ間違つた考へは捨てねばならぬのである。

若し長らく鼻がつまつて病が重いとか云ふことであつたら速に治療を受くるがよい、此場合によし癲癇やパセドウ氏病の如きが癒らぬにしても、鼻の呼吸が樂になり、頭が輕くて快活になるだけでも、充分幸福を感謝する丈けの價値あることゝ思ふ。

第二十五節　鼻の病氣を知る法

少しでも病氣に罹つたと思ふ時には醫者に診て貰ふが一番だが、素人自身が鼻が惡くなればどうなるか、則ち鼻の惡いと氣の附く白覺症を覺え置くも無用であるまい。即ち鼻が閉塞ること、鼻汁の分泌過度なること、惡臭ある膿樣の鼻汁の出ること、嗅覺の障害と云つて、物の香臭がよく判らぬこと、衂血等あらば鼻の惡いことゝ心得て、一度診斷を受くるのが安全であつて、俗に鼻汁の出る子は丈夫などゝは大間違ひであると心得

るが宜しい。併し所謂鼻性反射性神經症狀の中には鼻の方には何等の自覺症狀（前に述べた樣なこと）なくして、俗に鼻の障子と云ふ鼻中隔に、骨或は軟骨の隆起せる部分があつて、之を手術して奇効を奏することもあるから、前項に擧げた諸殊に、喘息の如きは同じ治療を長く繰り返して効驗の無い場合には、鼻の自覺症狀の有無に拘らず、一度鼻の診察を受くる方がよい、喘息は確かに鼻から來ることが多い樣である。

第二十六節　肥厚性鼻炎と神經衰弱

鼻と神經病との關係に就ては、故ハック氏が、始めて頭痛、癲癇、神經衰弱は鼻の故障に原因すると云ふことを唱へ出して大部贊成者がある、實際鼻の病氣の爲めに呼吸の通ひが惡くなると、甚だ不愉快なもので、これが原因となつて、頭痛や記憶力減退を來たし其極神經衰弱となることがあり、尙ほまた此際に鼻を手術すれば、全癒せる例もあるが、此等は肥厚性鼻炎と云ふ病氣に限るので、彼或一派の醫師の云ふ如く、神經衰弱は何でも鼻さへ癒せば癒ると云ふ程關係の深いものでは無い。

第二十七節　鼻の病氣と小兒の智慧

この問題に就ては專門家谷村氏の說は予輩の意見と同一であるから、茲には之を紹介することにする一世人はよく鼻位と馬鹿にして居る鼻が又小兒の智慧を鈍くするのであります、鼻が健康でなく殊に寒冒などに罹りますると鼻の奥、咽頭の上の方の兩側に小なる管があつて耳の中と交通して居ります、今指で鼻をつまんで强き呼氣をすると兩耳にゴーンと響くのは空氣が咽から此の管を通ふて耳の鼓膜に當るのであります、此の管を歐氏管と名づける、此の管は耳には大切であるが、又耳の病の十中八、九は此の管の爲め鼻や咽の不潔物を耳の中へ輸入して耳病を起すのでありまして、小兒に耳病の多いのはつまり此管が大人より割合に廣いから鼻から耳へ不潔物を送るのに便利がよいせいであつて其外に、小兒が感冒とか「インフルエンザ」とか痲疹とかで咽が腫れると、此の管も腫れて耳の中に病を起すのであります、斯樣な線路で耳病が起り、爲めに聽えが遠くなり、精神の發育を妨げるので、鼻と咽とは實に間接の原因を致すのであります。

又以上の外に鼻の病が小兒の躰體、精神の發達を障害するは著しくありまして、小兒の鼻が健康でなく時

々寒冒などに罹ると、前の歐氏管のある間へ、一つの腫物が出來まず、此の腫物を腺樣增殖症と名づけ、之れが頭の血の循環を防げて、腦の働きを鈍くしたり、頭痛、喘息、寢小便など種々の神經病を起すのであります加之、鼻のつまる小兒は口で呼吸しますから口內炎が起つて、涎を流し、齲齒が增えるため食物を充分に嚙まなかつたり、鼻や、咽の不潔物を呑み込んで、消化を害したり、呼吸が充分でないから胸廓の擴張が十分でない爲めに、胸廓が次第に變形したり且つ血液の酸素を吸收して、炭酸を排泄する力が足りないから貧血をして來るとか、總て小兒を虛弱、多病にする虞がありまず、のみならず高だしいものは顏貌が變化して馬鹿顏となり智慧も健康の小兒から見ると大變足りないのであります、世の中で馬鹿とか、阿呆とか云はれる小供は大概、口を半開けにして涎を流がし、鼻汁を垂れて居る、之れは必ず鼻に故障があつて呼吸が出來ないから口を開けて呼吸して居るのであります、此れ等の不幸なる小兒は大概耳も遠いのですが、又耳が遠くなくつて鼻や咽頭に病があつて阿呆の樣になる事があるのです」と。

第二十八節　寒冒と鼻の疾病

寒冒から起る鼻の病氣は澤山ある、卽ち鼻加答兒、これは一週間位で癒れば云ひ分はないが、若しそれが長く續いて、鼻が閉塞つたり、膿のやうな濃い汁が何時までも出るやうであつたら、速かに鼻の治療を受けて早く癒さなければならぬ、若しそれを放置つて置いて、度々反復して鼻風邪を惹く內には、遂に肥厚性鼻炎と云ふ病氣になつて、神經麻痺其他種々の病氣を惹起すことになる。

それから副鼻腔と云ふて、鼻腔から交通して居る骨の空洞が兩側に四ケ處あるが、其處に膿のたまる病氣を起したり、或はまた慢性になつて持續的に鼻がつまつて、手術をせねば癒らぬやうな病氣を惹起したりすることもある。其他にも尙ほ寒冒から來る病氣は澤山あるから、寒冒を惹いて水鼻汁が出たり、嚏噴が出る位の時に早く注意して癒すやうにせねばならぬのである。

第二十九節　氣溫と鼻の疾病との關係

鼻は呼吸の第一の道路であつて、肺に入る空氣は一種度まで鼻の中で溫められるものである、つまり吸入する空氣は是非とも一定の溫度を保たねばならぬのであつて、鼻は外氣の寒冷なる時は、これを適度に溫める作

用を持つて居るのであるが、これはまた程度のあるもの故、外氣が餘りに寒ければ鼻は到底これを必要の溫度にまで溫むることは出來ないから、斯樣の場合には鼻加答兒を起し、延いて、喉頭氣管、氣管枝、肺にまでも炎症を惹き起すものであるから、外氣の餘りに寒冷なるものは害になるものである。

それからまた吸入する空氣には一定の濕潤が必要である、乾燥した空氣を吸入すれば、矢張呼吸器に疾患を來すものである。嚴寒にかゝる病人の多く生ずるのは空氣が寒冷でしかも乾燥して居る爲めである。尤も鼻が健全であれば鼻腔の粘液を以て適宜の溫度を與へるものであるが、矢張これも程度問題であつて、餘りに乾燥せる空氣にあつては、矢張充分これに濕氣を與ふることが出來ないから、從つて呼吸器に害を及ぼすことになる、彼のストーブを燃いて居る室では、常に蒸氣を發散せしめて居るのは、此空氣の乾燥を豫防する爲めである。

第三十節　惡臭と鼻の疾患

鼻は嗅覺作用を掌るものであるが、臭氣があるとそれを嫌ふて呼吸が淺くなり、從つて必要なる酸素を充

分に吸入することが出來ないから、從つて種々の障害を受くることになる。また嗅神經は疲勞することがあつて、殊に他の機關よりも疲勞し易い、同じ匂ひを長く嗅げば終には其香臭が感じなくなる、休息せしむると又容易に恢復する、併し一度疲勞した時は恢復しても其力が前より衰へて居るのは勿論である、此關係によつて農夫は糞便を臭いとも思はず、不潔の處に居るものは其不潔なる臭氣を忘れて所謂臭いもの身知らずと云ふ俗言を生ずるに至るのであるから、此點は御生上大に注意を要するものである。

第三十一節　鼻の洗滌法

鼻腔を洗ふ用器は「イルリガードル」で、これに藥液を入れて高い處にかけ、患者を椅子によらせ、少し俯屈させて口を開かせて呼吸に都合の良いやうにする、また洗滌中は鼻から呼吸しないやうに注意させて左の手を患者の後頭部に當き、右の手に嘴管を取り、靜かに鼻腔に挿入して洗ふのであるが、此際に餘り水勢を強くすると患者が嗆せるから注意を要する。洗ふ時間は、大抵五分か七分位でよろしく、藥液は硼酸水を用ひるが臭鼻には過滅俺酸加里水、衂血には單寧酸水を用ひる、溫度は普通は微溫であるが、衂血、出血等には冷めた

いものを用ひる。

第三十二節　藥液の塗布法

鼻腔内に收斂藥、防臭藥又は止血藥などを塗布するには、卷綿子といふ金屬性の小桿を用ふるものである、此小桿は其尖端が螺旋狀になつて綿を捲くに都合よく出來て居る、これに消毒した脱脂綿を卷き、藥液を浸して鼻腔内に挿入し粘膜に塗るのである。また或は紙捻子を緩く捻へ、尖端をバサ〳〵にして、これに藥液を浸して粘膜に塗つても宜しい。

第三十三節　鼻に藥の吹き込み方

これは吹粉器と云ふ道具（耳に吹き込むものと同樣）を以てデルマトールなり、イトロールなり與へられた藥品を、鼻の中に吹き込むのであるが、其の方法は耳に粉藥を吹き込むと同樣の仕方でよろしい。

第三十四節　腐　蝕　法

鼻粘膜の腫瘍其他を腐蝕するに用ひる藥品中、硝酸銀、格魯兒等の如きは、其溶液を卷綿子の小桿に着けるか、或は綿に浸したのを捲いて患部に觸れ、然る後五十倍の食鹽水で洗つて置くのである。また場合によりては藥品を結晶其まゝで用ひることもある、斯樣の場合には「ピンセット」で挾んで、それを患部に觸れるのである。

第三十五節　電氣燒灼法

これは鼻腔内の腫瘍を除去する方法である、即ち電氣の燒灼導子を遮斷のまゝ鼻腔内に入れ、患部に觸れた後通電して燒灼し、抽き出す時には再び電流を遮斷するのである。

第三章　副鼻腔其他の疾患

第三十六節　上顎竇膿症と其治療法

◆原因　「インフルエンザー」後に來るものは最も多い其他齲齒に來り、傳染病に續發することもある。

◆症候　何時も鼻加答兒に羅つたやうな症狀があつて鼻汁の分泌多く、度々鼻をかまねばならぬ、鼻汁は漿液性或は粘液性で、時々膿性の濃厚なるものを出し、時として惡臭を感ずることがある、患者は鼻ヅマリを患ひ、頭痛、頭重其他鼻腔閉塞に起る諸多の神經症狀を發し、また夜間睡眠中鼻汁を嚥下する爲めに、間々胃病を起すこともある、また重症にあつては鼻根眼窩部に鈍痛を發し、時としては發作性に鑽痛を起し、また或は下眼窩神經痛を起すことがある。

◆療法　輕症にあつては、鼻腔内より中鼻道洗滌を行ひ鼻根氣よく受くれば自然に治癒することがあるが、手術的療法を受くるのは最も確實である。

第三十七節　前額竇潴膿症と其治療法

◆原因　前者と同樣の原因にて發病するものである。

◆症候　前額竇とは、前眼骨の眉の上内方に當る部分に左右各々一個づゝある腔洞のことであつて、これが常

に鼻腔に通じて居るものである、本症は即ち此處に膿の溜る病氣であるが、鼻との交通孔が開いて居るものは唯鼻汁に膿を混する位で、格別の苦痛を來さぬも、此交通孔が非常に狹いとか、或は閉塞せらるゝ時は、鼻腔閉塞に起る神經症を劇しく起し、また上眼窩神經痛を發して、頭首の前屈または咳嗽飲酒等には劇しく之を憂し、或はまた眼の炎症を來し、甚だしきは竇の内壁を破壞して腦膜炎を起すこともある。

◆療法　鼻茸、肥厚等の障害の爲めに交通孔の閉塞せるものにあつては、これを除去して後、前眼竇洗滌管を以て洗滌するがよろしい、然れども重症にあつては專門醫より根治手術を受くるが最も確實の療法である。

第三十八節　腺樣增殖症と其治療法

この病氣は學齡兒童に多く、瞬機能とは重大なる關係を有するものであるから、斯病の太家久保猪之吉博士が衞生新報誌上に述べられたところを轉載して詳述し、教育家並びに父兄の注意を大に喚起しよう。

久保博士「咽頭扁桃腺は鼻咽喉蓋に當つて生理的に存在するものであるが、尋常の者にあつては垂れて後鼻孔迄達することはないのであるが、若しもそれが後鼻孔の上緣を越えて垂るゝ樣であれば、それは皆病的に肥

大したのである。そして此肥大は六七歳から十四歳に至る兒童には最も多く來るものであるが、大人には稀である。

此扁桃腺肥大を有する兒童は、容貌に一種の變形を來すので、一見して所謂腺增殖症容貌即ち一種の癡呆ることが判るのである。其容貌は、口は半ば開き、口元何となく緩み上唇垂れ下つて居るので鼻翼の左右から上唇に向けて生ずる鼻唇溝と云ふものが無くなり、目尻は下つて一種の癡鈍の相となるのである。其外口腔には特別の變形を生ずる、即ち口蓋穹窿は著しく凹陷し、上顎左右齒槽突起間狹小となり、上顎門齒部突出し、齒列が亂れて俗に云ふ八重齒、出齒なる。そして甚だしきものになると體格までが畸形となつて、胸廓は狹く鳩胸型となり、脊柱は彎曲して後方に突出するに至るものである。

此等の畸形の出來る原因は、骨格の發育が未だ終らざる兒童にあつて、鼻の呼吸が停止せられた爲めである我々の呼吸する自然の道は鼻腔、咽頭、喉頭、氣管を連絡したものであるけれども、腺增殖症を患ふる兒童にあつては、鼻腔の後門が閉塞せられる爲めに、鼻呼吸が障害せらるゝので、どうしても口腔で呼吸しなければならぬやうになるのである。尤も日中は自分の意志で以てどうかかうか鼻呼吸を營むことがあるけれども、

夜中に至つて睡眠つて了へば、困難なる鼻呼吸は廢して了つて口呼吸を營むに至る、さうすれば鼻道の代りに口腔内に呼吸氣の通路を求めなければならぬに至るが、蓋が舌背は尋常の人にあつては口蓋に密着して居るから、口蓋穹窿は壓力の少い鼻腔の方に向つて高まり、舌背との間に假の氣道を形成する、さうすると今度は口蓋が狹小くなつて前方に伸ぶるので齒牙交換時に際して齒牙が一列に整列する餘地が無いので遂に重なり合ふに至るのである。また口呼吸は鼻呼吸に比して淺く力が無い爲めに、肺内にての瓦斯交換が不充分であるに隨つて胸廓の運動惡しく胸廓にも畸形を生ずることになるのである。それからまた腺增殖症の兒童に夜尿症の多いのも矢張瓦斯交換が不充分の結果炭酸瓦斯中毒を起すのであらうとプレスゲンなどは考へて居る。

此病に罹つて居る兒童は鼻汁を能く嗅むことが出來ない爲めに、鼻汁が溢れ前鼻孔に出て俗に云ふ二本棒を垂すことが多い。また夜間睡眠中には軟口蓋が垂下する爲めに舌根との間に、雜音を生じて鼾聲となるものである、されば鼻汁を垂らす子供は丈夫だとか、英雄豪傑を誌すによくある鼾聲雷の如しなどあるは何れも間違ひであると云つて宜しい。それから又鼻腔に鬱血があるので衄血の出ることも多い、次には歐氏管の狹窄を來たして難聽を訴へ時としては聾啞と見做さるゝ場合もあるのである。

腺增殖症は以上述ぶるが如く體格及び營養上に障害ある許りで無く、此種の兒童は精神機能の上にも著しき障害がある、始めて此點に注意したのは丁抹の醫師ウ井ルヘルム、マイエル氏で、腺增殖症と命名したのも矢張同氏であつて千八百六十八年のことである。

同氏は其當時腺增殖症を有する兒童に就て發音の障害（眠音N、M等の變じてD或はLの如くひゞく等）聽に特有の容貌（前項に述べなる）鼻汁流出等の諸症狀の外に常習性に頭痛のあることを注意したのであつた其一例として見べるきは、十歲の小兒の烈しき頭痛があつたのに、久しき間臭剝または下痢等を與へても無効であつたが、腺增殖症の手術によつて全治したのを報告して居る。して氏の曰ふには、小兒に於ける腺增殖症から頭痛は後頭部又は頸部又は前頭部に限局して來ることがあり、或はまた全部に渉ることがあると。そして頭痛の來るのは腺增殖症の爲めに神經の壓迫を受けるが爲めであると說明して居る、假へば增殖せる咽頭扁桃腺上に指頭を以て壓を加へたる時、または腺增殖症手術後に後頭部又は頸部に頭痛を訴へるなどは遺憾の消息を漏すものである。

我が日本に於ては未だ詳細なる統計を見るに由なけれども、極めて多數に存在することだけは我々臨床家の

意見が一致して居る、それで予も過般より小學兒童の檢査を始め、腺增殖症に於ても注意を怠らずに、目下精細なる檢査を經たるもの五百名に達して居るが、其結果は左の通りである。

高度の腺增殖症	三例	〇、六%	
中等度の腺增殖症	九五例	〇九、〇%	
輕度の腺增殖症	九六例	一九、〇%	
總計	一九四例	三九、〇%	

此表によるも學齡兒童の多數が此病に罹れることを知るに足るのである。

腺增殖症を有するものは著しく鼻呼吸の障害があつてガイ氏の所謂注意不能症となり精神機能の障害となる外、歐氏管の狹窄に原因する中耳「カタール」があつて難聽があるので、外觀上著しく智識の進歩が遲い樣である。そして此等の兒童は腺增殖症の手術後精神が爽快となり頭腦も明晰となり、學業の成績もまた從つて佳良となるのである、けれども腺增殖症を有する總ての兒童が注意不能症に罹ると限つたものではない、可なり大なる腺增殖症を有する兒童であつても成績の佳良なるものもあるのである。

咽頭扁桃腺肥大は獨り以上の症狀を招く許りでなく、時としては反射性に癲癇を來たすことがあれば又舞踏病の原因となることもある。

咽頭扁桃腺の肥大と同時に口蓋扁桃腺の肥大の來ることが多いものである、口蓋扁桃腺と云ふのは口を開いた時に左右口蓋間の部に存する桃仁に類するものゝことで、尋常人にあつて口蓋間の邊緣を出づることが無いのが通例であるけれども、肥大症にあつては邊緣を越え甚だしきは左右中線に於て相接觸する程大きくなることがある、そして此れもまた鼻呼吸に障害を起し聾聽を來たし精神機能に變化を起すことは咽頭扁桃腺肥大よりは稍劣いものであると。

◆療法　手術的に增殖せる部分を除去するがよろしく、其他一般强壯法を守らしむるのである。

第三十九節　篩骨蜂窩潴膿症と其治療法

◆原因　上顎竇潴膿症と同樣の原因に起るものである。

◆症候　鼻腔閉塞の外、鼻根部の鈍痛、鼻背の腫大等を來たし、また蜂窩粘膜が漿膜樣の變性を來たし、骨胞腫と云ふて骨壁が鼻腔內に膨出することがある。

◆療法　矢張手術を受けねばならぬ。

◆原因　前者と同樣である。

◆症候　頭痛が劇しく、殊に後頭部、眼の深部に疼痛があつて、視力に障害を來し、膿汁は鼻咽腔へ流出するものである。

總て潴膿症は多く一二或は二三症合併して來ることが多いものであり、また各個の鑑別は專門家で無ければ出來ぬものである、それに此等は何れも根治には手術を要するものであるから、此等の疾患に疑はしき疾患を有する場合には速に專門家の施治を受くるがよい。

◆療法　手術を受くるがよい。

第四十一節　鼻咽腔纖維腫と其治療法

◆症候　著明なる鼻腔閉塞を發し、甚だしきは兩側同時に閉塞せられて全く空氣を通ぜざるに至り、其他腫瘍